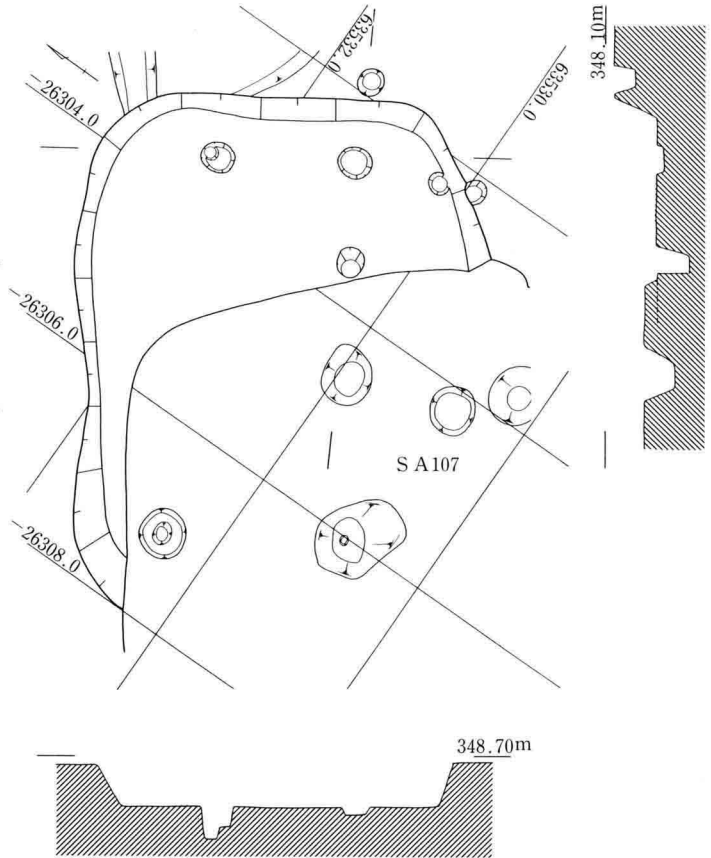


第43图 SA 108 遺物実測図

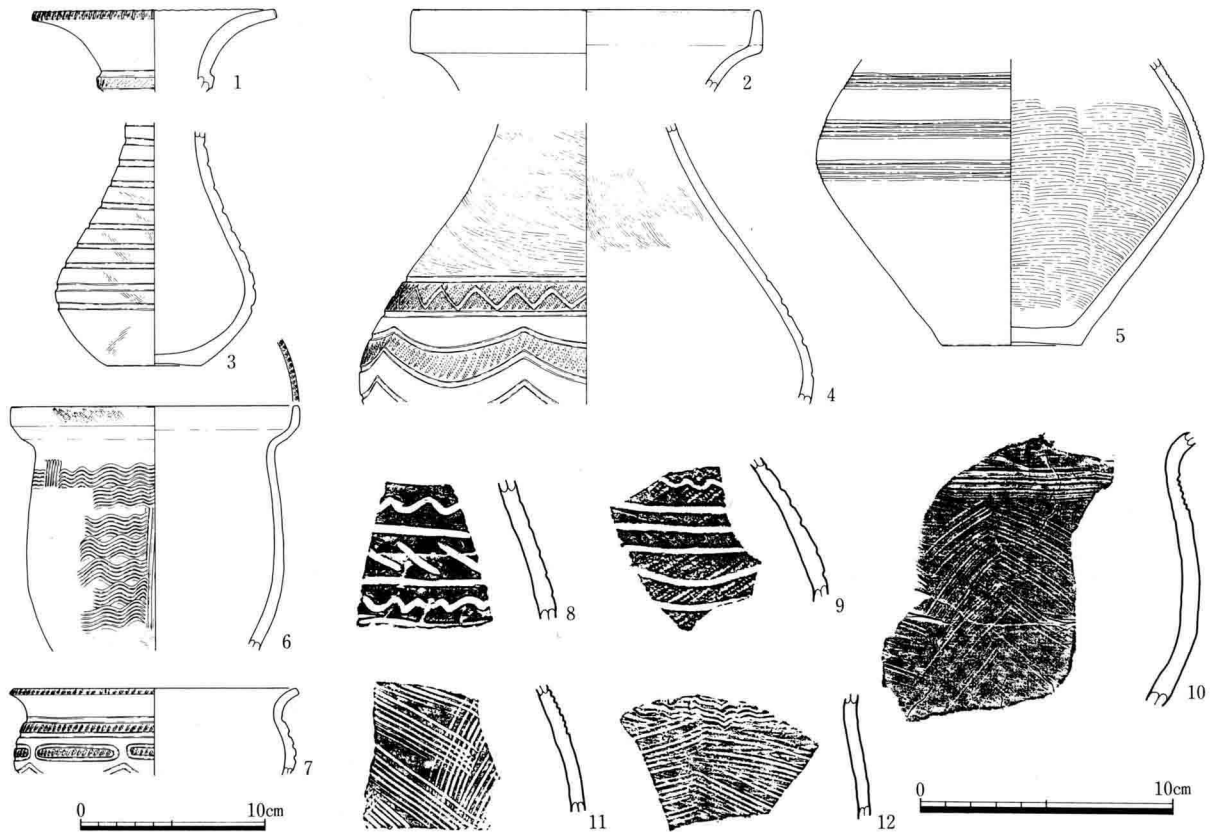
S A 109 (B区)

S A 107・S C 1・S K 103・113と重複関係にある。南側約半分をS A 107に破壊されるため平面形は判然としないが、隅丸長方形の住居となるであろう。支柱穴は2本のみ検出され、平面形はおそらく長方形を呈するものと考えられる。床面は比較的明瞭に検出されたが全体に軟弱でしまりがない。

出土土器〔第45図〕には壺(1~5・8・9)、甕(6・10~12)、台付甕(7)がある。1は細頸で口縁端部は縄文を施したのち篋状工具による刻みを併用する。3は頸部から胴部にかけて沈線文を、5は楯描直線文を施す多段横帯文となる。6は受け口状を呈する甕で直線文を縦方向に施文したのち波状文を施文する。7の胴部には縄文を施したのち工字文のような沈線文区画による文様を施文している。形態などから台付甕であると想定される。



第44図 S A 109実測図

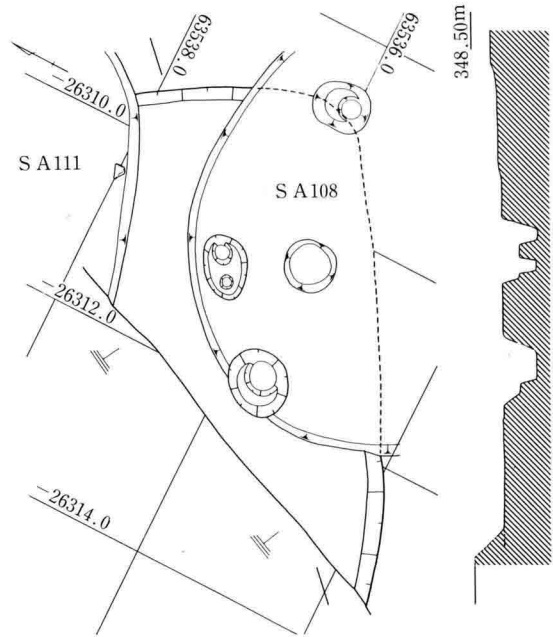


第45図 S A 109遺物実測図

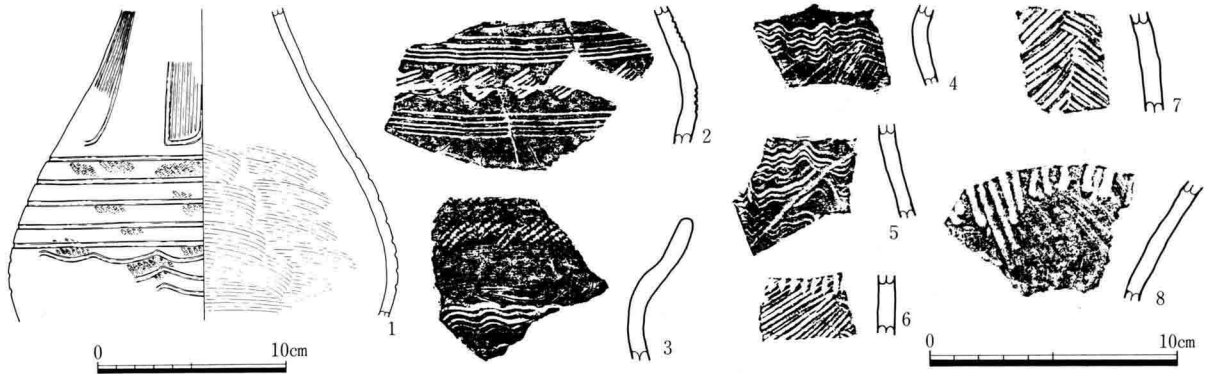
S A 110 (B区)

S A 108・111と重複関係にある。西側は調査範囲外であるため平面形は判然としない。残存する部分から平面形は長方形を呈すると考えられるが、掘り込みが不明瞭で床もはっきりしていない。柱穴は2本検出したがいずれも柱痕を伴う。

出土土器〔第47図〕には壺(1・2)、甕(3~7)、台付甕(8)がある。1は頸部から胴部にかけて沈線区画内に楕円直線文を施す懸垂文を施文する。胴部は5本の沈線文と3本の波状沈線文を施したのち所々に縄文を充填する。3は弱い受け口を呈する甕で頸部に波状文を施文する。6は羽状文を施文する胴部破片で篋列点文を巡らす。8は底部付近の破片であるが「コ」の字重ね文を施す台付甕であると思われる。



第46図 S A 110実測図



第47図 S A 110遺物実測図

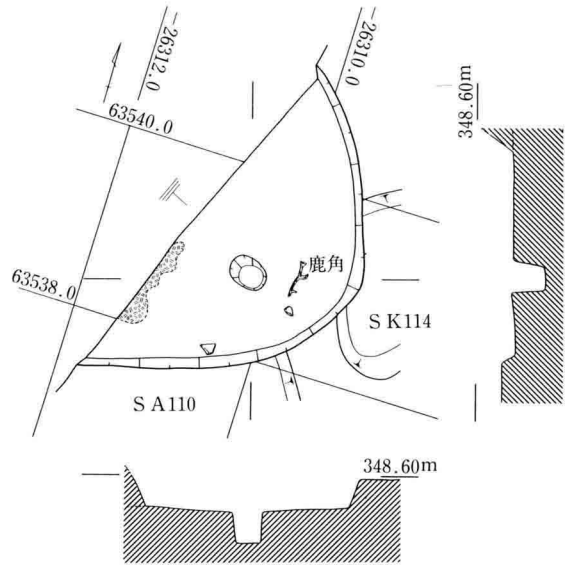


写真73 S A 110付近

SA111 (B区)

SA110と重複関係にある。範囲内では1/4程しか確認できず、大半は調査区域外になってしまうため規模などは不明である。平面形も判然としないが残存部分より隅丸方形を呈するものと想定される。支柱穴は1本のみ検出され、また調査区壁際の床面には炭化物の散布が確認されたが、炉が付近に存在する可能性を予測させるものであろう。

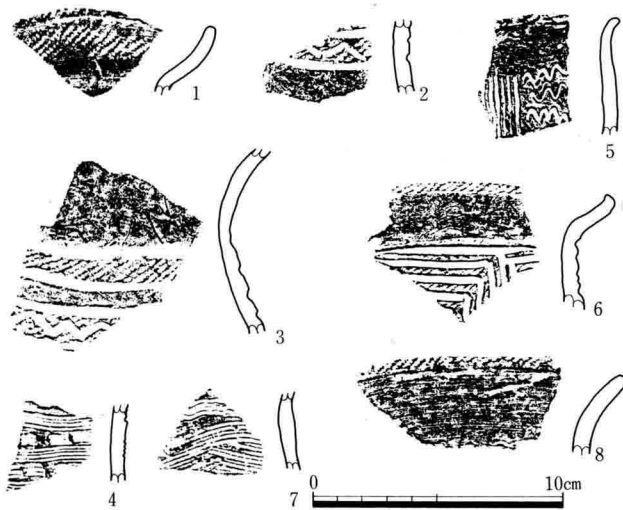
出土土器 [第49図] には壺(1~4)と甕(5~8)がある。1は緩い受け口状を呈する口縁部破片で縄文を施す。6は「コ」の字重ね文を施文する台付甕となる可能性もある。また柱穴の脇の床面に鹿角が出土している。全体的にかなり脆くなっている状態であるが、鹿角自体には加工など手を加えた痕跡は観察されない。



第48図 SA111実測図



写真74 SA111



第49図 SA111遺物実測図

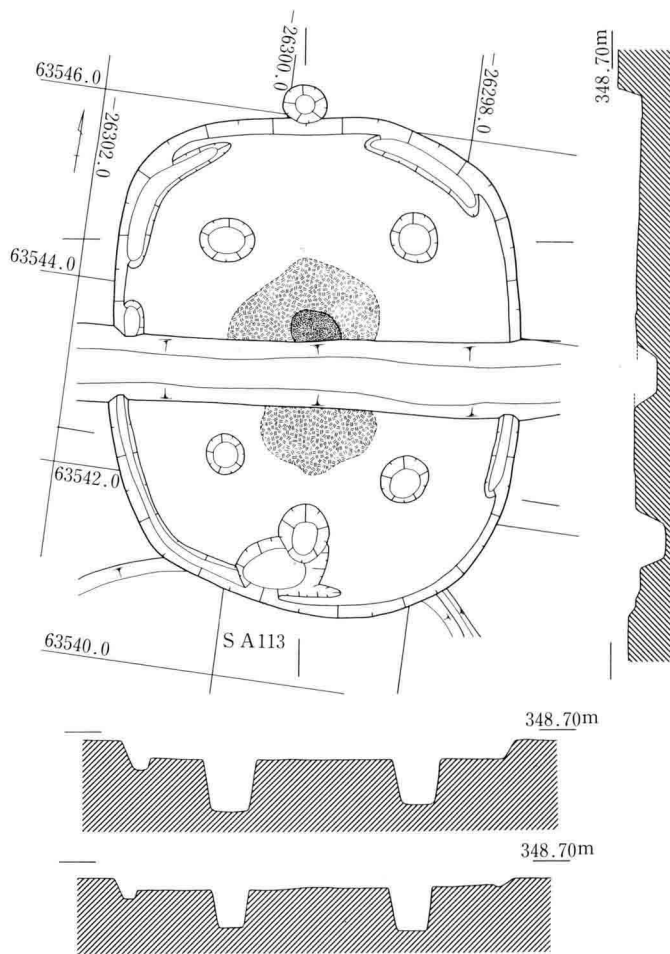


写真75 鹿角出土状況

S A112 (C区)

S A113と重複関係にある。5.31m×4.36mを測る隅丸方形を呈する住居である。支柱穴は4本方形配列となる。住居南の壁際中央に支柱穴が検出され、そのすぐ脇には出入り口施設と思われる浅い掘り込みも検出されている。壁際には所々とぎれはするものの、深さ6cm程の壁溝が全体に確認されている。住居の中央には中世に比定される溝SD2が横切り床面にまで破壊をうけ、炉もこの溝に一部破壊を受けるが住居中央に検出されている。床面を若干掘り込んだ地床炉で、周辺には炭化物が広がっており、床面は炉を中心とした支柱穴間において非常に堅緻でその他は軟弱となる。施設など比較的明瞭に検出できた住居跡である。

出土土器〔第51図〕には壺(1・4・5)と甕(2・3・6)がある。出土量は比較的少なく小破片が多い。壺は大頸傾向がうかがえ、5にはボタン状貼付文を巡らしている。4・5は同一個体である。甕は波状文を施文する。3の頸部には簾状文が施される。6も頸部に簾状文を施すが2本単位の楕状工具で縦方向に施される。



第50図 S A112実測図

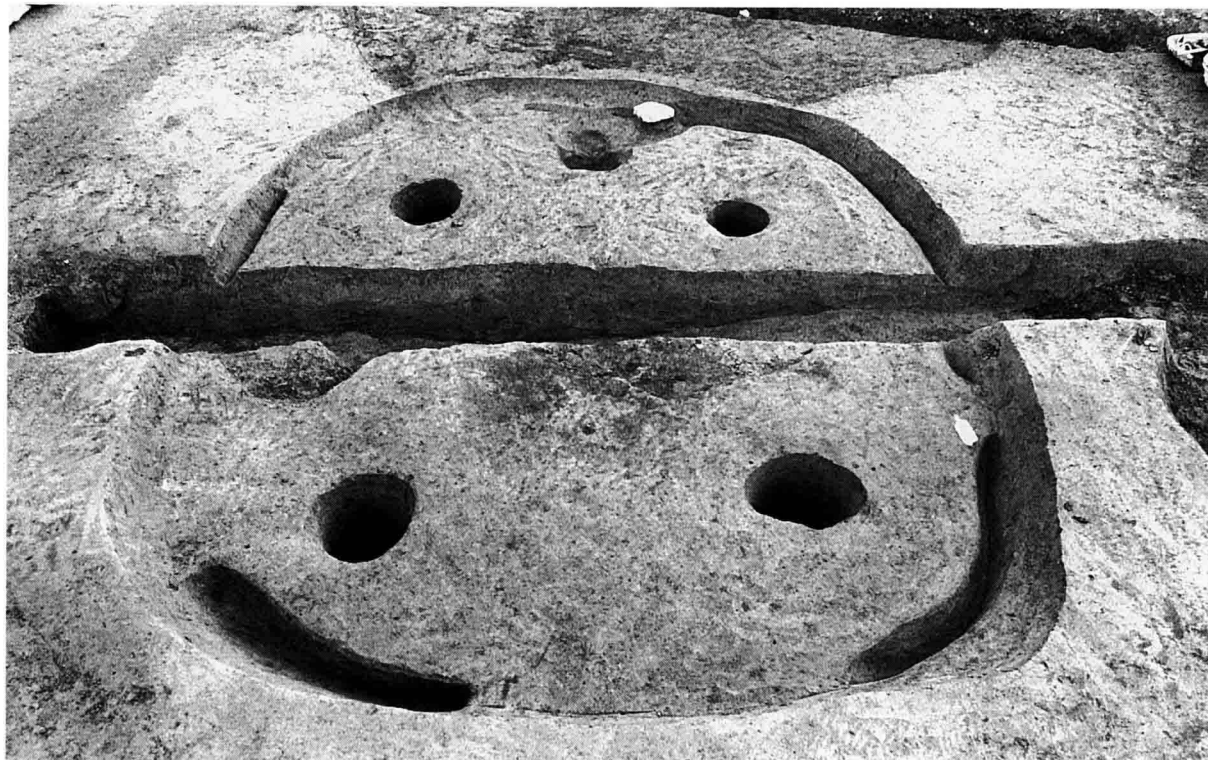
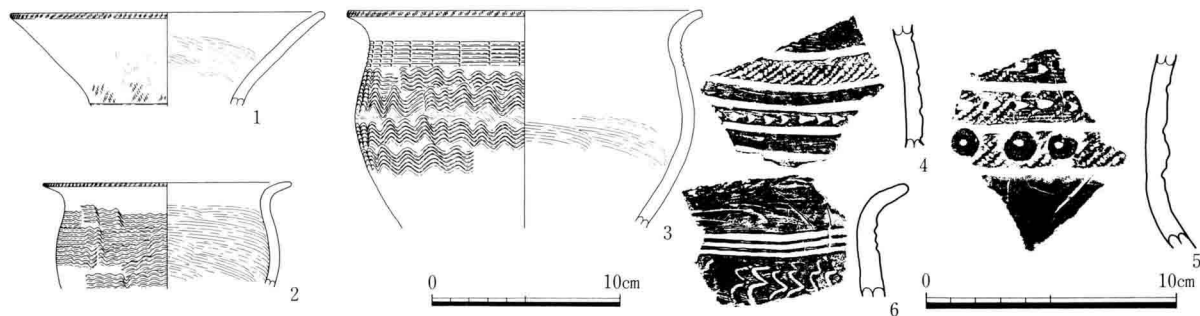


写真76 S A112

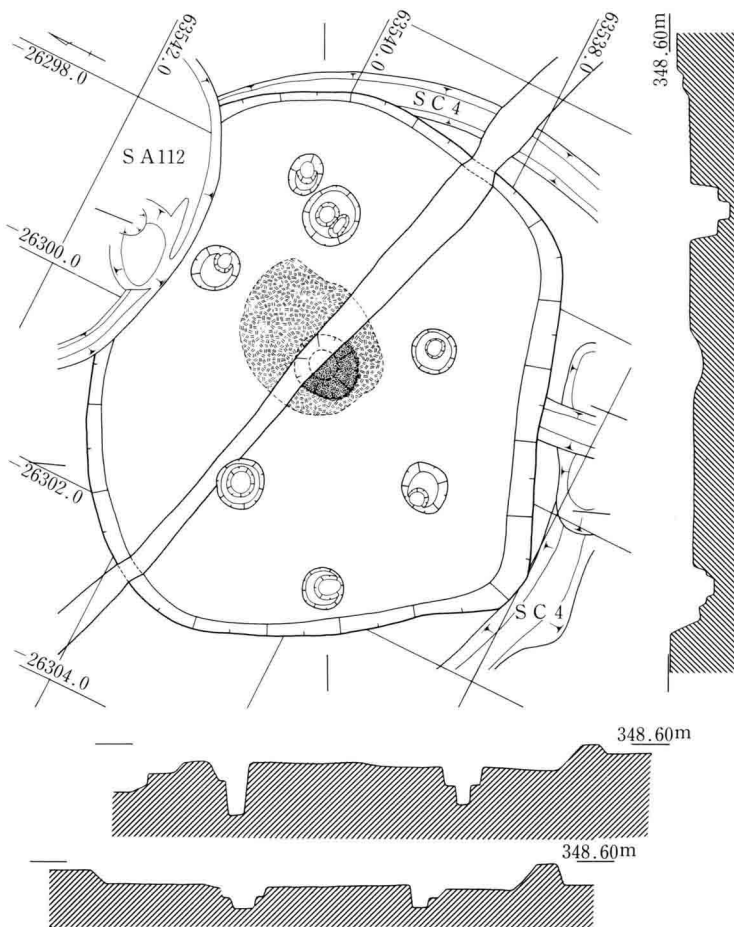


第51図 SA112遺物実測図

SA113 (B・C区)

B調査区とC調査区に跨って検出された住居でSA112・SC4と重複関係にある。5.78m×4.88mを測る隅丸長方形を呈する住居跡で、支柱穴は4本検出され平面形は歪んだ方形を呈するが、調査区の跨った未検出部分に存在する可能性もある。主軸上の壁際には支柱穴が2本検出されている。炉はB区にのみ検出され半分は未検出であるが、床面を10cm程掘り込んだ深めの炉となる。炉の周辺には炭化物が広がり、床面は炉を中心として支柱穴間において非常に堅緻で、その他は軟弱となる。土器は北東壁際に纏まって出土しているが、その他からは小破片のみを出土した。

出土土器 [第53図] には壺(1~3・5~9)、甕(10~15)、鉢(4)がある。壺は全体に太頸化し、3のみ受け口状の口縁部となる。4は内外面共に刷毛調整されるもので、口縁端部に面取りが施される。



第52図 SA113実測図

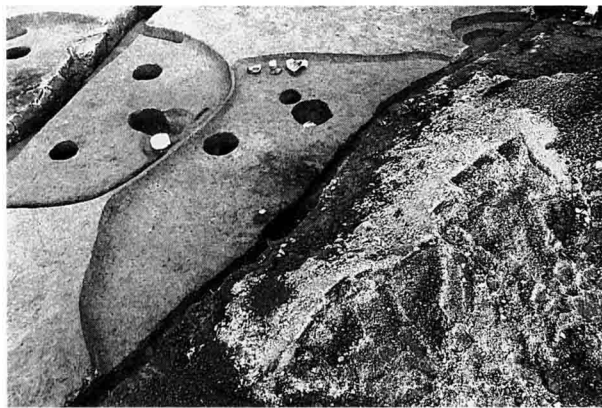
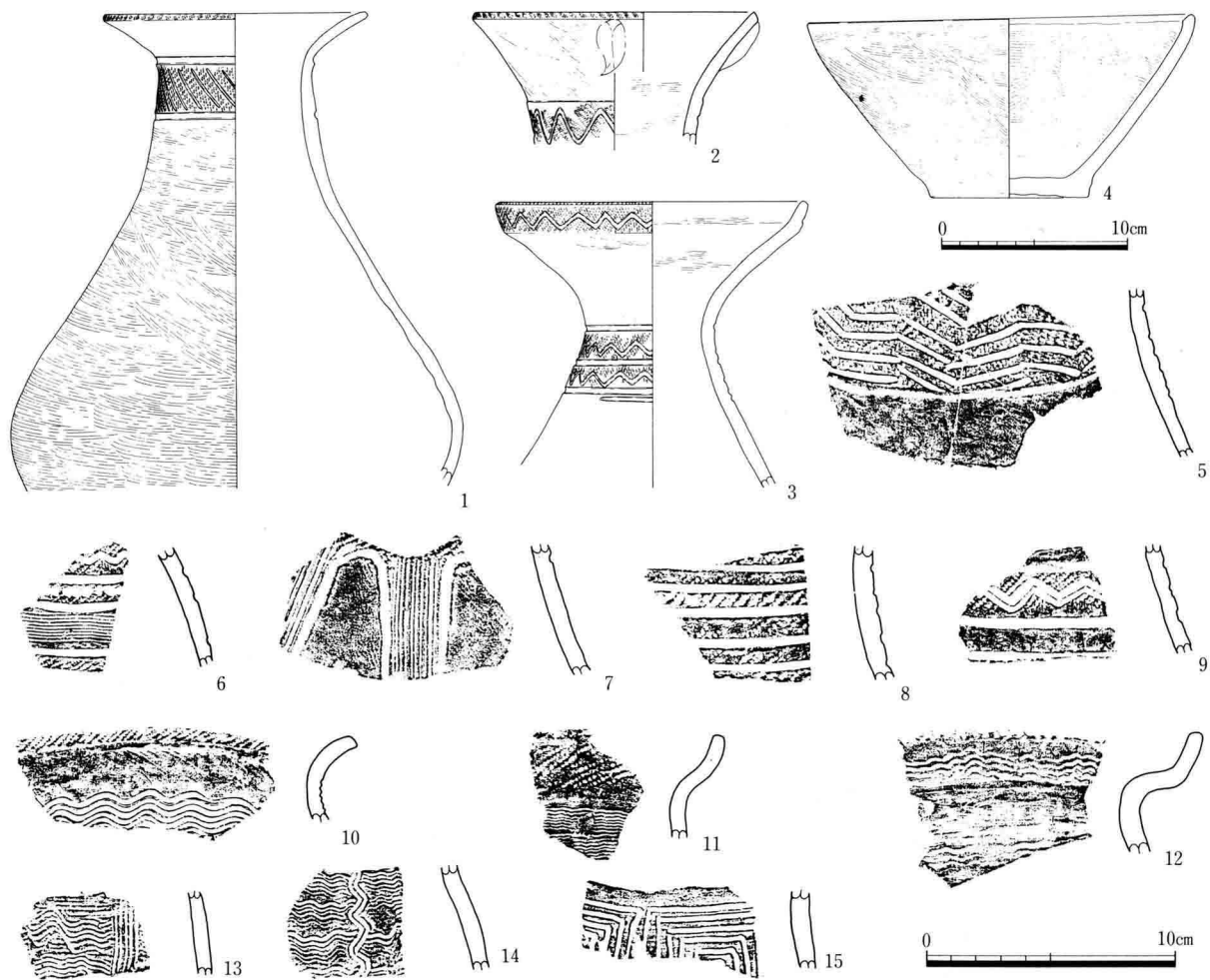


写真77 SA113 (C区)



写真78 SA113 (B区)



第53图 S A113遺物実測図

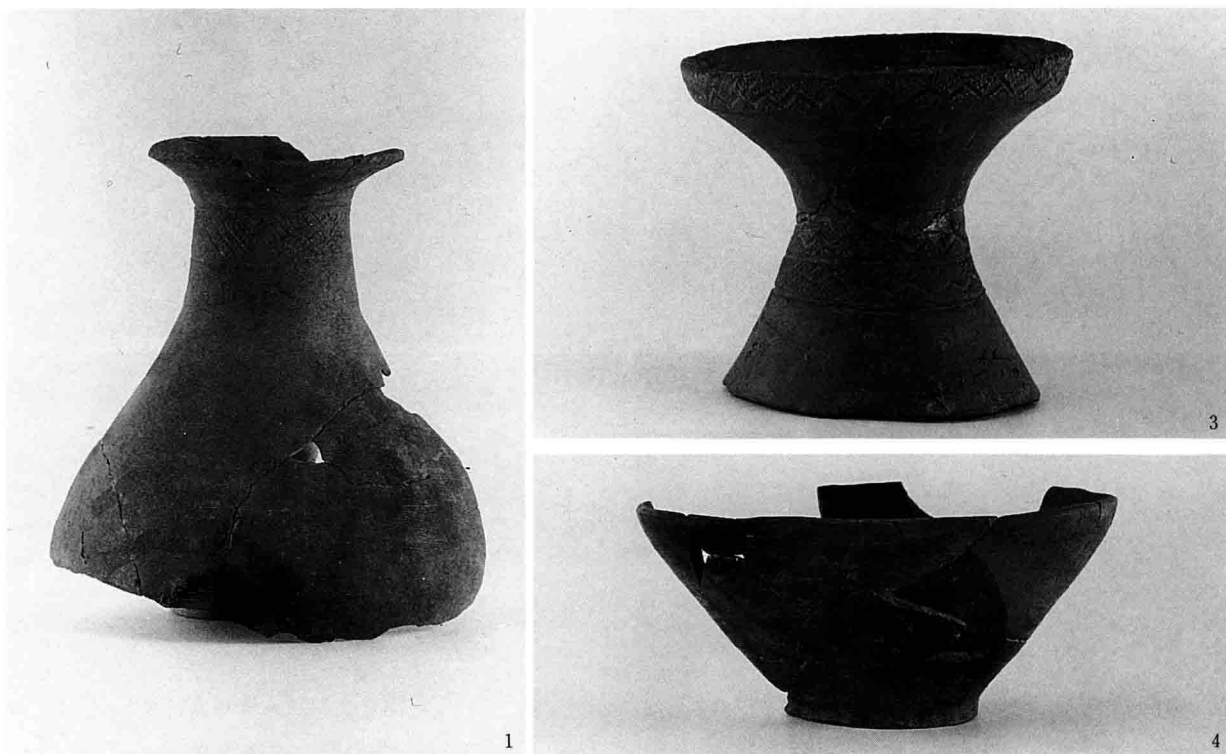


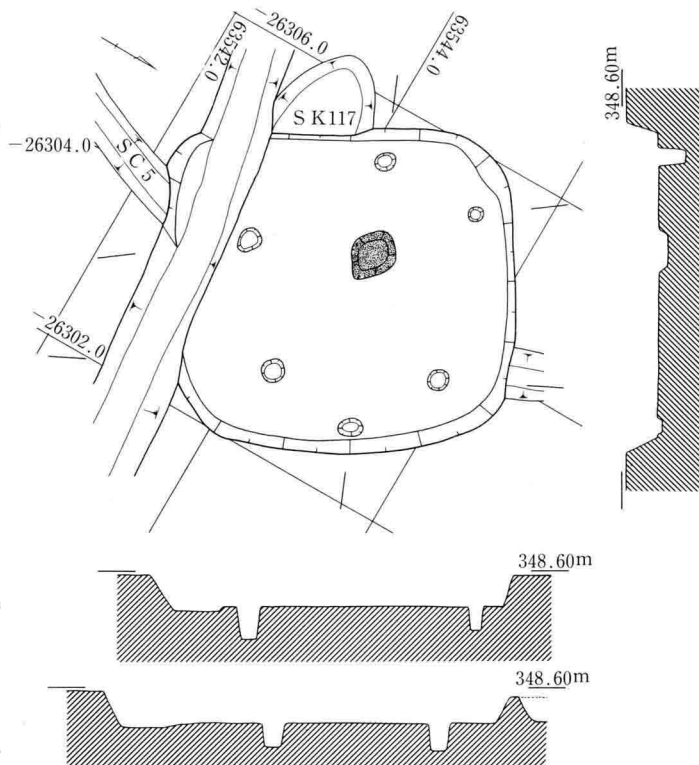
写真79 S A113遺物写真

SA114 (C区)

SC5・SK117と重複関係にある。住居南隅付近に中世溝SD2による破壊を受けているが、3.47m×3.72mを測る方形住居である。支柱穴はやや不整形な方形を呈し、主軸上壁際には2本支柱穴が配される。炉は住居中央よりやや西にずれて位置し、床面から8cm掘り込んだやや深めの炉となる。床面は炉を中心として堅緻で全体にしまる。また床面よりやや浮いた位置から夥しい量の炭化物が出土している〔第56図〕。焼土塊も出土したが、出土状況等からいわゆる焼失住居とは区別しておくべきであろうか。土器には二次的な被熱を受けた痕跡は認められず、炭化材の上より出土しているためのちに廃棄されたものであろう。

出土土器〔第55図〕には壺（1～6・15～20）、甕（7・8・21～24）、鉢（9・10・12・13）、蓋

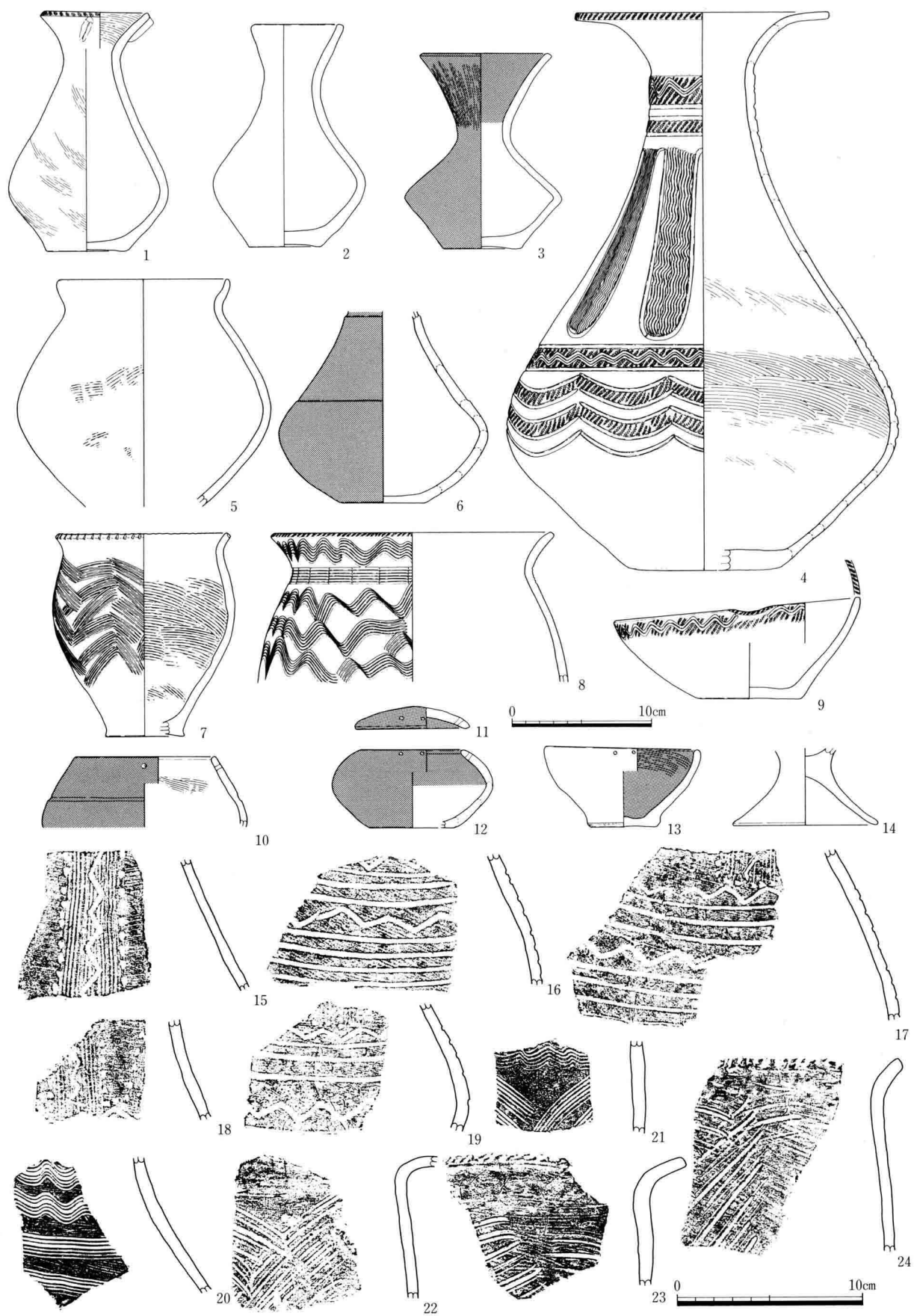
（11）、高杯（14）がある。1の口縁端部には縄文が施されるが1・2・3・5・6は文様帯を持たずハケやヘラミガキによる調整のみの仕上げとなる。3は外面と口縁部内面に赤彩され、5は太頸短頸壺で口縁部は弱い受け口状を呈する。4は懸垂文を施文する細頸壺で口縁部が大きく外反する。15～19も懸垂文を施文する壺で同一個体である。8は頸部に簾状文を施したのち口縁部と胴部に波状文を施文するが、これにみられる文様は後期的な甕への推移を想定させる文様形態である。9の口縁端部には片口を持ち、10～13は赤彩され2ヶ一對の小孔が穿たれる。これら土器群は新段階に位置付けられる、良好な一括資料である。



第54図 SA114実測図



写真80 SA114



第55图 SA114遺物実測図



第56図 SA114遺物出土状況 (S = 1 : 40)



写真81 SA114遺物検出状況

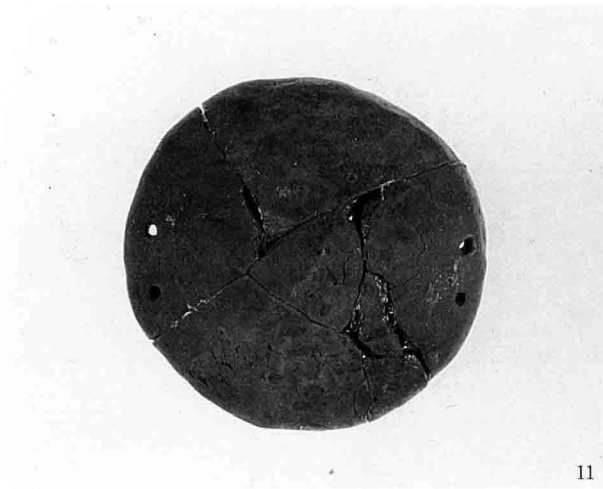
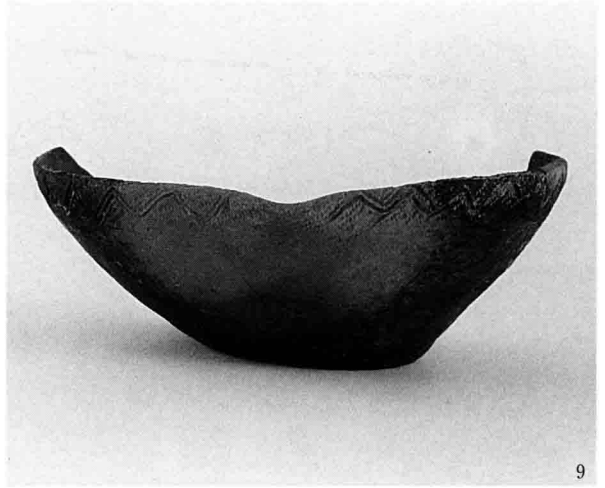
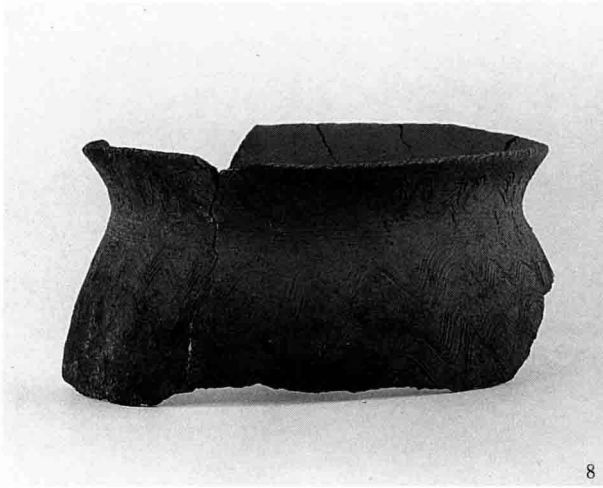
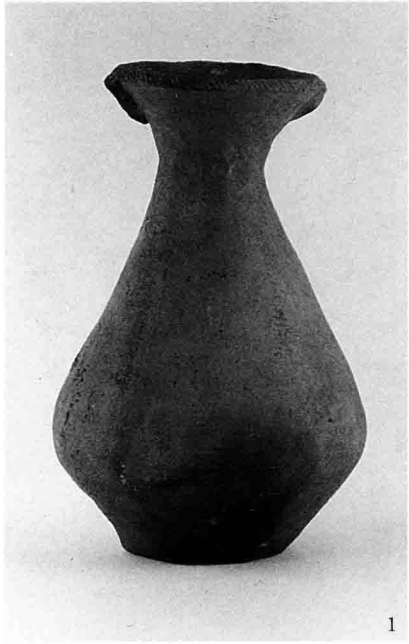
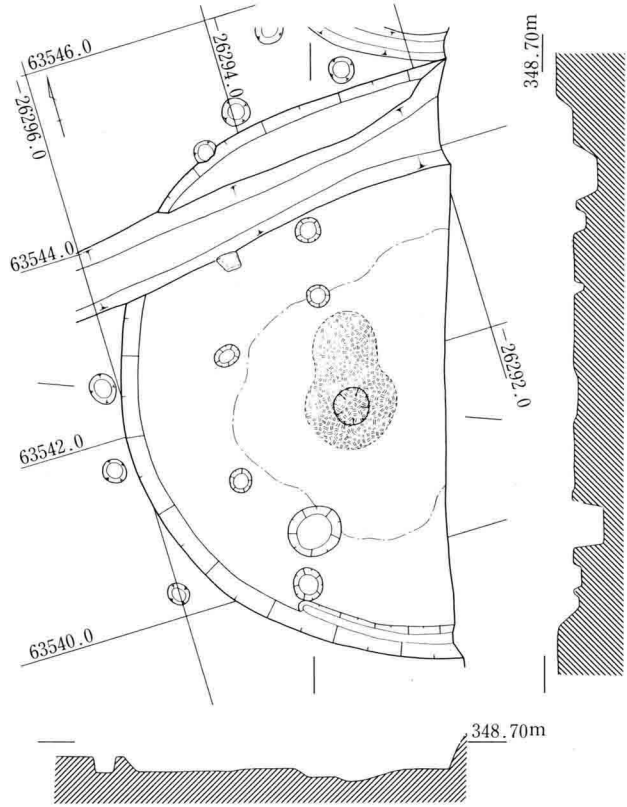


写真82 SA114遺物写真

S A115 (C区)

中世溝SD2に住居北側の一部を壊され東側は調査範囲外で未検出であるが、径6.13mを測るやや大型の円形住居であると想定される。支柱穴は3本検出されたがおそらく円形に配されるものと思われる。炉は住居中央よりやや南にずれて位置しており床面を浅く掘り込まれた炉となる。周辺には炭化物が散布し床面は炉を中心として堅緻となり、住居南壁際には壁溝も検出されている。また周辺には土坑が住居に沿って検出されているが当住居跡との関連は不明である。

出土土器 [第58図] には壺(6~8)と甕(1~5)がある。壺は小破片のみ出土した。8は沈線文で区画された中に楕円直線文を充填しその間に楕円状工具による刺突文を施すといった多段横帯区画文となると思われる。甕は全て単純口縁となるもので口縁端部には縄文が施されるが、2はユビオサエによる波状口縁となる。5は頸部に直線文を施し、楕円文で縦方向に区画したのち胴部に波状文を施文する。



第57図 S A115 (1:80)

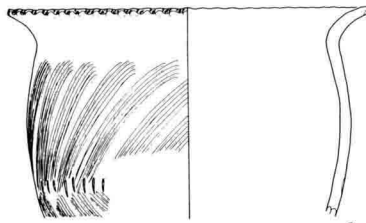
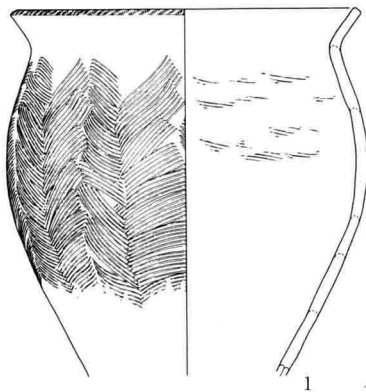
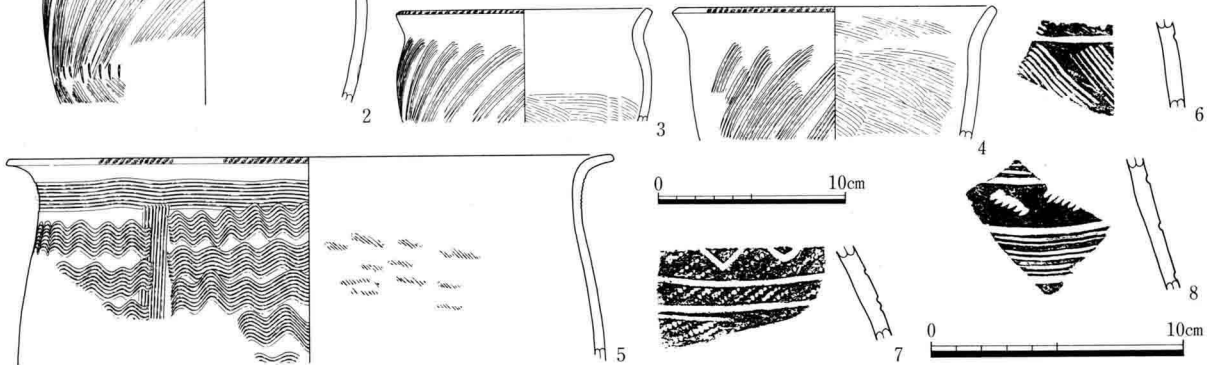


写真83 S A115

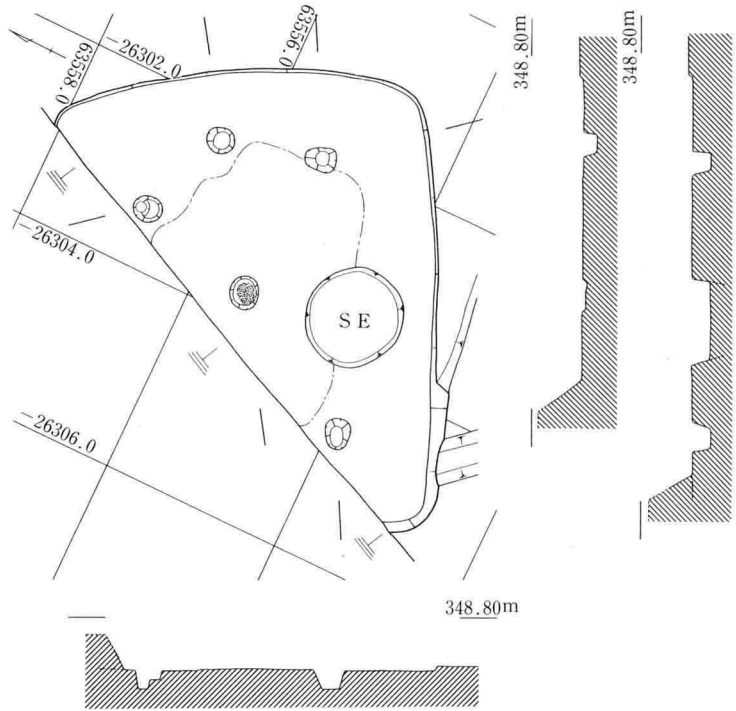


第58図 S A115遺物実測図

S A 116 (C区)

S A 117と重複関係にある。住居西側は調査範囲外であるため未検出であるが主軸方向4.96mを測る方形を呈する住居である。支柱穴は3本検出され、平面形は長方形を呈し、主軸上には支柱穴が1本検出されている。炉は住居中央に検出され、床面を3cm程掘り込んだ地床炉となる。床は炉を中心とした支柱穴間において非常に堅緻でその他は軟弱となる。

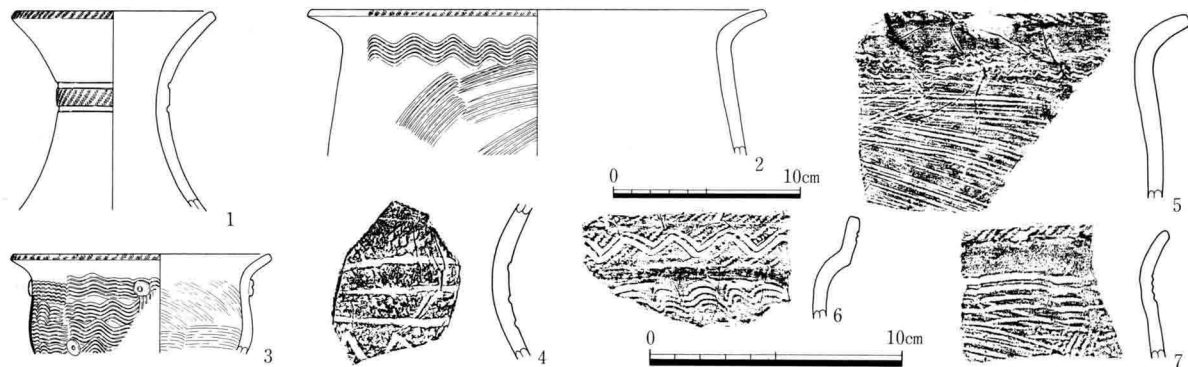
出土土器 [第60図] には壺(1・4)・甕(2・5~7)・台付甕(3)がある。1は頸部に縄文を施したのち沈線で区画する細頸壺である。2は胴部に羽状文を施したのち頸部に波状文を施文し、内面は丁寧なヘラミガキで仕上げる。口縁部は単純口縁となり端部には縄文を施す。3は波状文を全面に施したのち縦方向の直線で4ヶ所区画し、頸部と胴部にボタン状貼付文を交互に配置する。胴部下半を欠くが、形態などから台付甕となるものと思われる。6は受け口状を呈する甕の口縁部である。頸部には波状文、口縁部は縄文を施したのち重山形文を施文し、内面は丁寧なヘラミガキで調整する。5・7は単純口縁の甕であるが、文様が乱雑化する。



第59図 S A 116 (1 : 80)



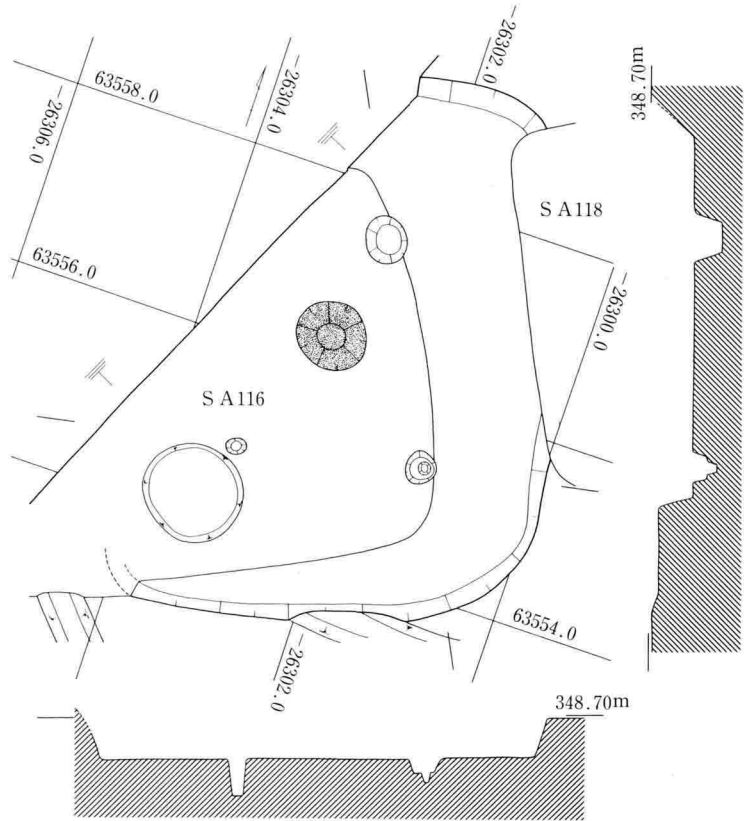
写真84 S A 116



第60図 S A 116遺物実測図

SA117 (C区)

SA116・118と重複関係にある。西側約半分が調査範囲外であるため判然としないが、主軸方向5.72mを測る方形住居である。主柱穴は3本検出されやや不整形な方形を形どる。炉は住居中央に位置し10cm程掘り込む深い炉となる。床面はその大半がSA116による破壊を受け不明瞭であるが、辛うじて破壊を免れた部分は軟弱ではあるものの比較的明瞭に確認された。当住居跡は焼失住居で遺存する部分より多量の炭化材が床面に接する形で検出された[第64図]。また床面や壁などには焼失の際に受けたと思われる土の変質が観察される。出土した土器のほとんどに二次的な被熱による器形の歪み・変質がみられ、中には元の形が把握できなくなるほど変形してしまったものも少なくない。

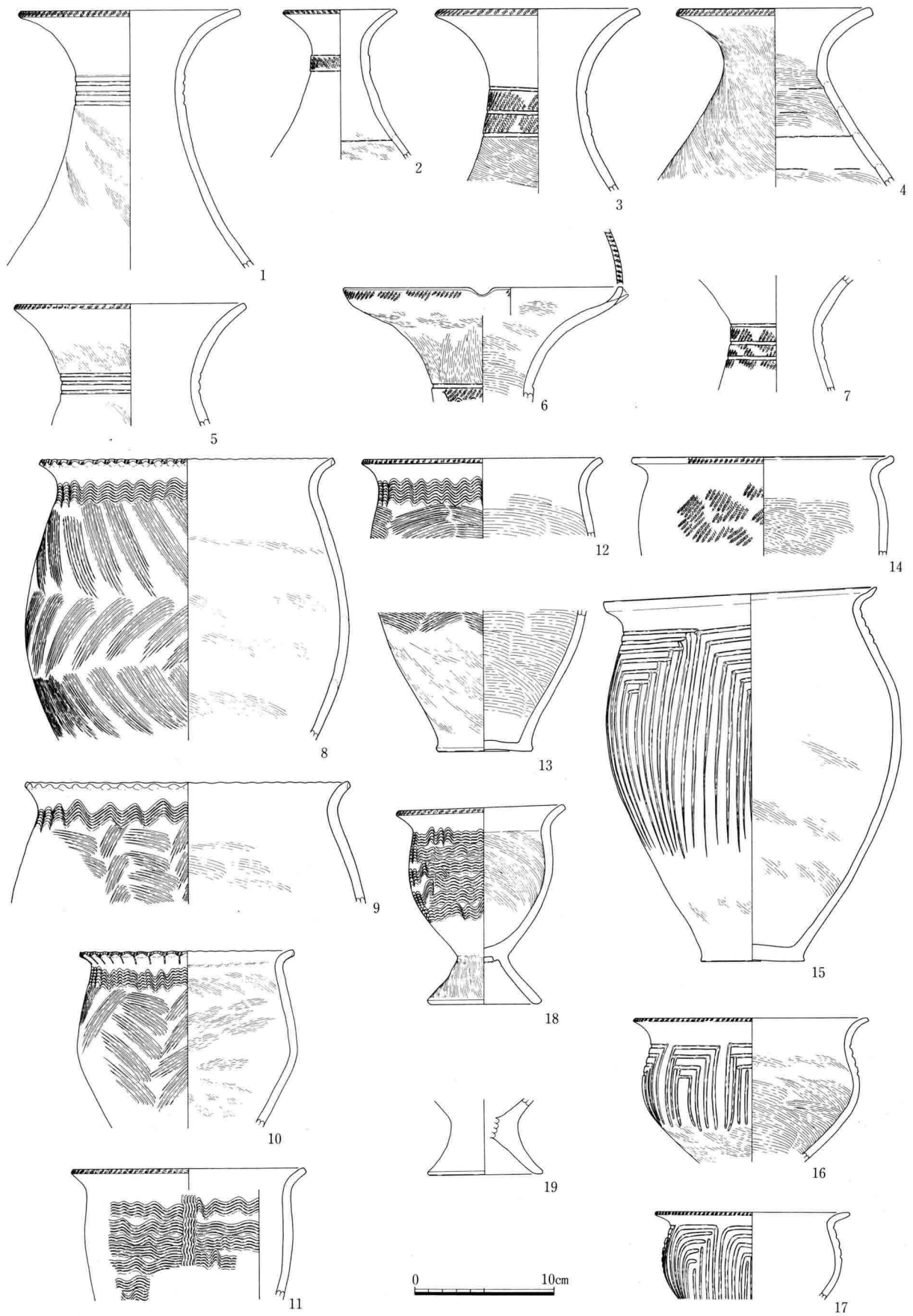


第61図 SA117実測図

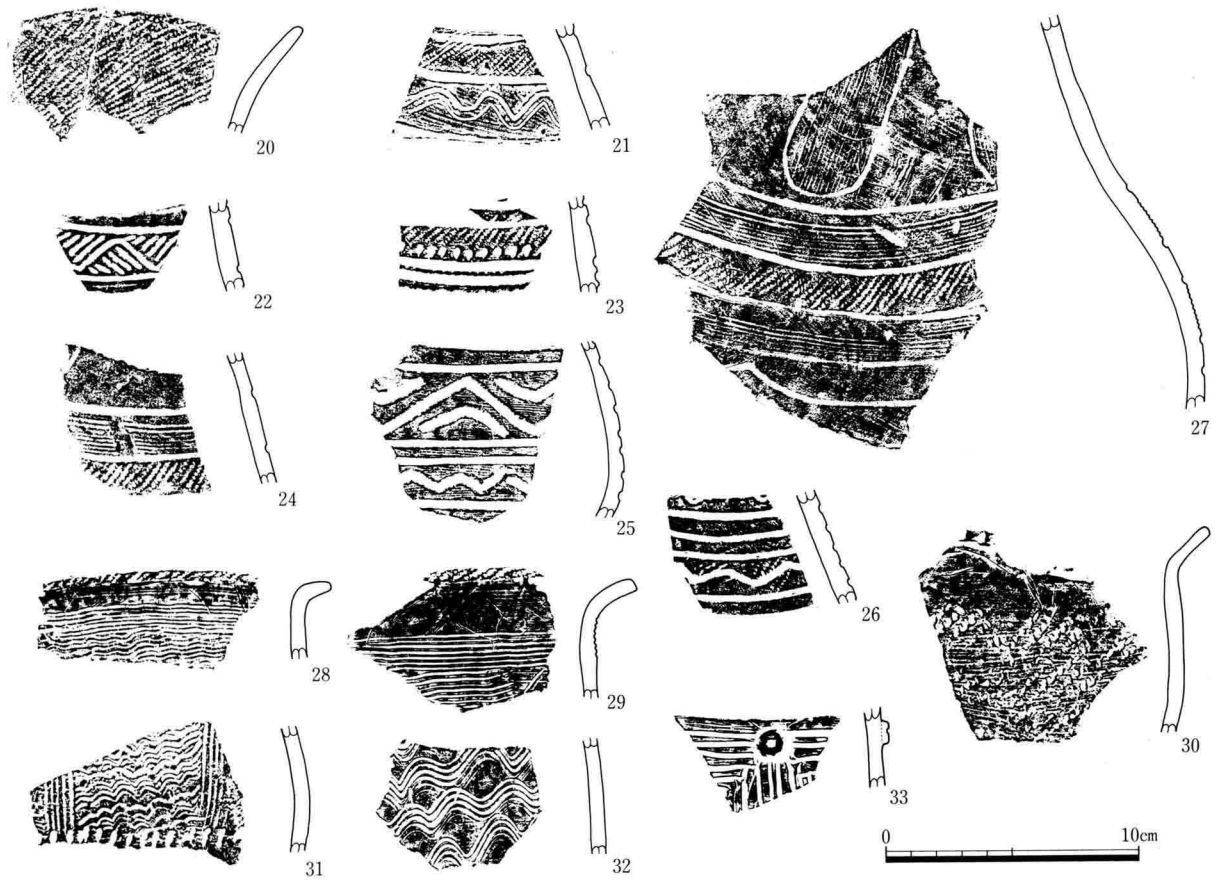
出土土器 [第62・63図] には壺 (1~7・20~27)、甕 (8~15・28~33)、台付甕 (16~19) がある。壺は全体的に太頸となり、文様も簡素化する。6は緩い受け口状を呈する口縁部となり口縁端部の一箇所に片口を持つ。15は胴部に「コ」の字重ね文を施す甕で、口縁部は弱い有段となる。



写真85 SA117



第62图 SA117遗物实测图(1)



第63図 S A117遺物実測図(2)

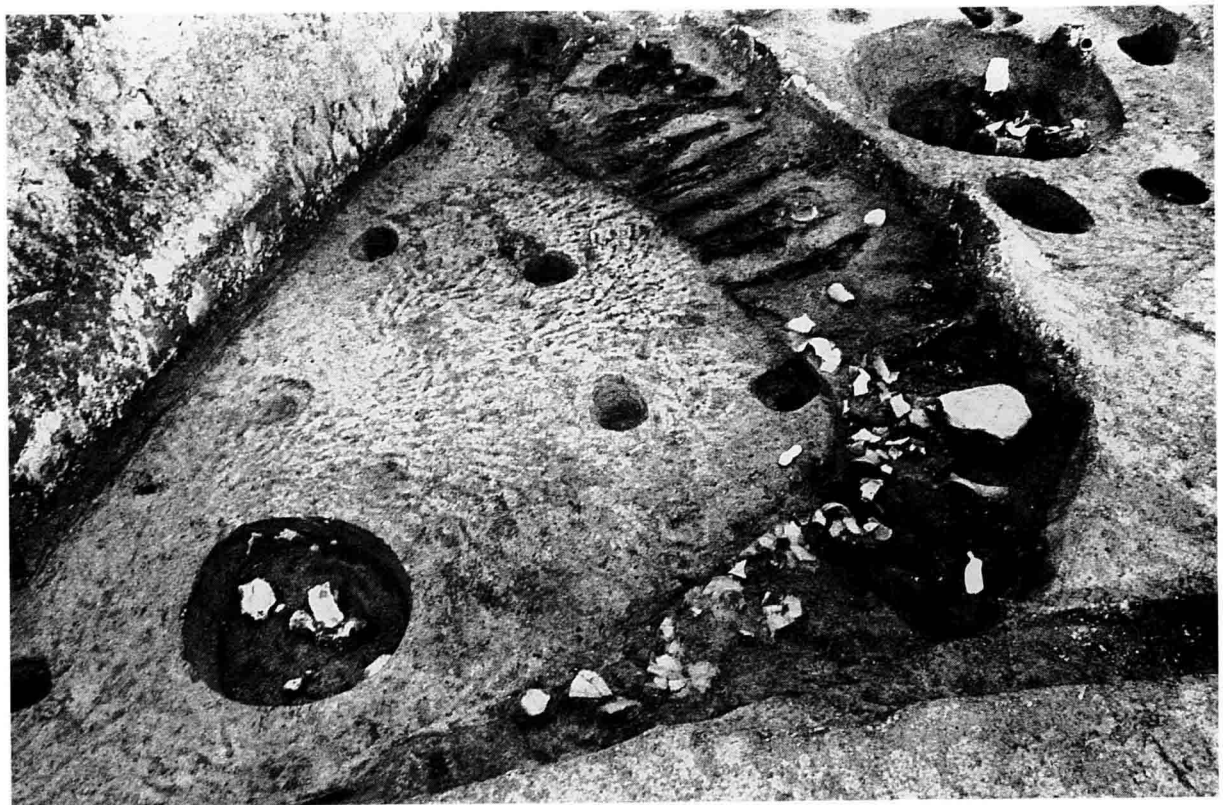


写真86 S A117遺物検出状況



第64図 SA117遺物出土状況実測図 (S = 1 : 40)



15



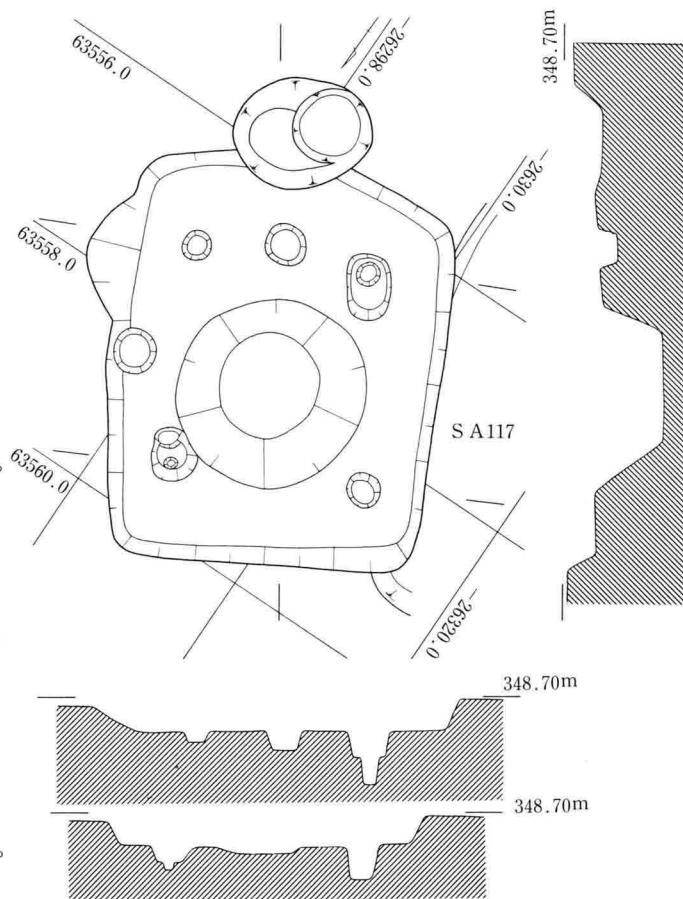
18

写真87 SA117遺物写真

SA118 (C区)

SA117・SK120と重複関係にあり、規模4.22m×3.46mを測る方形住居である。支柱穴は4本方形配列となる。支柱穴は1本のみ検出された。この住居は他に検出された住居とはやや異なった形態を呈する住居跡である。本来炉があるべき位置に直径2m程の大きな円形土坑が掘り込まれている。調査所見では住居埋没後に構築された痕跡がみられず当住居跡との併存性あるいは廃絶直後に掘り込まれた可能性があることが想定できよう。またこの土坑は深さ約1mを測るが、中からは礫とともに多量の土器が出土している。住居床面より出土した土器と土坑内出土土器が接合関係にあることから立証できるのではなかろうか。

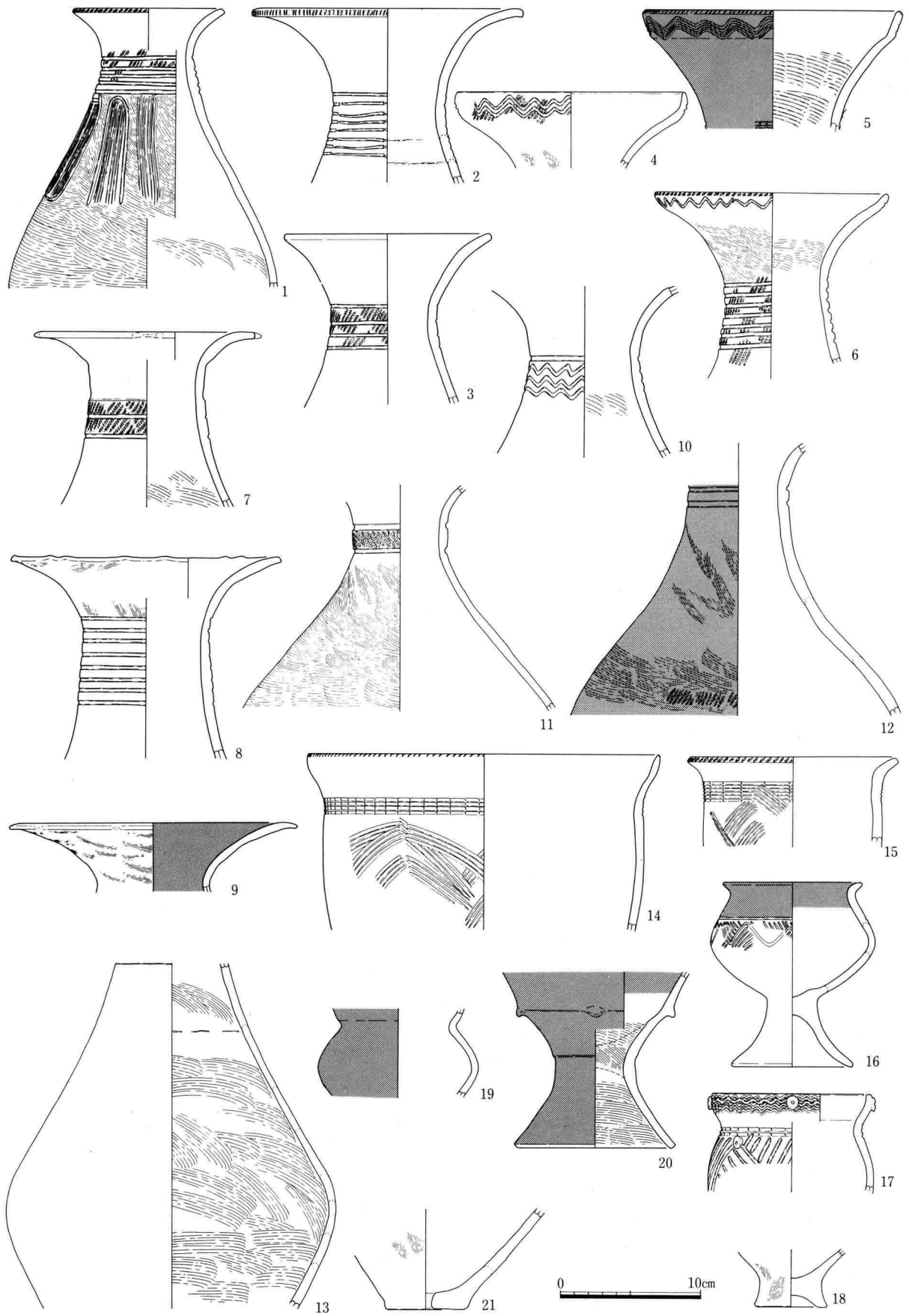
出土土器 [第66・67図] には壺 (1~13・22・26)、甕 (14・15・27~38)、台付甕 (16~18)、鉢 (19)、高杯 (20)、甑 (21) がある。20は杯部と脚部の間に円板充填するものと思われるが欠落する。23・24は胴部に篋状の工具による渦巻文が施される壺で山草荷式にその類例を求める。



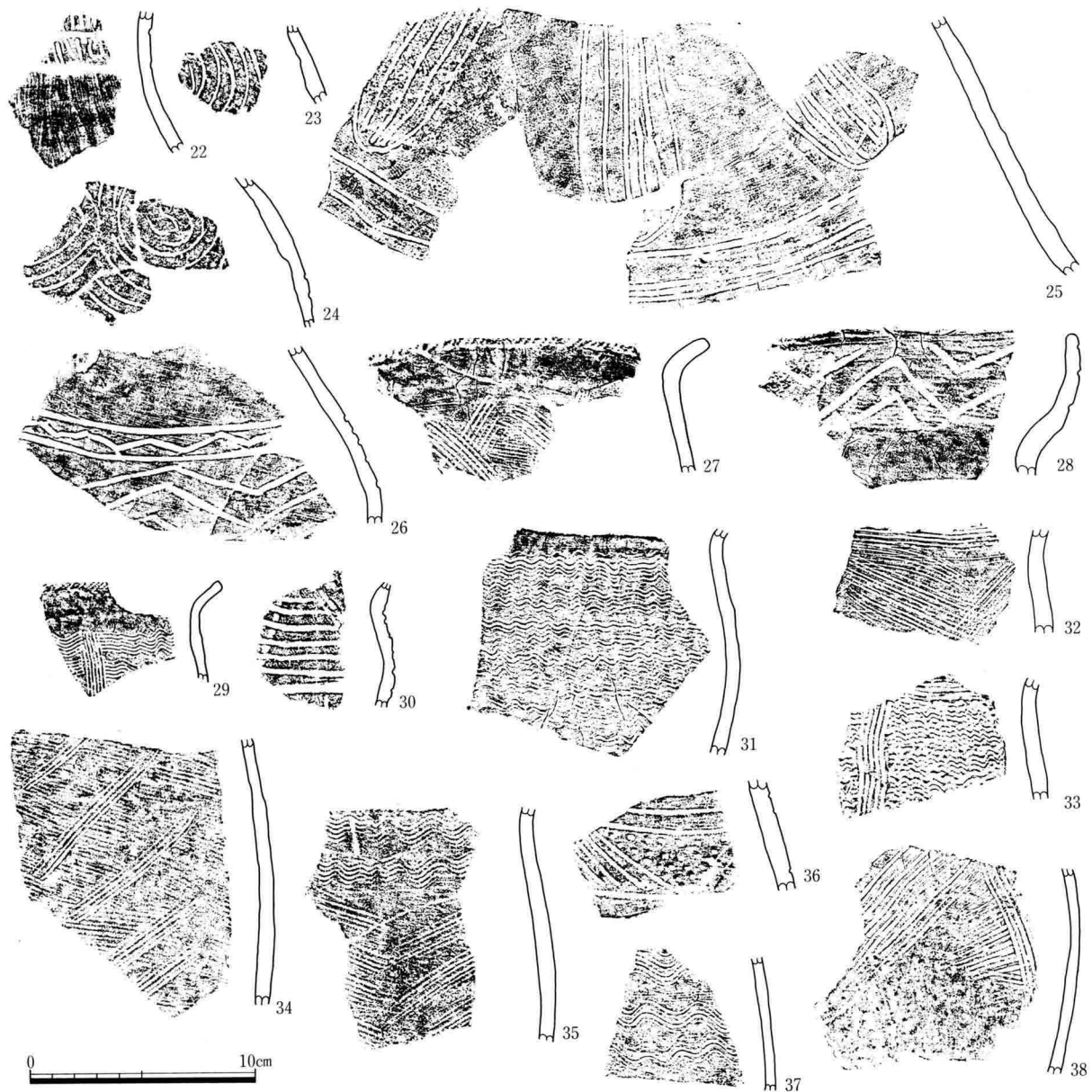
第65図 SA118実測図



写真88 SA118



第66图 SA118遗物实测图(1)



第67图 SA118遺物実測図(2)

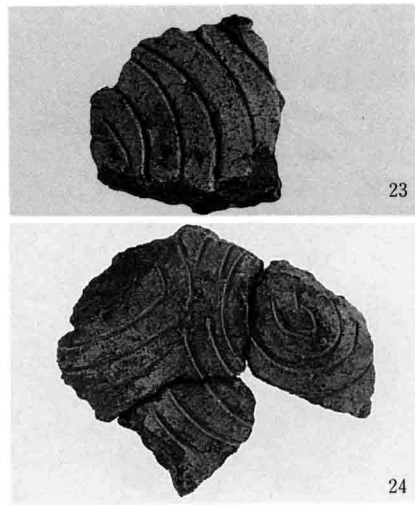
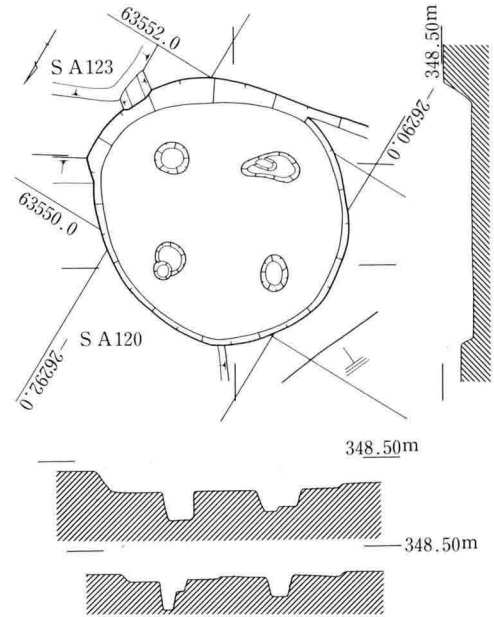


写真89 SA118遺物写真

SA119 (C区)

SA120・SK121と重複関係にあり、径2.80mを測る小型の円形住居である。支柱穴は4本検出され平面形は方形配列となる。炉は検出されなかったが床面は支柱穴間において非常に堅緻で全体にしまる。土器の出土量は少なく図化し得たものは6点にすぎない。

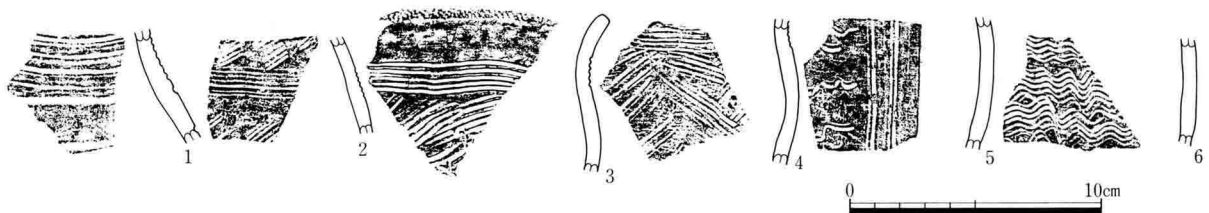
出土土器〔第69図〕には壺（1・2）と甕（3～6）がある。全て小破片であるため全体の様子を把握するには至らないが、壺は頸部付近の破片で、櫛と篋による多段横帯文を施す。1は沈線文で区画した中に櫛描直線文を充填する。2は直線文と短線文を交互に施文する。3・4は頸部に直線文を施したのち羽状文を施文する。3の口縁端部は縄文を施す。5は櫛描直線文を縦方向に区画したのち波状文を施文する。6は胴部全体に波状文を施文している。



第68図 SA119実測図



写真90 SA119



第69図 SA119遺物実測図

S A120 (C区)

S A119・122と重複関係にある。4.30m×3.55mを測る方形住居である。主柱穴は4本長方形配列となる。炉は住居中央よりやや西にずれて位置している。この炉は底面に小礫を敷き詰めたいわゆる礫敷炉であるが、今回の調査では唯一例である。床面は炉を中心として主柱穴範囲内において非常に堅緻でその他は明瞭ながら軟弱となる。

土器は覆土中より多量に出土した。出土土器[第71・72図]には壺(1~7・16~22)、甕(8~13・23~28)、台付甕(14)、鉢(15)がある。1は頸部に段を持ち、縄文を施したのち山形文を施文する。胴部はハケ調整したのち上半で軽く、下半で丁寧にヘラミガキを施す。6の胴部には矢印の様な文様が一ヶ所だけにみられる。8・9・10は頸部に楕円直線文を施したのち胴部に羽状文を施文する。11・12・13は頸部に簾状文を施しており、12のみ受け口状口縁となる。

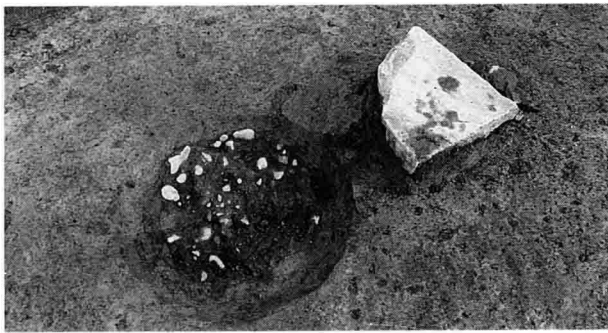
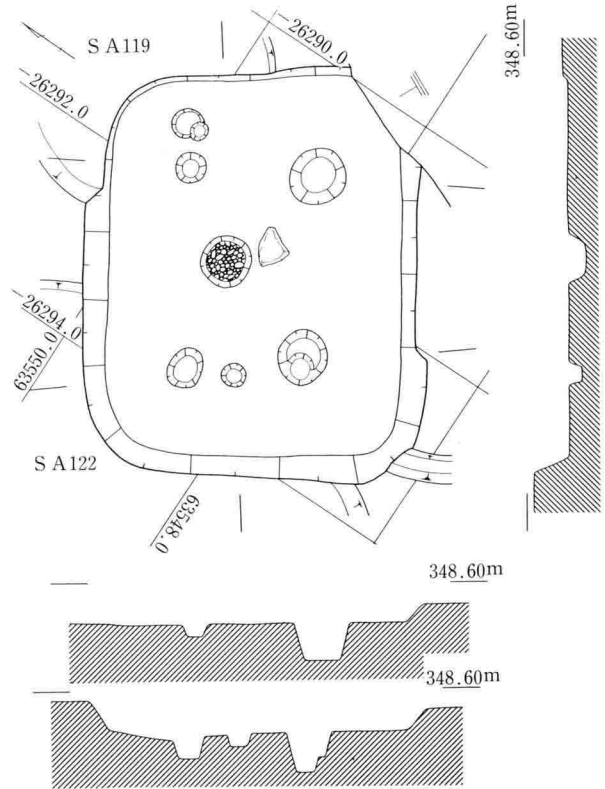


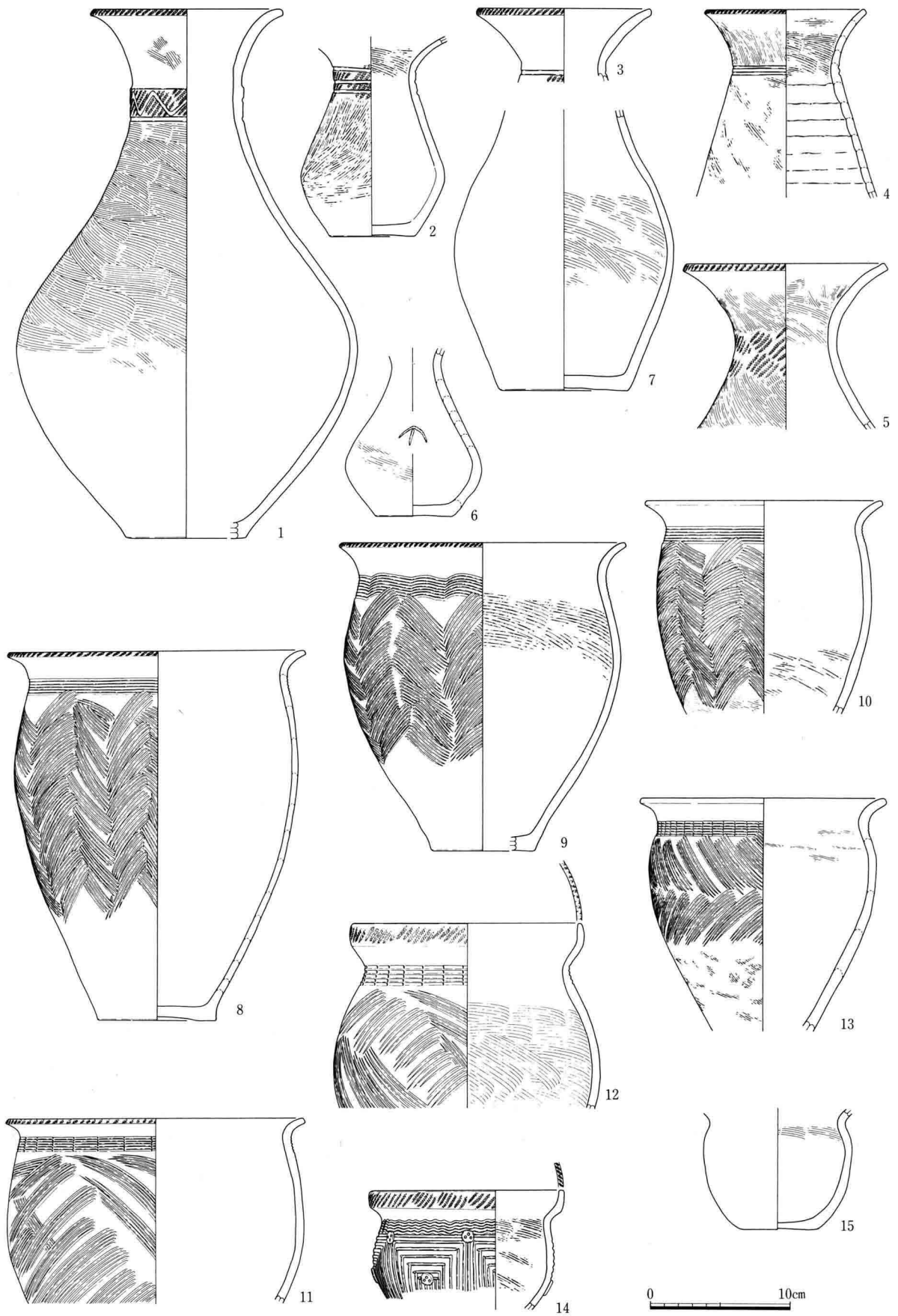
写真91 S A120炉検出状況



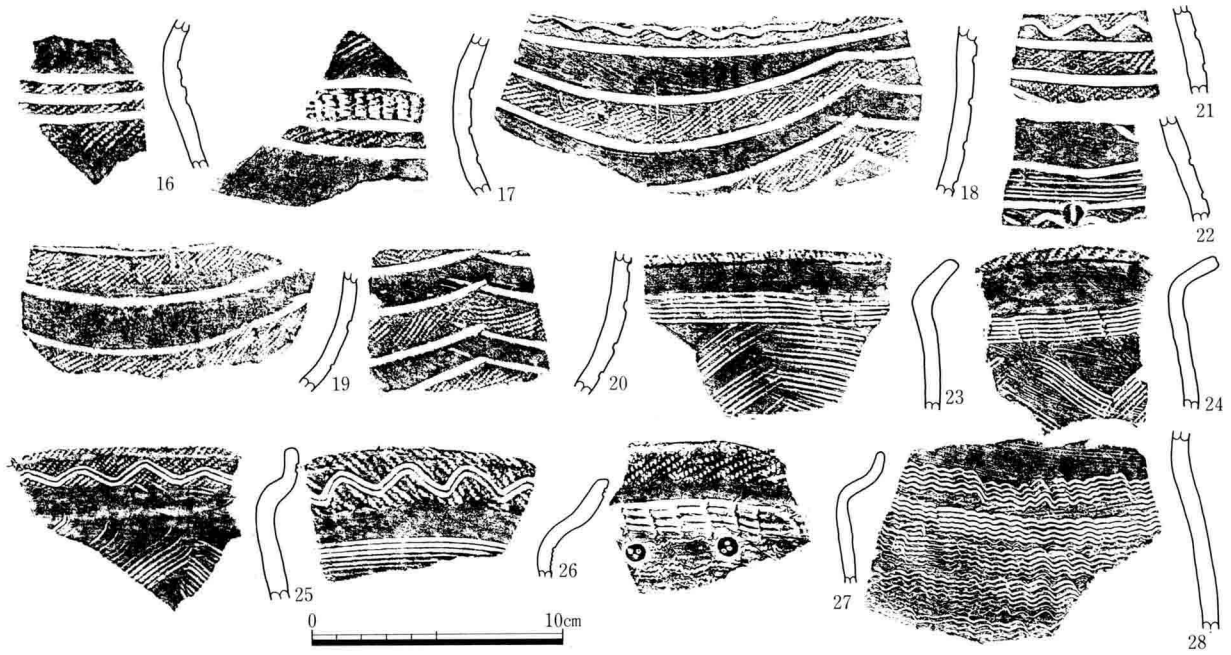
第70図 S A120実測図



写真92 S A120



第71图 SA120遺物実測図(1)



第72図 S A120遺物実測図(2)

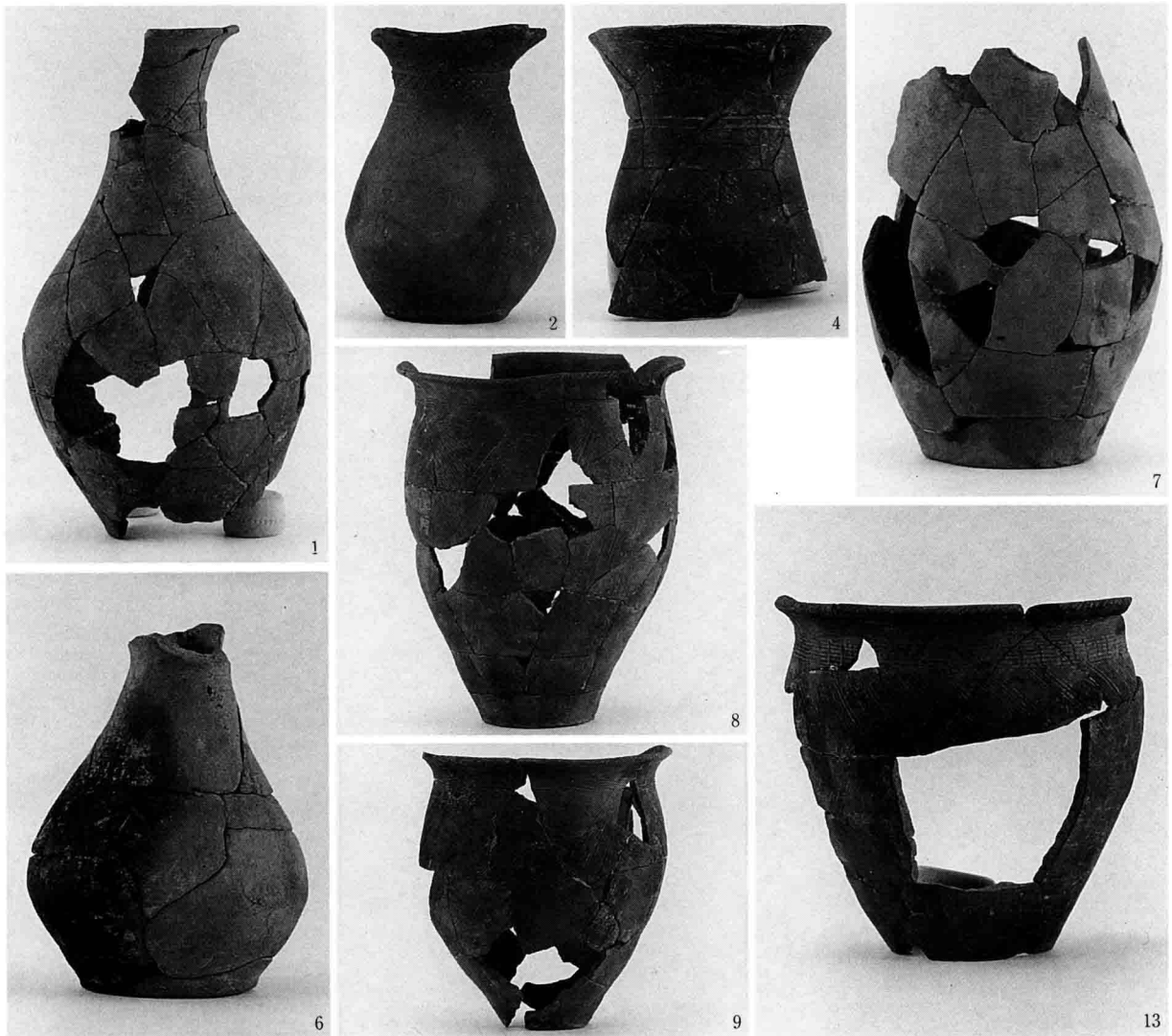
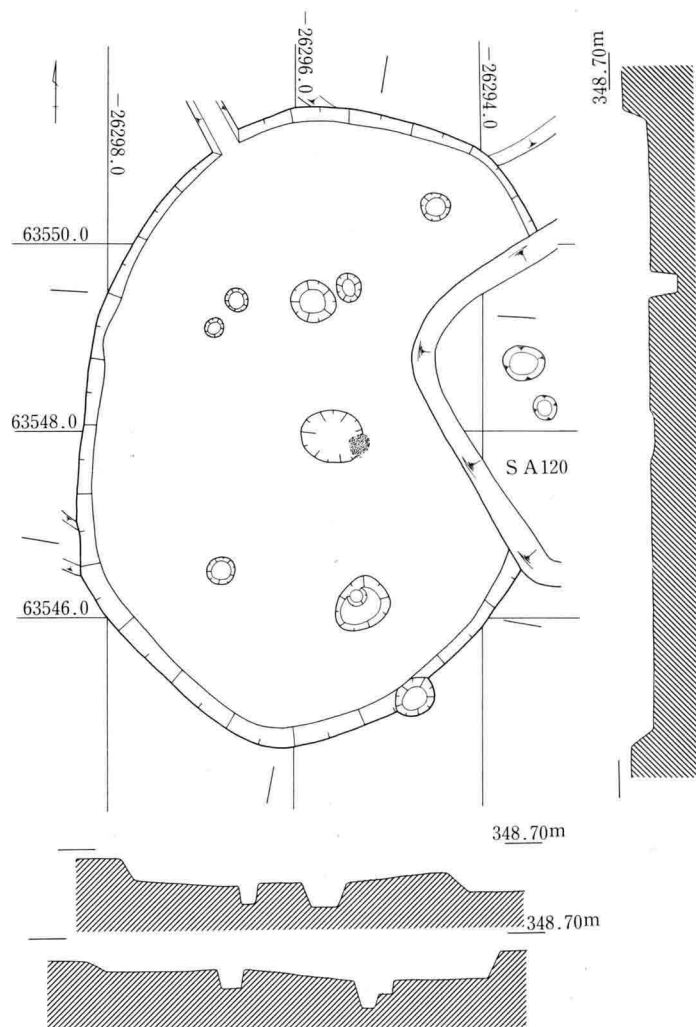


写真93 S A120遺物写真

S A 122 (C区)

S A 120・123と重複関係にある。主軸方向6.82mを測る楕円形住居である。主柱穴は3本検出され長方形を呈するものと考えられる。炉は住居のほぼ中央に位置し、床面を若干掘り込んだ地床炉となる。床面は比較的明瞭に検出されたが全体に軟弱で、南東主柱穴上面は攪乱により破壊を受ける。

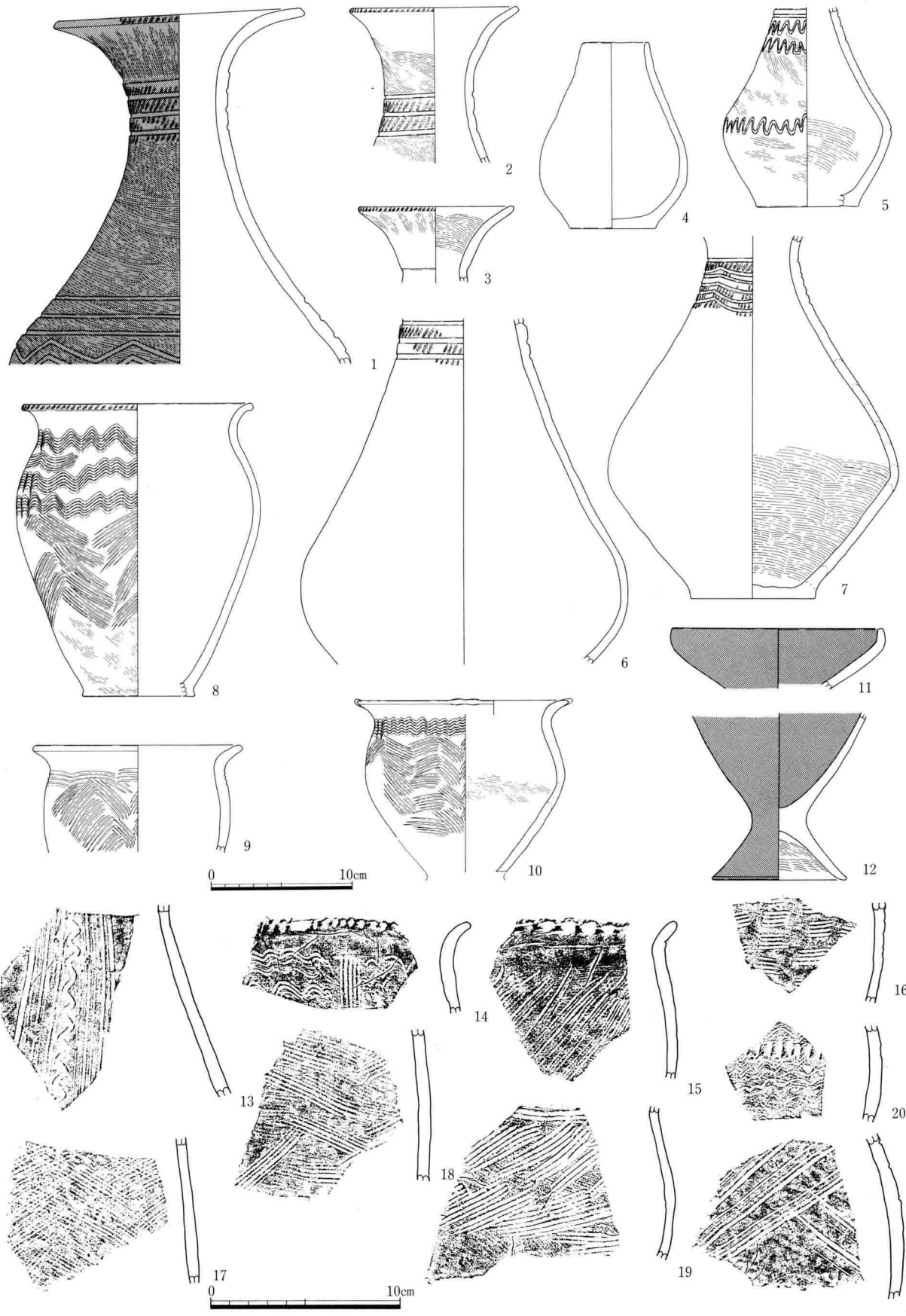
出土土器 [第74図] には壺 (1~7・13)、甕 (8・9・14~21)、台付甕 (10)、高杯 (11・12) がある。1は頸部と胴部に施文がされる。口縁部は大きく外反し口縁端部には縄文を施し、外面には赤彩された痕跡が残る。4は口縁部が外反せず、頸部部分で端部になってしまう特異な器形を呈する壺である。5は頸部に2本と胴部に1本のやや粗雑な山形文を施す。また頸部には現状で2本の沈線文も施文される。8は頸部から胴部にかけて4段の波状文を施し、下半部は羽状文を施文する。10の口縁端部には貼り付けによる2ヶ一對の突起を持ち、頸部に波状文、胴部には羽状文を施す台付甕である。



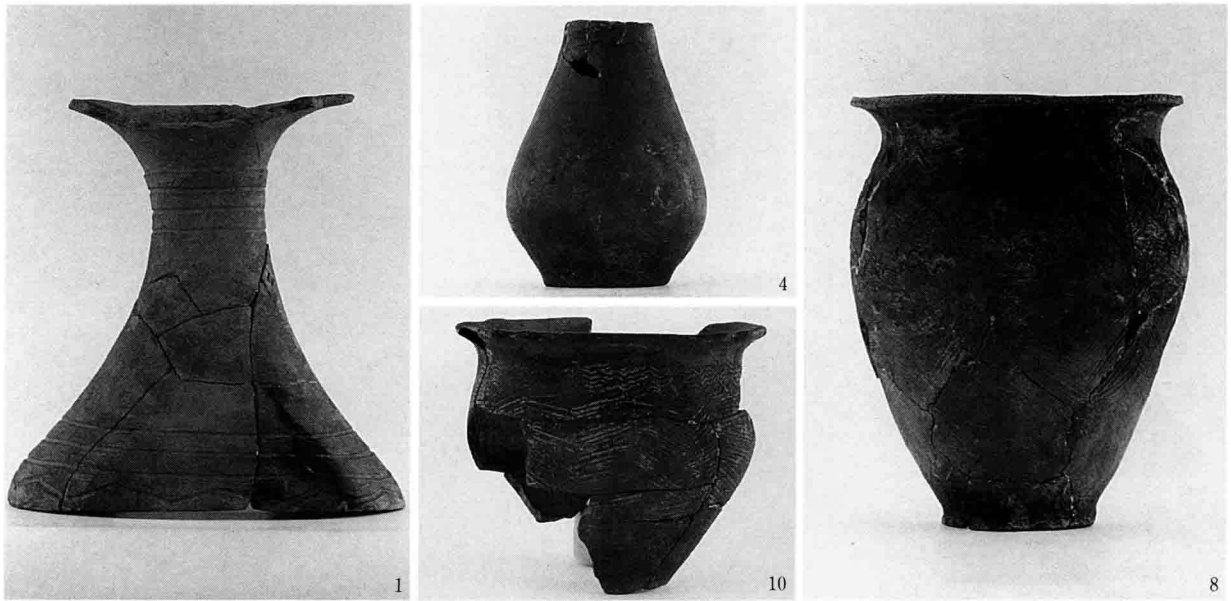
第73図 S A 122実測図



写真94 S A 122



第74图 SA122遺物実測図

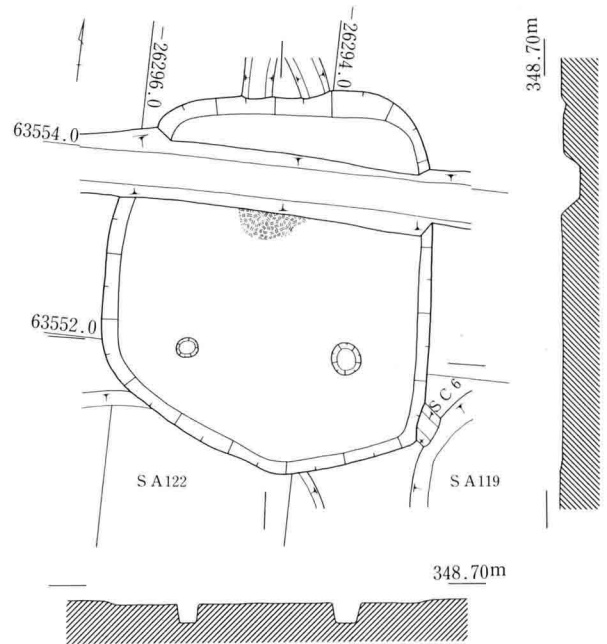


SA123 (C区)

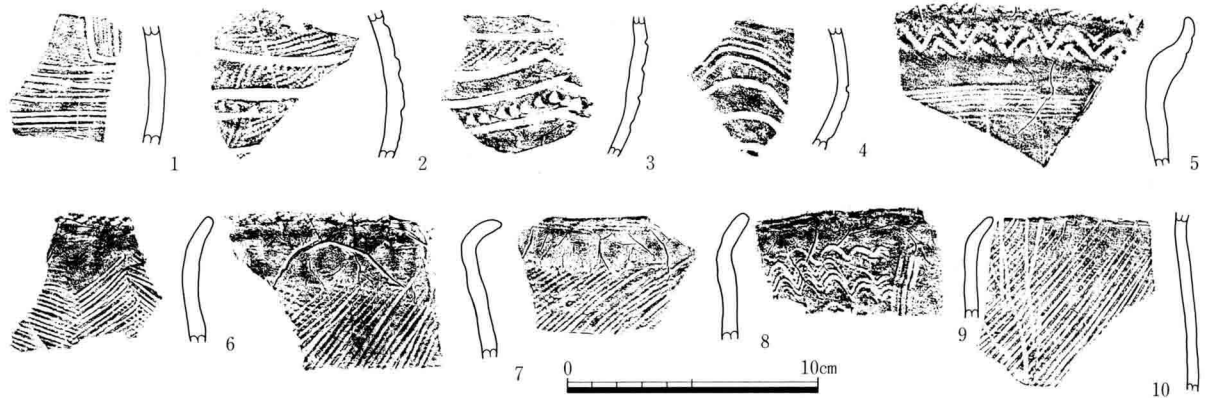
写真95 SA122遺物写真

SA122・SC6と重複関係にある。4.00m×3.48mを測る方形住居である。支柱穴は2本のみ検出され、北側に攪乱を受けるため判然としないが方形配列になるものと想定される。炉もこの攪乱によって破壊されているが、炭化物の広がり確認できたため、住居中央より北にずれて位置する北側支柱穴間辺りにあるものと思われる。床面は住居中央が若干堅緻となるが、その他は比較的明瞭ではあるが軟弱である。

出土土器〔第76図〕には壺(1~4)と甕(5~10)があるがすべて小破片のみの出土で図化し得たものは10点である。壺はすべて胴部付近の破片で沈線文あるいは櫛描文を施文する。2・3は同一個体である。5の口縁部は受け口状を呈し重山形文を施文する。他は単純口縁となり、文様も多様である。



第75図 SA123実測図

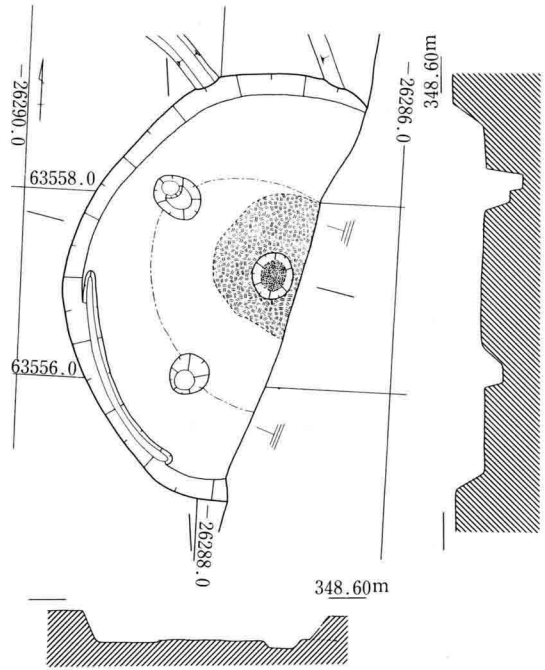


第76図 SA123遺物実測図

SA124 (C区)

SC6・SK124と重複関係にある。径4.63mを測る円形を呈する住居である。支柱穴は2本のみ検出され平面形は方形配列になると想定される。炉は住居中央に位置し床面を少し掘り込んだ地床炉となる。炉の周辺には炭化物が広がり、床面は炉を中心として非常に堅緻でその他は軟弱となる。また住居南西壁際には壁溝が1ヶ所にのみ検出されている。

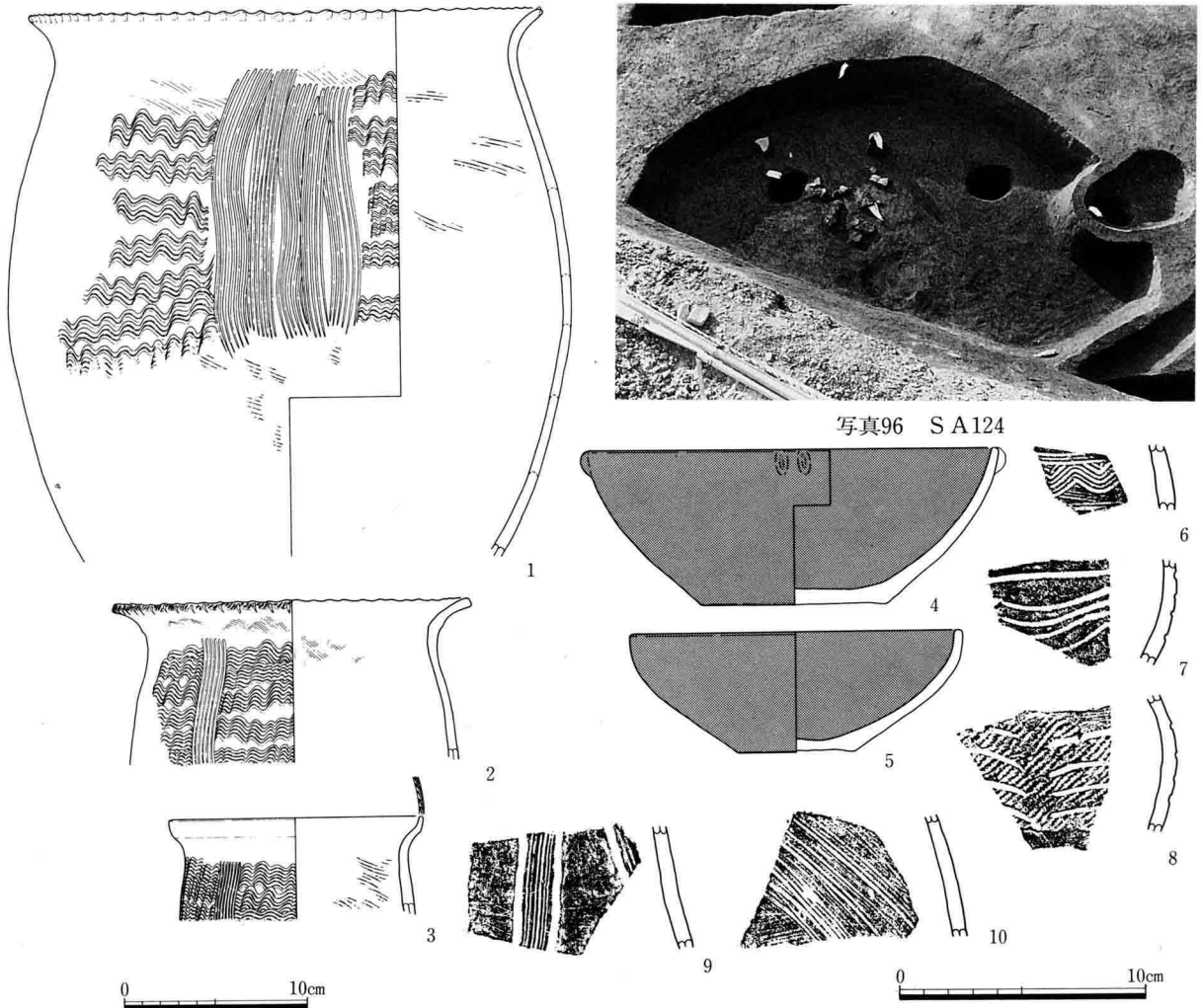
出土土器〔第78図〕には壺(6~9)、甕(1~3・10)、鉢(4・5)がある。壺はすべて小破片で胴部付近の破片である。1は現状で縦方向に櫛描直線文を1ヶ所に5本集中的に施したのち波状文を施文する。口縁端部はユビオサエによる波状口縁となる。2・3は波状文を施文したのち縦方向に区画する。2は口縁端部に縄文を施したのち篋刻みで弱い波状口縁となり、3は受け口状を呈する。4は口縁部に2つ単位の貼付文を4ヶ所に配置する。4・5は全面赤彩する。



第77図 SA124実測図



写真96 SA124

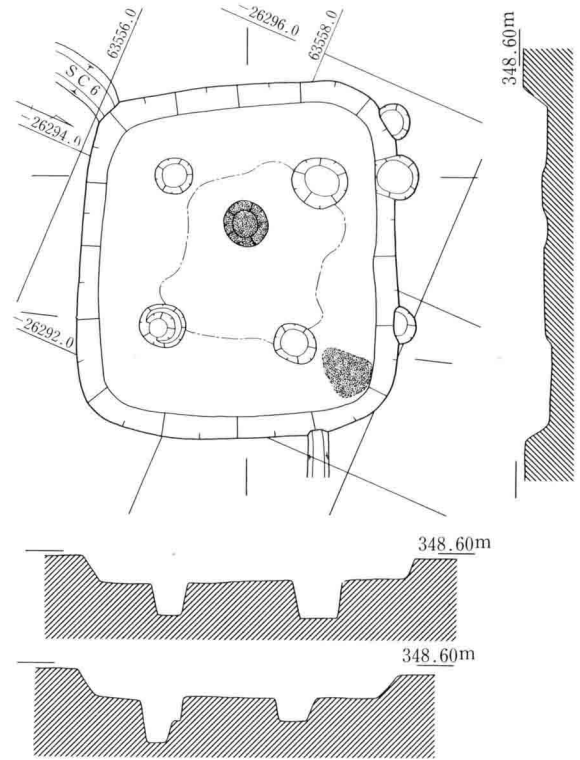


第78図 SA124遺物実測図

SA125 (C区)

SC6と重複関係にあり、3.77m×3.35mの方形住居である。支柱穴は4本検出され平面形は方形を呈する。炉は住居中央よりやや西にずれて位置し、床面を8cm程掘り込んだ深い炉である。床面は炉を中心とした支柱穴範囲内において非常に堅緻でその他は明瞭ながら軟弱である。住居西側に一部集中的に土器が出土している。出土した土器はそのほとんどに二次的の被熱による変質化が顕著にうかがえ、歪みや膨脹がみられる。しかし当住居跡には焼土塊は出土しているものの焼失した痕跡がまったくないことが、土器だけが不自然な出土状態をしているため、二次的な土器廃棄の可能性が考えられる。

出土土器〔第80・81・82図〕には壺(1~12・26~42)、甕(13~22・43~48)、甑(23)、鉢(24・25)がある。1は楯描直線文と同原体の刺突文を交互に施文する多段横帯文となる。2は頸部から胴部にかけて縄文を施したのち山形文や工字文など多様な沈線文を施文している。もっとも二次的の被熱の影響を受けている土器で胴部全体が変形している。5は頸部と胴部に文様帯を持つ。3本単位の楯状工具で胴部には区画したのち山形状に施文する。12は底部に穿孔を持つ壺で、穿孔は焼成後に穿たれている。29・30は胴部付近の破片で、沈線文による「×」区画された中に縄文を充填する。宮ノ台式の影響下にあるものであろうか。13は楯状工具で縦方向に区画したのち波状文を施文する。口縁端部は篋刻みによる弱い波状口縁となる。14も篋刻みによる波状口縁となり、直線文を縦方向に区画したのち山形文を施す。そののち頸部に直線文を施し胴部に波状文を施文する。なおこの土器は回転台使用の畿内型楯描き施文であることが観察されている。16は受け口状を呈する甕で頸部から胴部にかけて13段の楯描波状文を施文したのち、縦方向の山形文で区画



第79図 SA125実測図

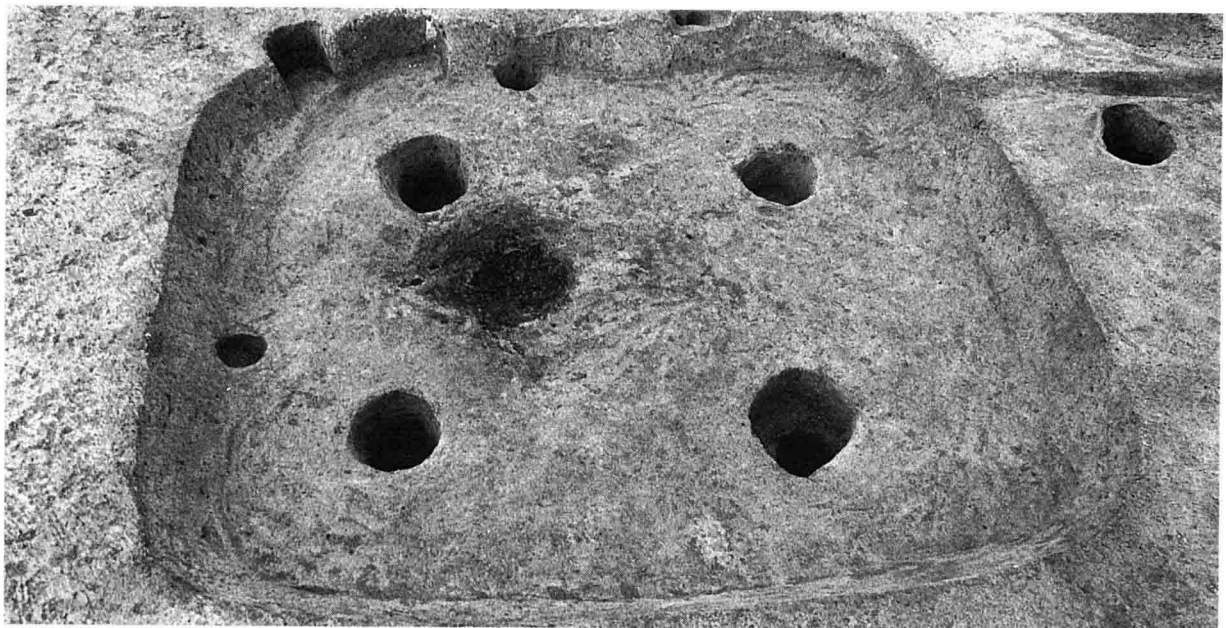
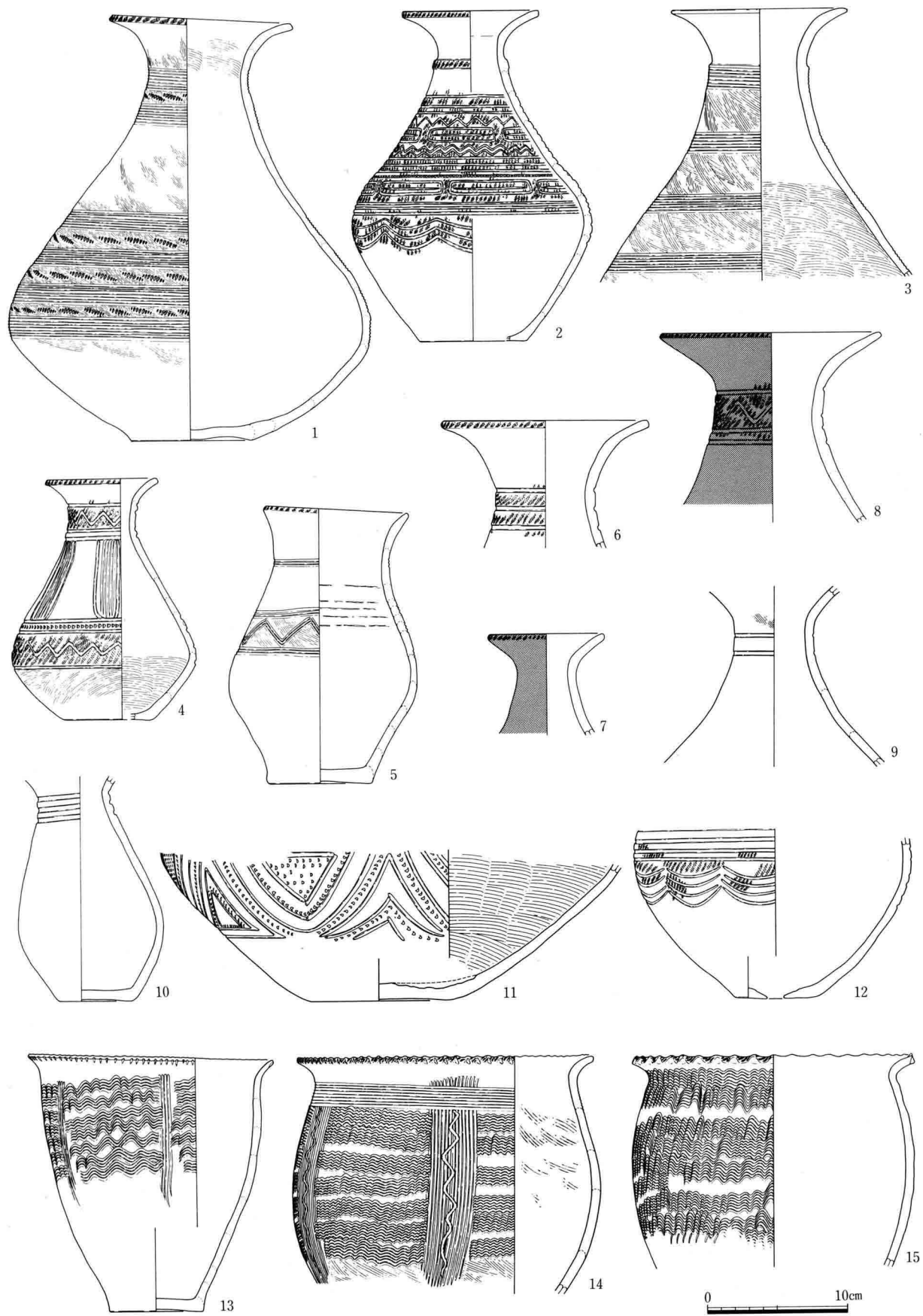
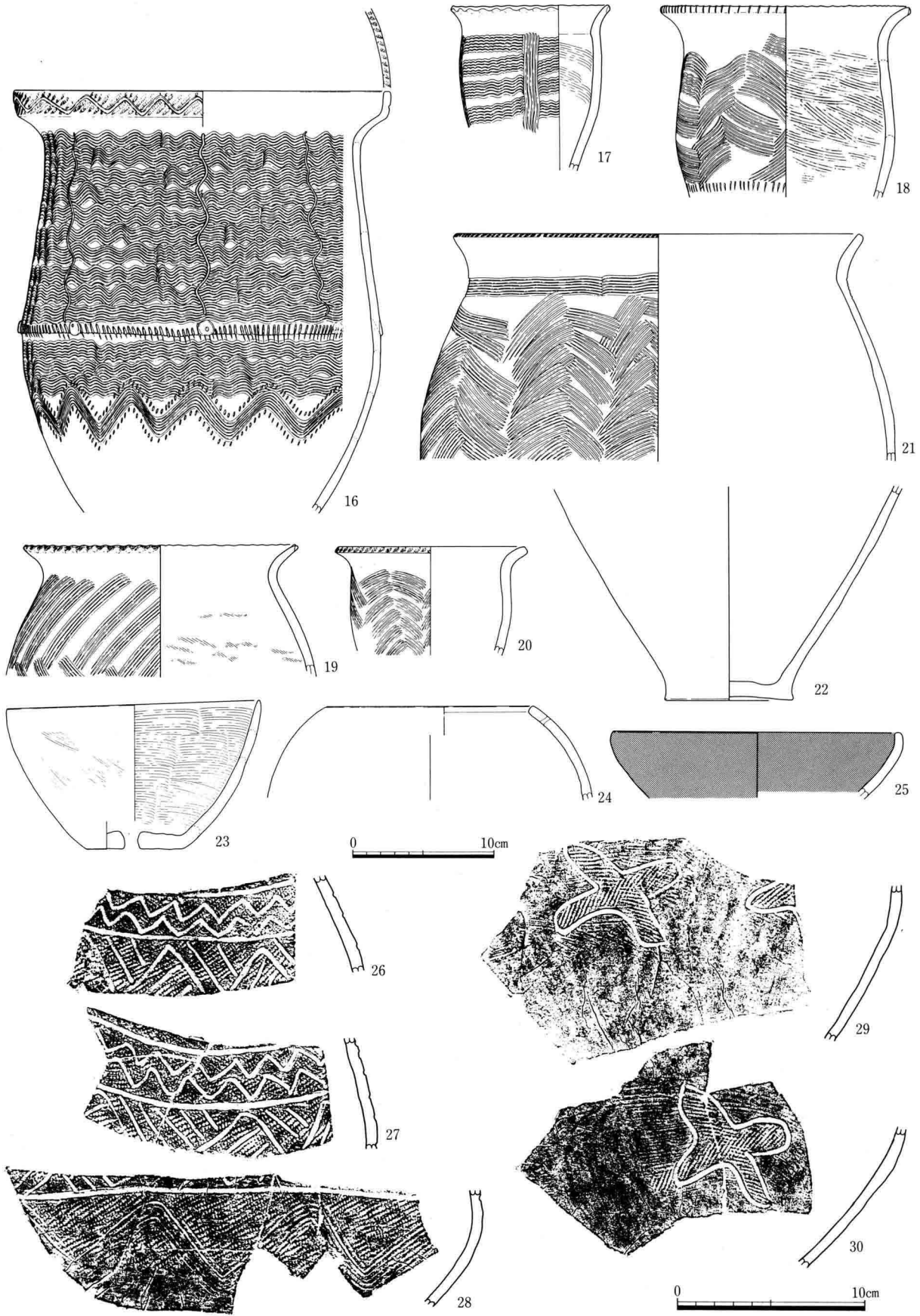


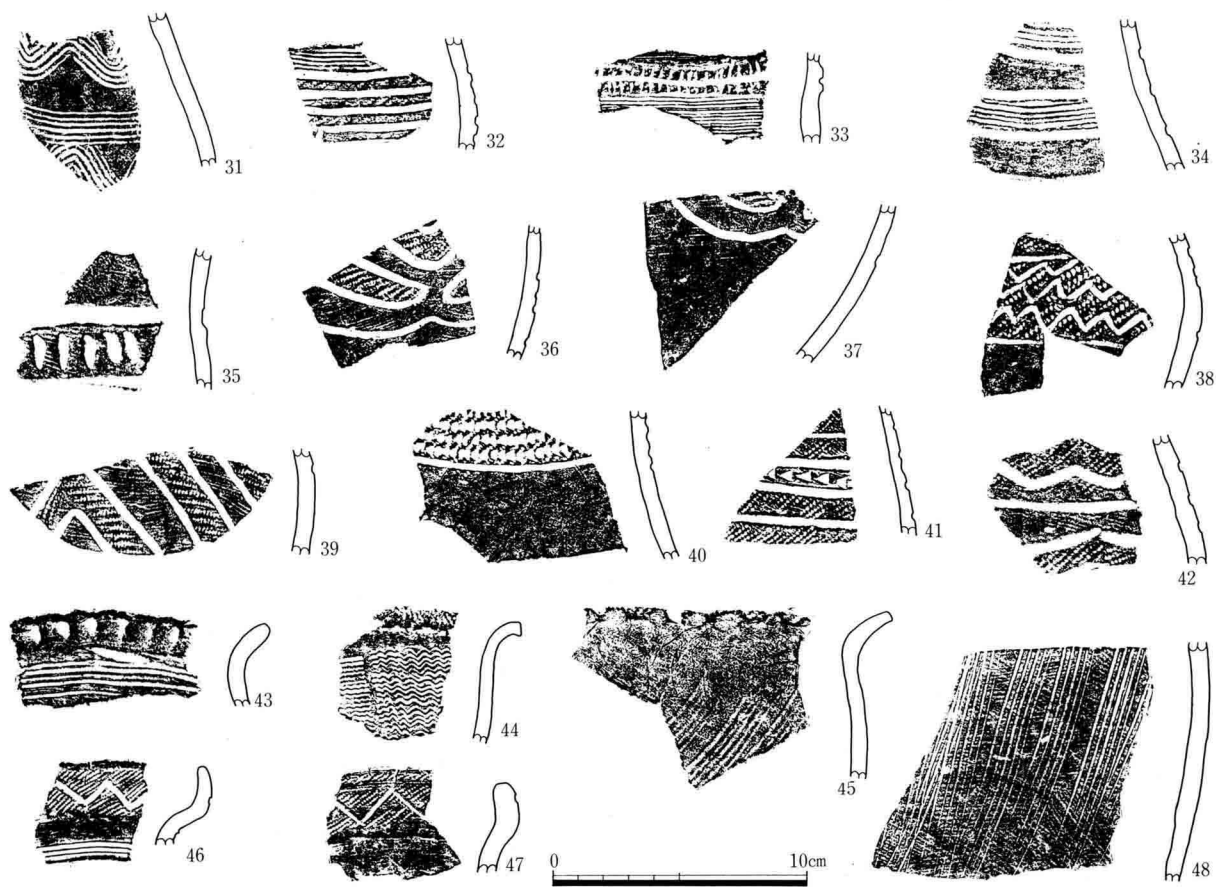
写真97 SA125



第80图 SA125遺物実測図(1)



第81图 SA125遗物实测图(2)



第82图 S A125遺物実測图 (3)



写真98 S A125遺物出土状況

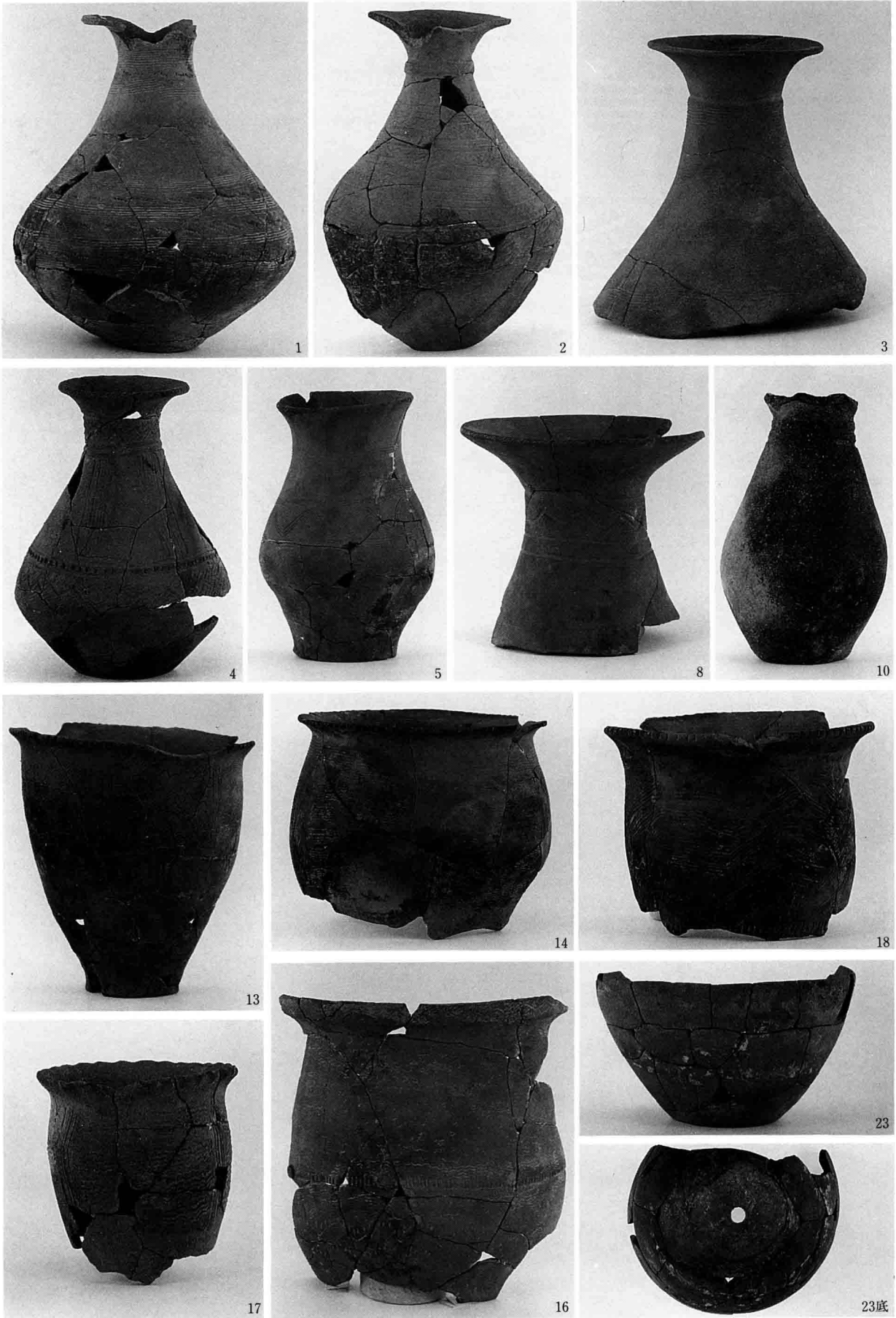
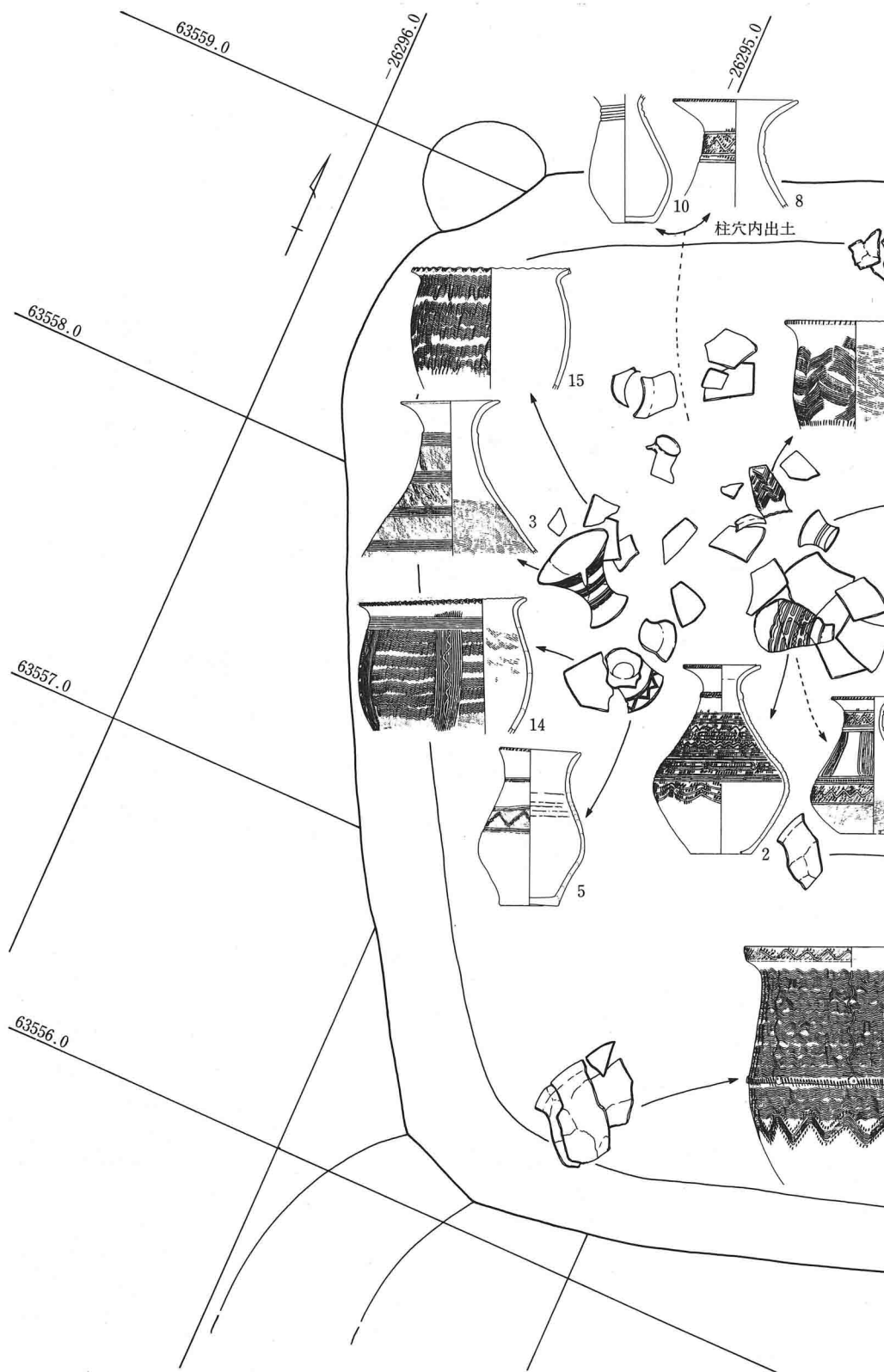


写真99 S A125遺物写真



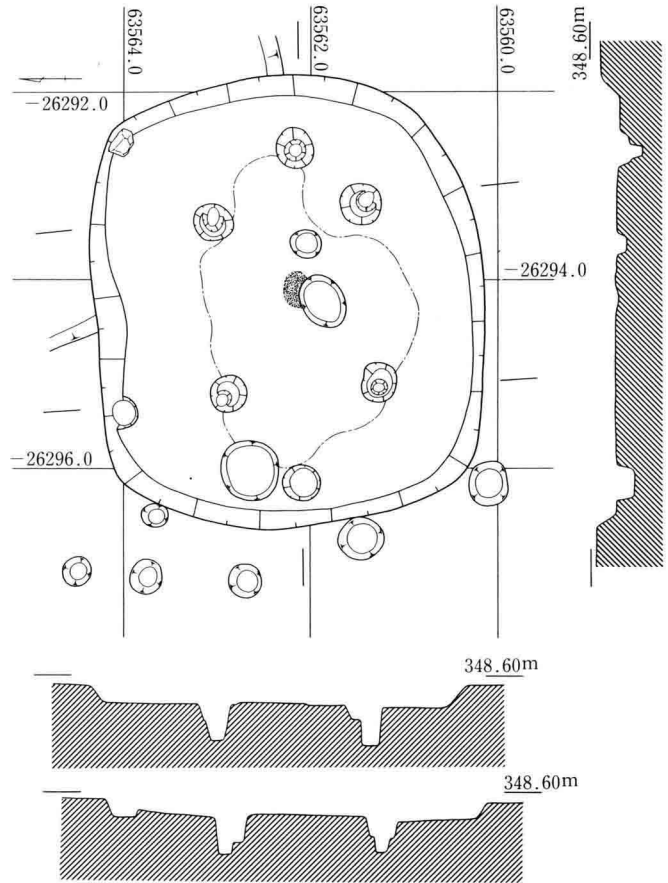
第83図 SA125土器出土状況

する。おそらく7ヶ所に施文されるものと思われる。その下には大きめの波状文を施したのち、文を連続的に施文する。胴部には粘土紐の接合部分を残したような形で有段とし、篋で刻みをの突起を貼付する。23は底部に穿孔を持つ鉢型の甑である。24は内湾する鉢で口縁部に現状でれ口縁端部は面取りされる。これら土器群は今回出土した土器の中でも古い段階に位置付けら

S A 126 (C区)

S A 128と重複関係にある。4.82m×4.15mを測る隅丸方形住居である。支柱穴は4本方形配列となり、主軸上には支柱穴が2本検出された。炉は住居中央に位置し床面を少し掘り込む地床炉となり、南側は平安土坑による攪乱を受ける。床面は炉を中心として支柱穴および支柱穴範囲内において非常に堅緻で、その他は明瞭ながら軟弱である。

出土土器 [第85図] は壺(1・2)と甕(3~5)がある。1は細頸壺で頸部には縄文を施したのち沈線で区画する。2は7条単位の櫛描きの直線文と短線文を交互に施文する頸部付近の破片である。3・4は単純口縁となる甕である。口縁端部には縄文を施し、3はそののち篋刻みを施し弱い波状口縁となる。頸部には櫛描直線文を施し、胴部には羽状文を施文する。5はやや不明瞭な受け口状を呈する甕で、縄文を施したのち山形文を施文する。口縁端部は縄文を施し、頸部には櫛描きの波状文を施文している。



第84図 S A 126実測図

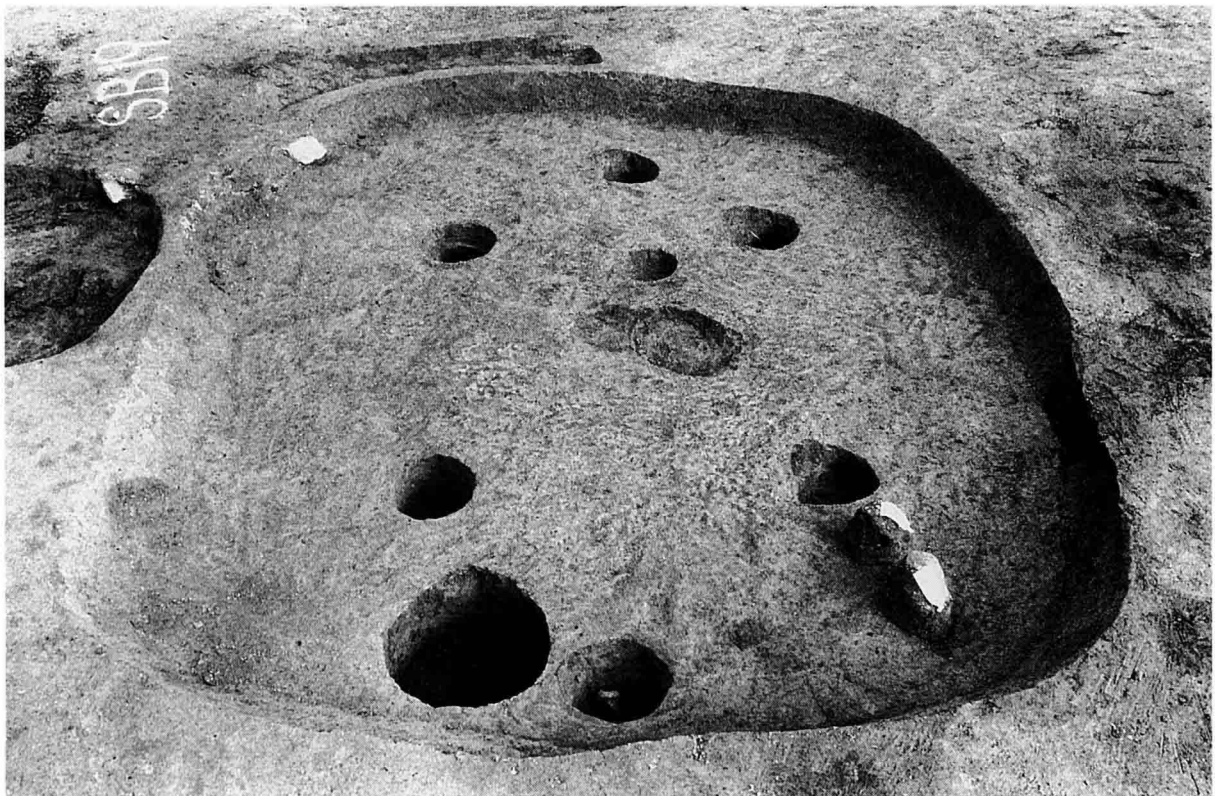
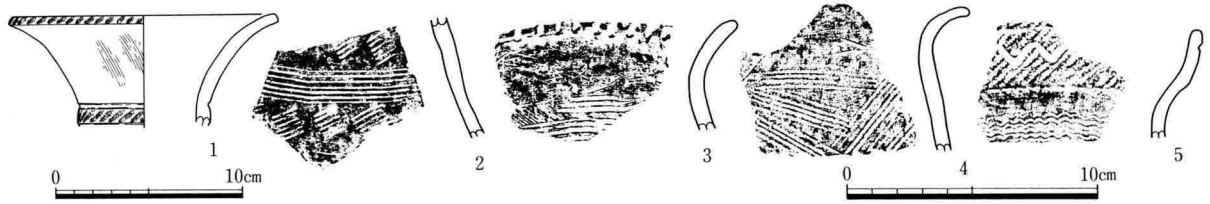


写真100 S A 126

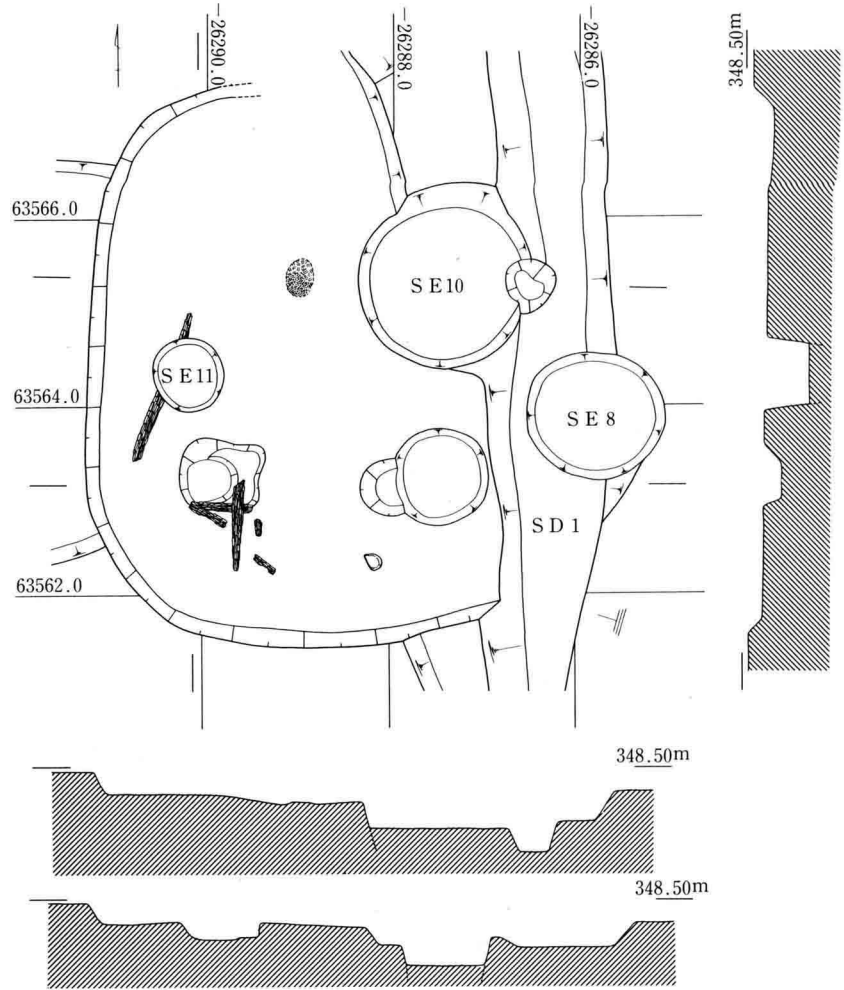


第85図 S A126遺物実測図

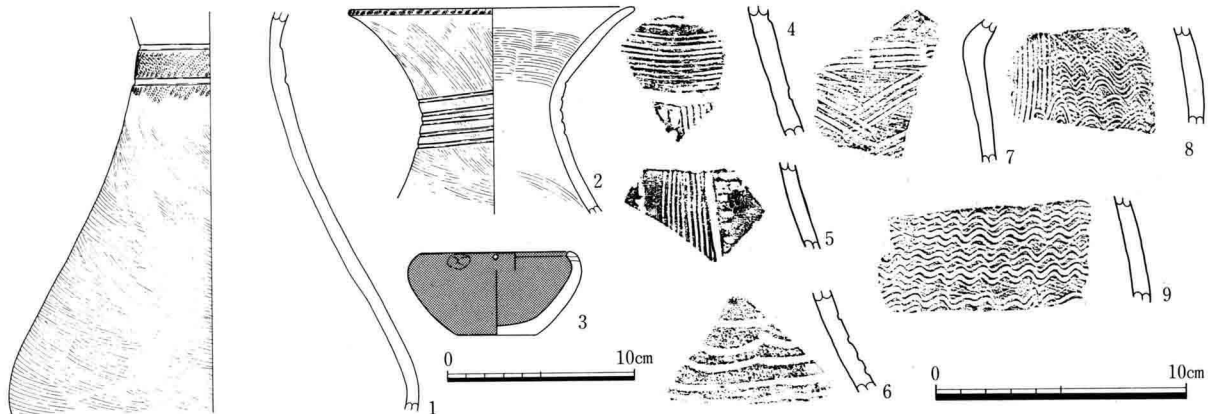
S A127 (C区)

S A128と重複関係にある。住居の大半をS D106と平安時代の井戸に破壊されてしまうため判然としないが、主軸方向5.90mを測る隅丸長方形住居である。支柱穴は2本のみ検出され、平面形はおそらく方形あるいは長方形を呈するものと考えられる。炉は住居中央より北にずれて位置し、若干掘り込みのある地床炉となる。床面は比較的明瞭に検出されたが全体に軟弱である。また南側の床面には炭化材が出土している。

出土土器 [第87図] には壺 (1・2・4~6)、甕 (7~9)、鉢 (3) がある。2は太頸壺で頸部には5本の沈線文が施される。3は全面赤彩する。口縁部には貼付けの突起が1ヶ所と小孔が1個穿たれ、内湾する口縁端部は面取りされる。



第86図 S A127実測図

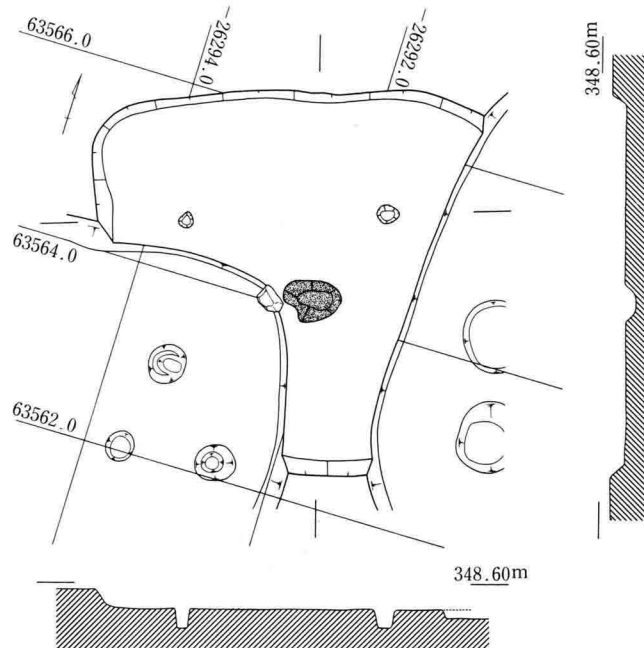


第87図 S A127遺物実測図

S A 128 (C区)

S A 126・127と重複関係にある。南北方向4.08 mを測る方形住居であるが、S A 126に南西側をS A 127に東側を破壊され、住居の半分程を失う。主柱穴は2本のみ検出され方形配列になるものと想定される。炉は住居のほぼ中央に位置し床面を浅く掘り込む炉となる。床面は明瞭ながら軟弱である。当住居跡は焼失住居で床面より夥しい量の炭化物や焼土塊が出土した [第90図]。

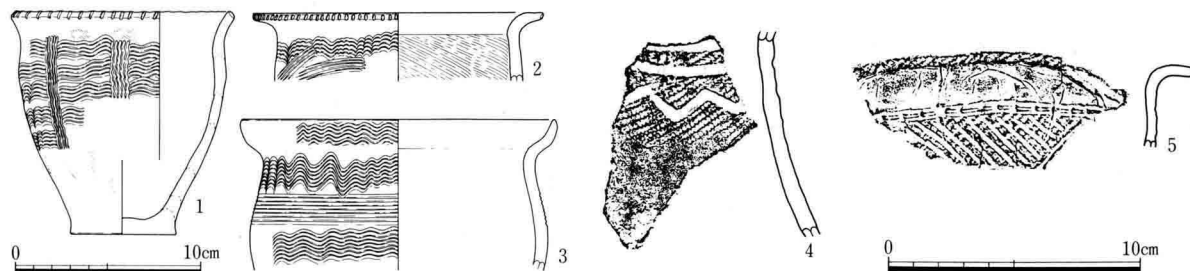
出土土器 [第89図] には壺(4)、甕(1~3)、台付甕(5)がある。4は頸部付近の破片で縄文を施したのち沈線文を施す。1は胴部に楕円波状文を施したのち縦方向に波状文を区画する。口縁端部は篋刻みによる。3は受け口状を呈する甕で波状文と直線文を交互に施す。



第88図 S A 128実測図



写真101 S A 128



第89図 S A 128遺物実測図



第90図 SA128遺物検出状況 (S = 1 : 40)



写真102 SA128遺物検出状況①

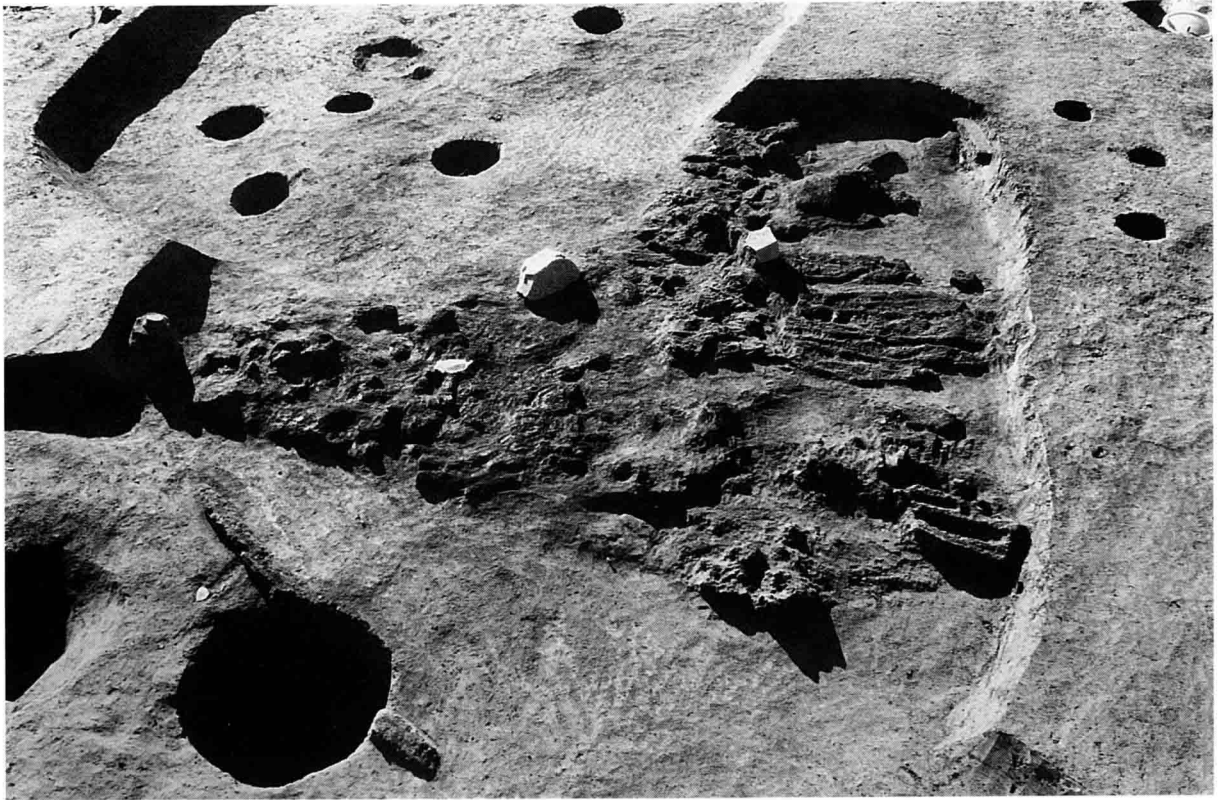


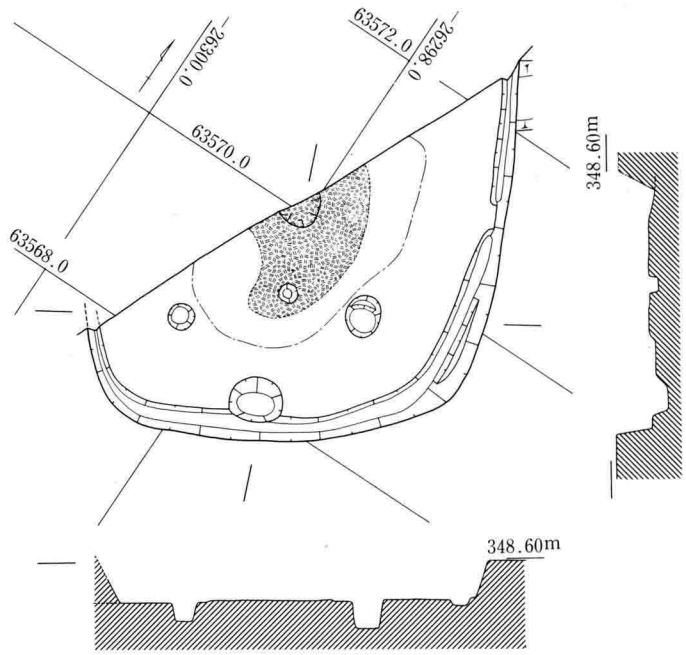
写真103 S A128遺物検出状況②



写真104 S A128付近遺構配置

SA129 (C区)

SA130と重複関係にある。住居の北側半分以上が調査範囲外にあるため判然としないが隅丸方形住居と考えられる。支柱穴は2本検出され平面形は方形または長方形を呈するものと考えられ、その中間には支柱穴が1本検出されている。炉は住居のほぼ中央に位置しているものと想定され、深さ5cm程の浅く掘り込まれた炉となる。炉の周辺には炭化物の広がりが見られる。床面は炉を中心として支柱穴間において非常に堅緻でその他は軟弱となり、また壁溝も検出され東側で一部とぎれ、南壁中央付近には出入口と想定される深く掘り込まれたピットが検出されている。

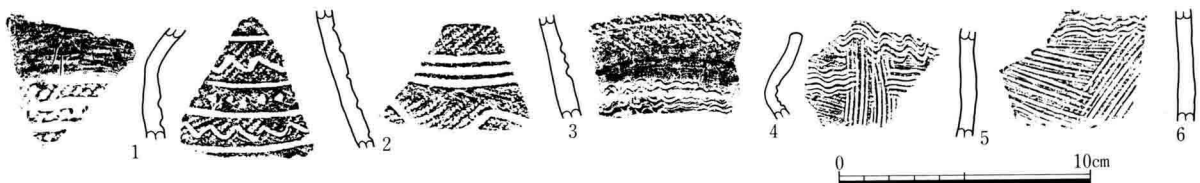


第91図 SA129実測図

土器は小破片のみ出土した [第92図]。



写真105 SA129

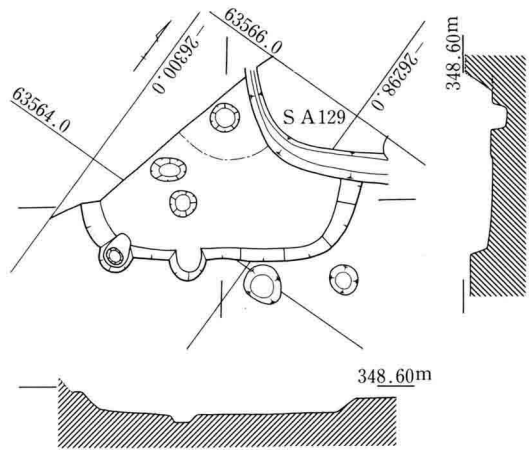


第92図 SA129遺物実測図

SA130 (C区)

SA129と重複関係にある。東側をSA129に破壊され、北側のほとんどが調査範囲外になってしまうため平面形は判然としないが、方形あるいは隅丸方形を呈する住居跡と考えられる。支柱穴は1本のみ検出された。他2本の柱穴も検出されたが用途は不明である。範囲内において炉は検出されず住居中央付近と思われる床面は堅緻であるがその他は比較的明瞭なものの軟弱である。

土器は少量ながら出土しているが、図化し得るものはなかった。

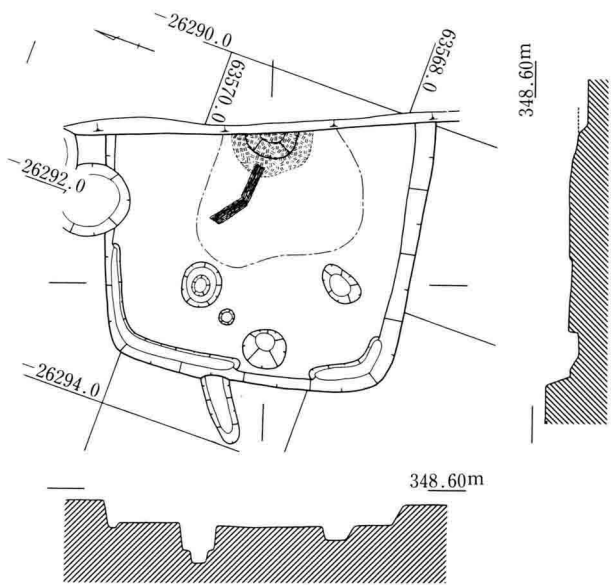


第93図 SA130実測図

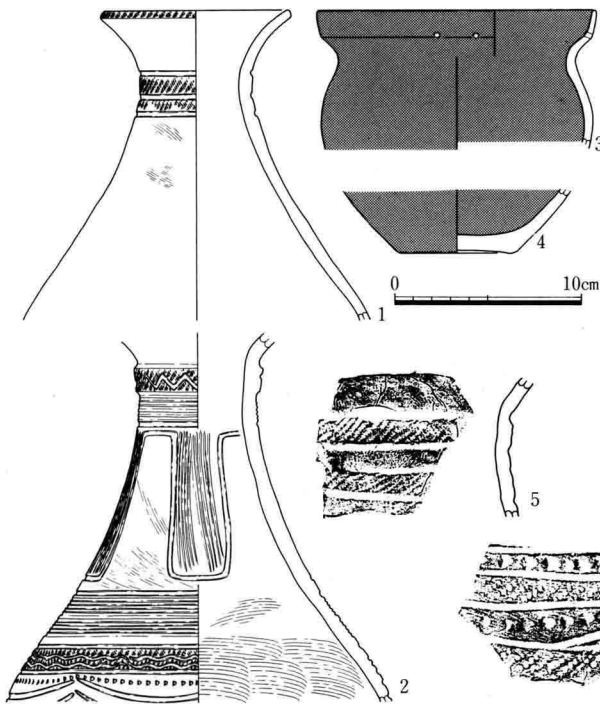
SA131 (C区)

住居の東側半分程をSD106に破壊されるため規模などは不明であるが、南北方向3.47mの方形を呈する住居跡である。支柱穴は2本長方形配列となると思われ、炉は地床炉でSD106に半分を壊されるが住居の中央もしくはやや東よりに位置するものと思われる。床面は炉の付近で堅緻であるがその他は軟弱である。また西壁には壁溝が検出されその中央には出入り口と思われる斜めに掘り込まれたピットが検出されている。

出土土器 [第95図] には壺 (1・2・5・6)、甕 (7・8)、鉢 (3・4) がある。壺は細頸である。3・4は同一個体であり受け口状口縁の鉢で全面赤彩される。



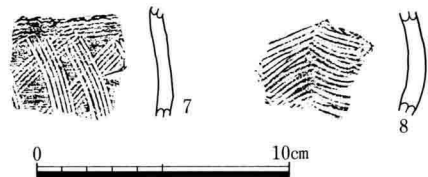
第94図 SA131実測図



第95図 SA131遺物実測図



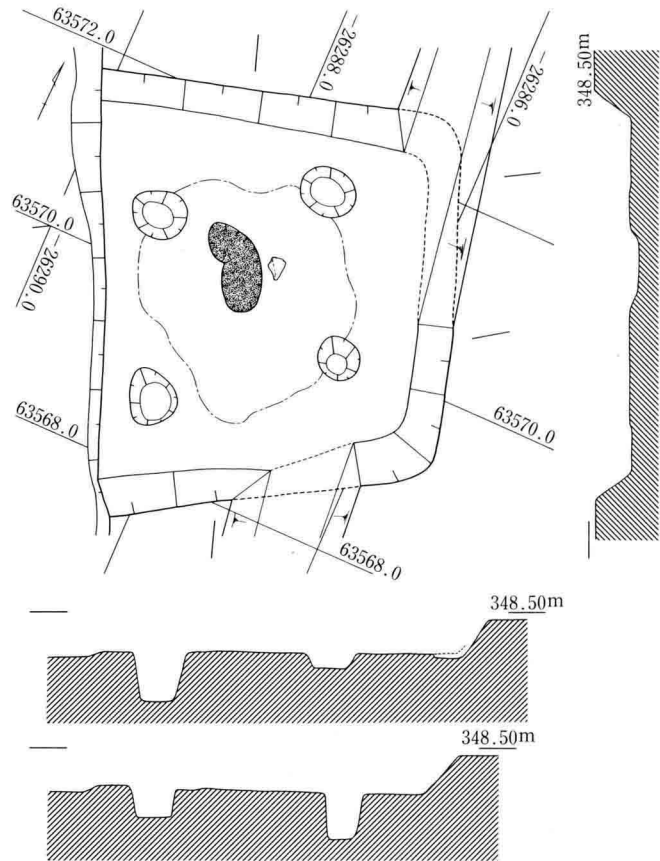
写真106 SA131



SA132 (C区)

住居西壁をSD106に破壊され東側は中世の溝が掘り込まれるため壁の一部に破壊を受ける。南北方向4.41mを測る方形を呈する住居であると思われる。支柱穴は4本検出され方形配列となる。炉は住居のほぼ中央に位置し床面を5cm程の浅い掘り込みの炉となる。床面は炉を中心とした支柱穴間において非常に堅緻でそのほかは明瞭ながら軟弱である。土器は覆土中より多く出土している。

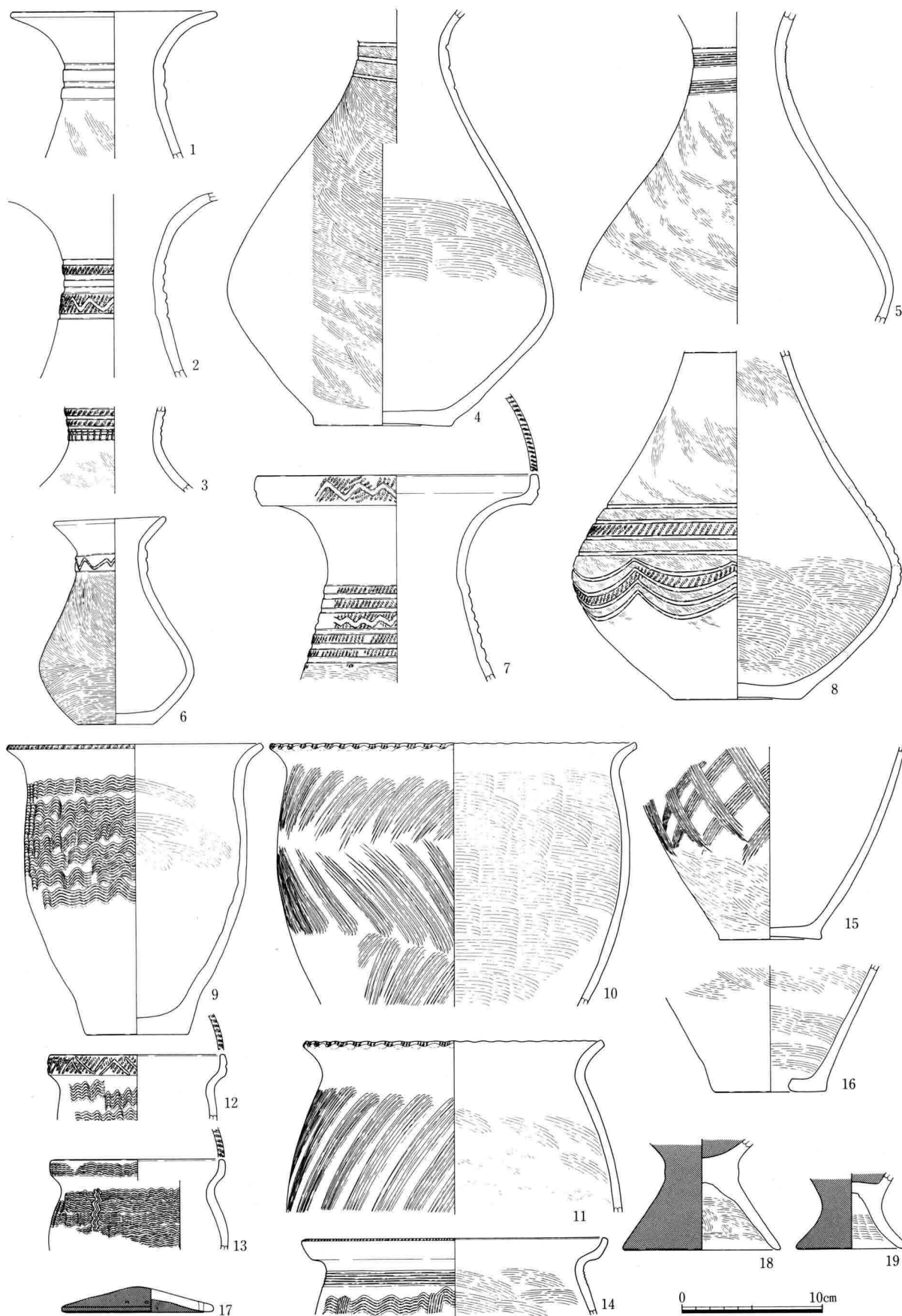
出土土器 [第97・98図] には壺 (1~8・20~22)、甕 (9~15・23~33)、甑 (16)、蓋 (17)、高杯 (18・19) がある。壺は全体に細頸であるが受け口状を呈する7のみ太頸である。文様は頸部と胴部に集中的に施文される。4は頸部に沈線文を施文するのみで他はハケとヘラミガキによる調整だけである。7は口縁部に縄文を施したのち山形文を施文し、端部には縄文を施す。かなり明瞭な受け口を呈する。9・12・13は頸部から胴部にかけて波状文を施文する。12・13は受け口状口縁となり、12は縄文を施したのち重山形文を、13は波状文をそれぞれ口縁部に施文する。12・13は台付甕となる可能性もある。10・11の口縁端部はユビオサエによる波状口縁となる。16は底部に焼成前の穿孔を持つ。17は全面赤彩され2ヶ一對の小孔が穿たれる。



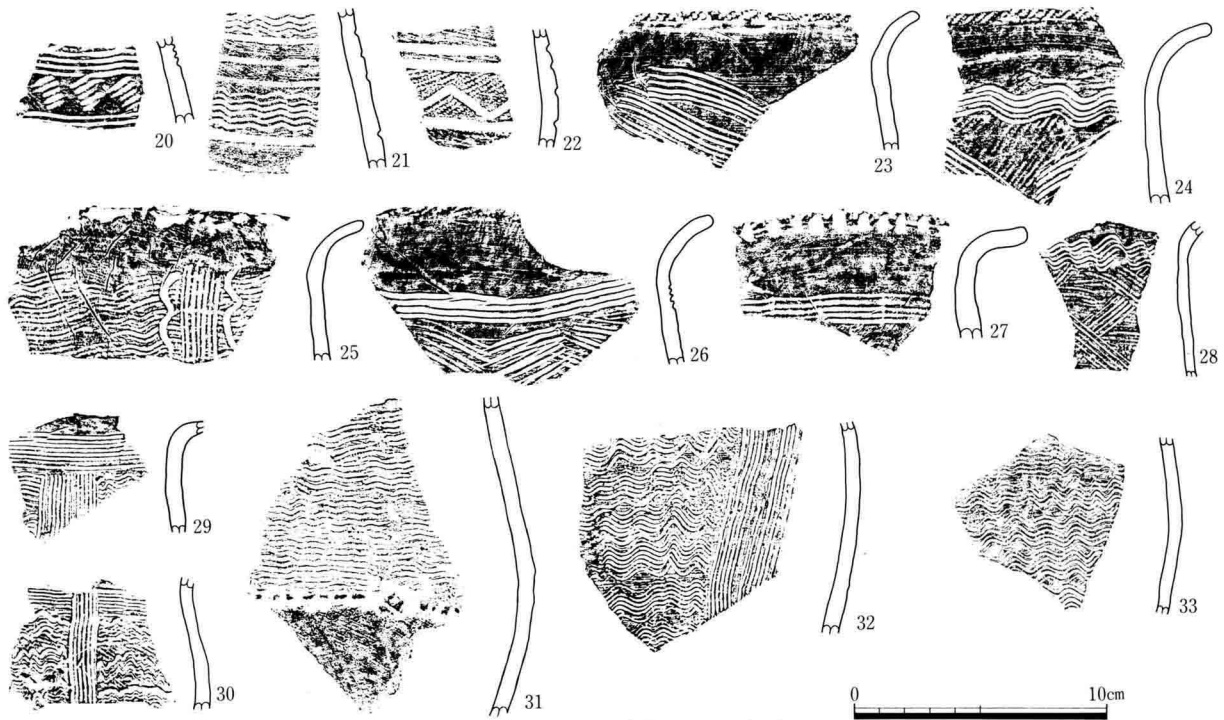
第96図 SA132実測図



写真107 SA132



第97图 SA132遺物実測図(1)



第98图 S A132遺物実測図(2)

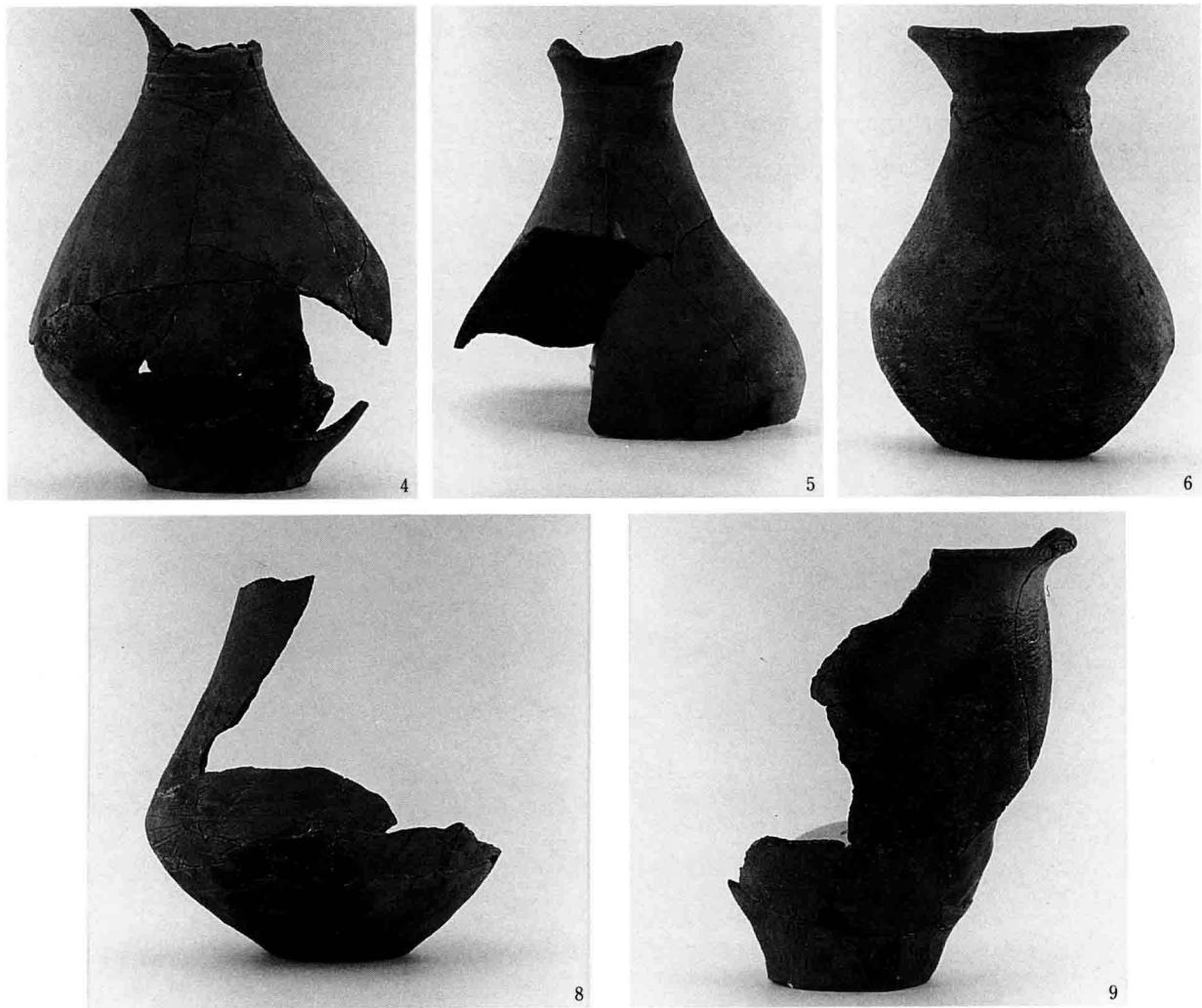


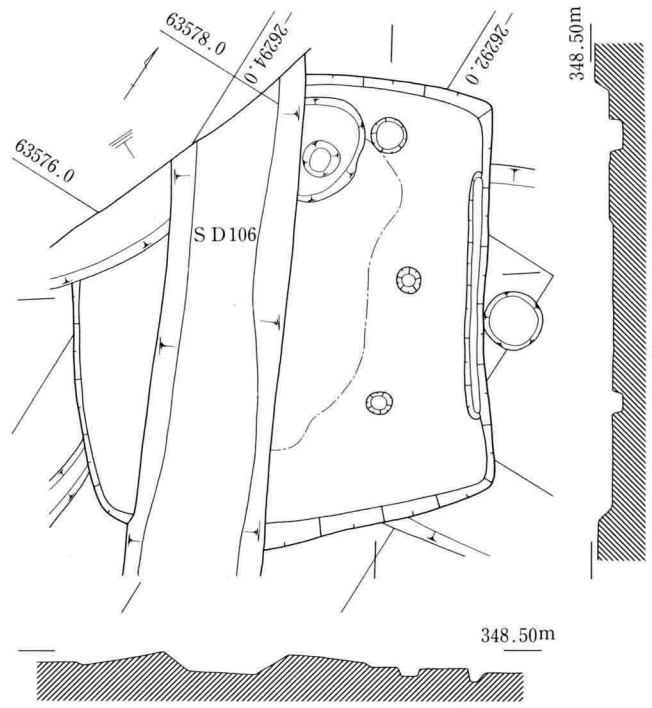
写真108 S A132遺物写真

S A 133 (C区)

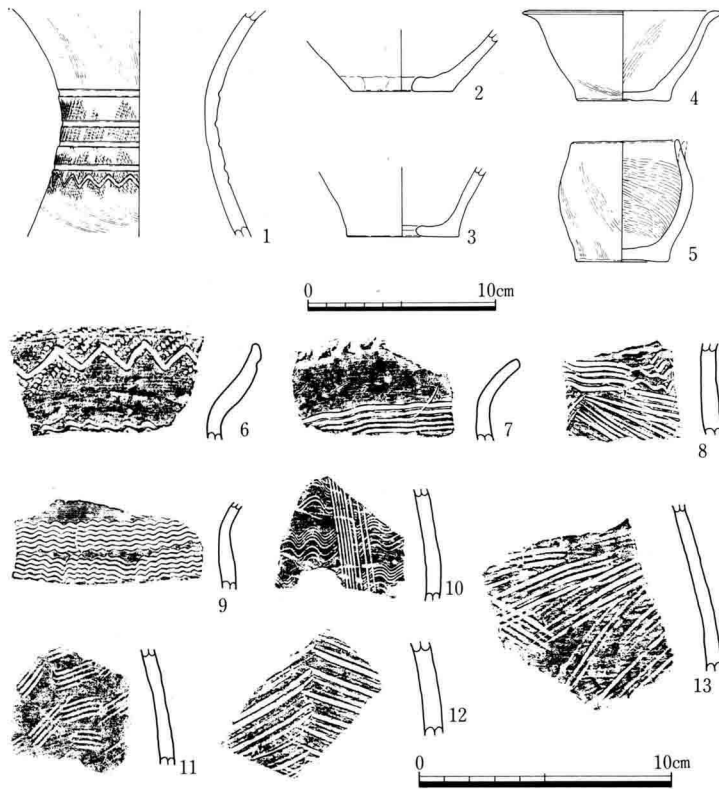
S K 125・S D 106と重複関係にあり、規模5.00m×4.36mを測る方形住居である。支柱穴は2本検出され長方形配列になるものと思われる。炉は住居中央にS D 106による攪乱を受けるため破壊されているものと考えられ、範囲内では検出されなかった。床面は中央付近に若干堅緻な部分はあるものの、やや不明瞭で溝付近がもりあがる。また東壁際には壁溝が検出されている。

出土土器〔第100図〕には壺(1)、甕(6~13)、甑(2・3)、鉢(4・5)がある。1は大頸の壺で縄文を施したのち沈線文と山形文を施文する。6は緩い受け口を呈する口縁部で、縄文を施したのち山形文を施文する。口縁端部には縄文を施し頸部には波状文を施文する。7の口縁端部は篋刻みによる弱い波状口縁となり、頸部には楯描直線文を施文する。8

~13は頸部から胴部にかけての破片で、羽状文を施文する8・11~13と波状文を施文する9・10がある。10は波状文を施文したのち縦方向の楯描直線文で区画する。2・3は底部に焼成前の穿孔を持つ甑と考えられ、2の底部はヘラケズリされる。4は口縁部が外反する鉢で全面ハケ調整したのちヘラミガキする。5は口縁部が内湾する。口縁端部には欠損しているものの片口と思われる指で掴み曲げた痕跡が残る。



第99図 S A 133実測図



第100図 S A 133遺物実測図

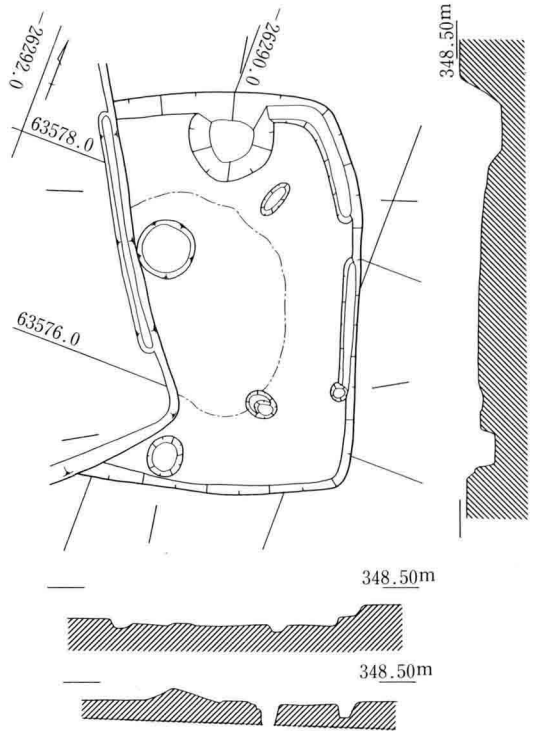


写真109 S A 133遺物写真

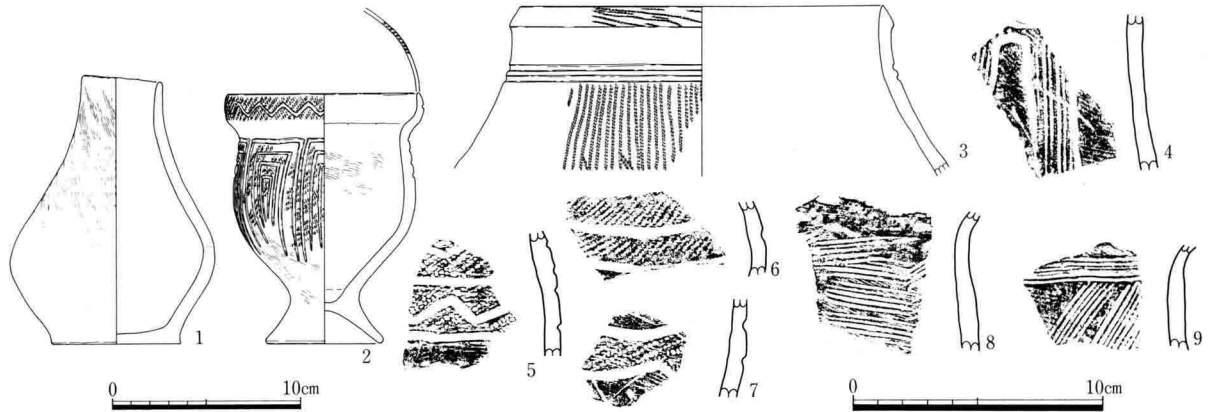
SA134 (C区)

住居西側をSA133に破壊されるため判然としないが、主軸方向4.26mの方形住居である。支柱穴は2本のみ検出され方形あるいは長方形を呈すると想定される。範囲内において炉は検出されなかった。床面は中央付近で若干もりあがり、非常に堅緻であるがその他は比較的明瞭ながら軟弱である。また北壁際にはやや大きめのピットが検出されているが出入り口に相当する施設であろうか。東壁には壁溝が検出されている。

出土土器〔第102図〕には壺（1・4～7）、甕（8・9）、台付甕（2）、鉢？（3）がある。1はSA122にみられた口縁部が外反しない壺で、今回やや頻繁に見受けられる器形である。2は受け口状口縁の台付甕で、口縁部は縄文を施したのち山形文を施文する。胴部には縄文施文ののち「コ」の字重ね文、口縁端部には一部分のみに縄文を施す。3は頸部に沈線文を施し口縁部と胴部に撚糸文を施文する。縄文時代の所産であろうか。



第101図 SA134実測図



第102図 SA134遺物実測図

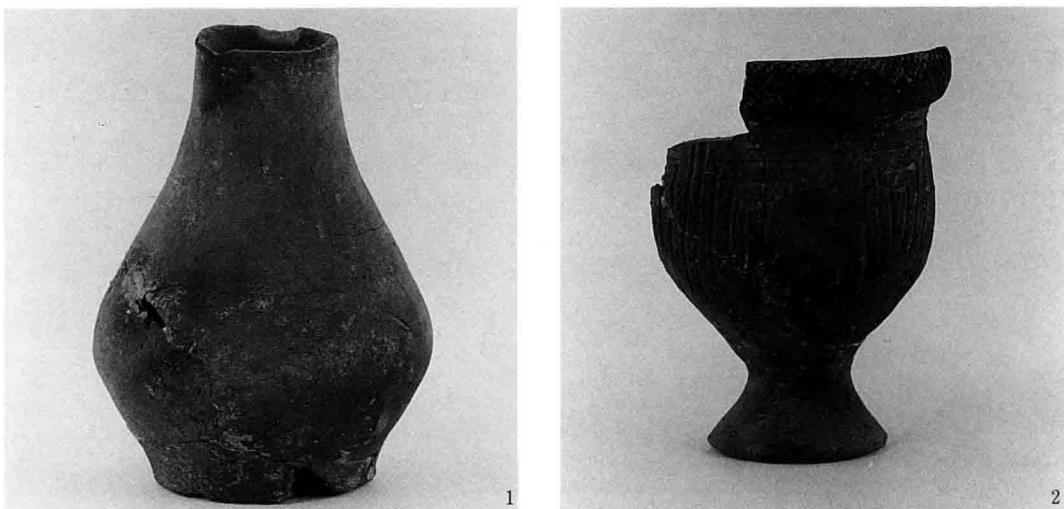
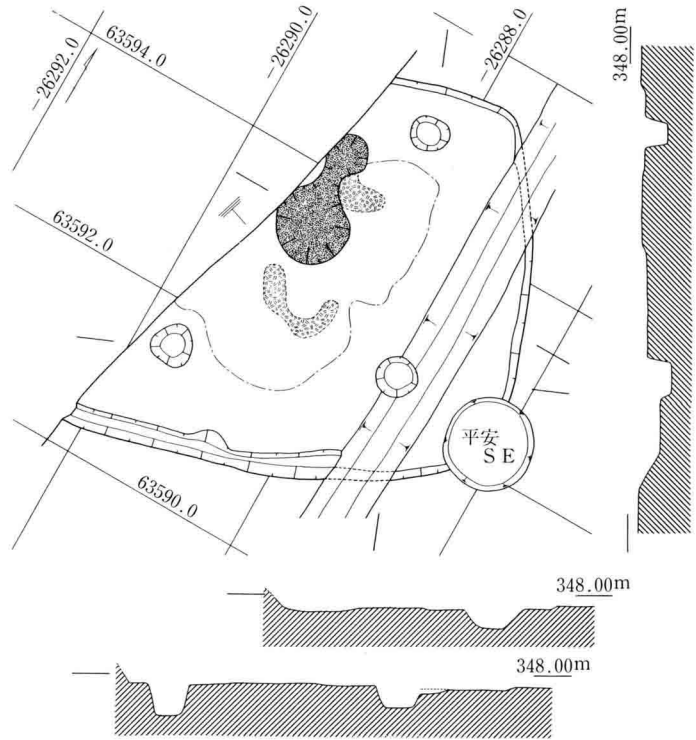


写真110 SA134遺物写真

S A 135 (C区)

S A 137と重複関係にあり、西側1/3程が調査範囲外であるため未検出であるが南北方向4.30mを測る方形住居である。支柱穴は3本検出され方形配列になるものと思われる。炉は住居中央やや北寄りに位置し2ヶ所検出された。新旧関係は不明であるが、双方とも掘り込みの浅い炉となり、周辺には少量の炭化物の広がりが確認できた。床面は炉の周辺で非常に堅緻でその他は軟弱である。南壁際には壁溝も検出されている。また住居東側はSD 1の攪乱を受けるため床と壁の一部を破壊される。

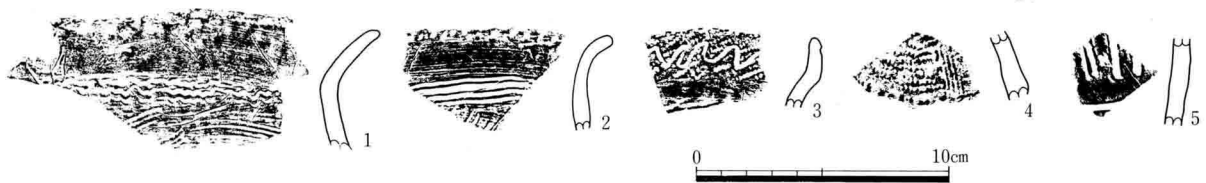
検出面より床面までが非常に浅いため土器の出土量は多くない。出土土器 [第92図] には甕があり5点のみ図化し得た。1・2は単純口縁、3は受け口を呈する口縁である。4・5は小破片で判然としないが台付甕の可能性もある。



第103図 S A 135実測図



写真111 S A 135



第104図 S A 135遺物実測図

S A137 (C区)

S A135・S K129と重複関係にある。西側は調査範囲外にあるため判然としないが主軸方向5.19mの隅丸方形住居である。支柱穴は3本検出され方形を呈するものと思われる。主軸上には2本の支柱穴も検出されている。炉は住居中央付近に2ヶ所検出され、1つは床面を浅く掘り込んだ炉、もう1つは底面に甕を敷いている土器敷炉である。炉周辺には炭化物の広がりが観察され、床面は支柱穴及び支柱穴範囲内において非常に堅緻である。

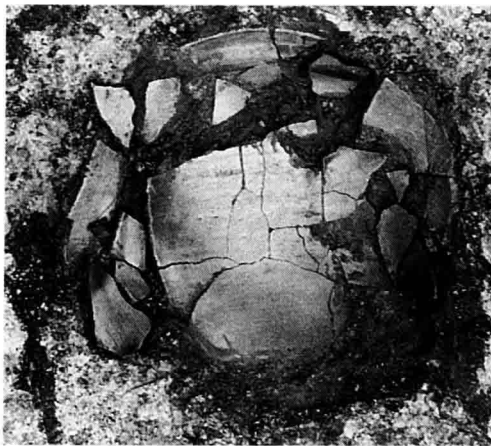
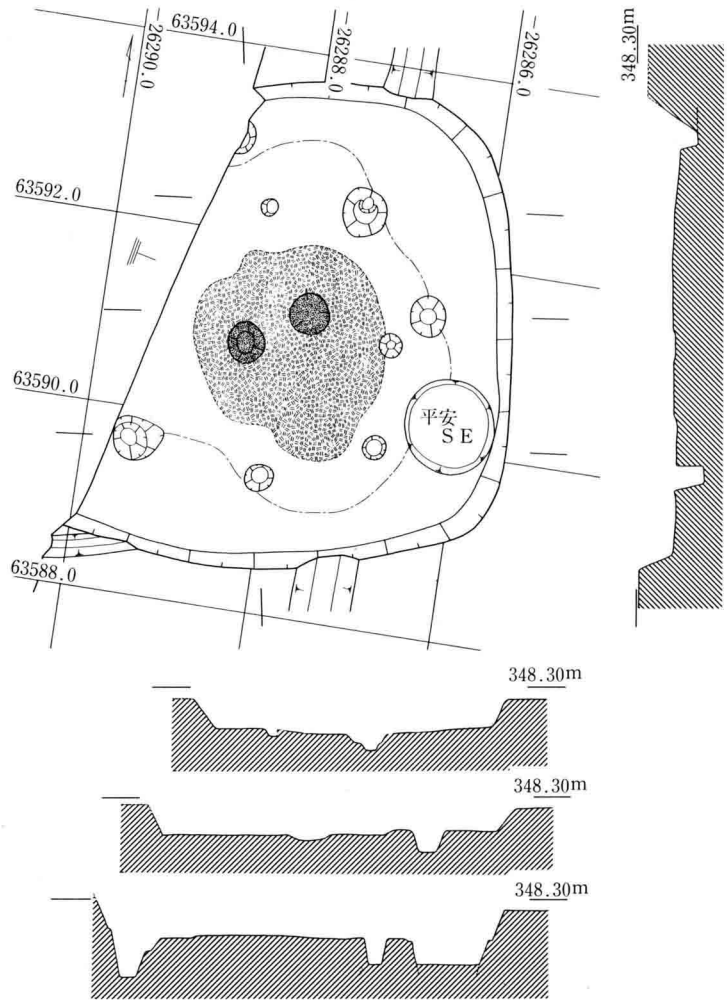


写真112 S A137炉検出状況

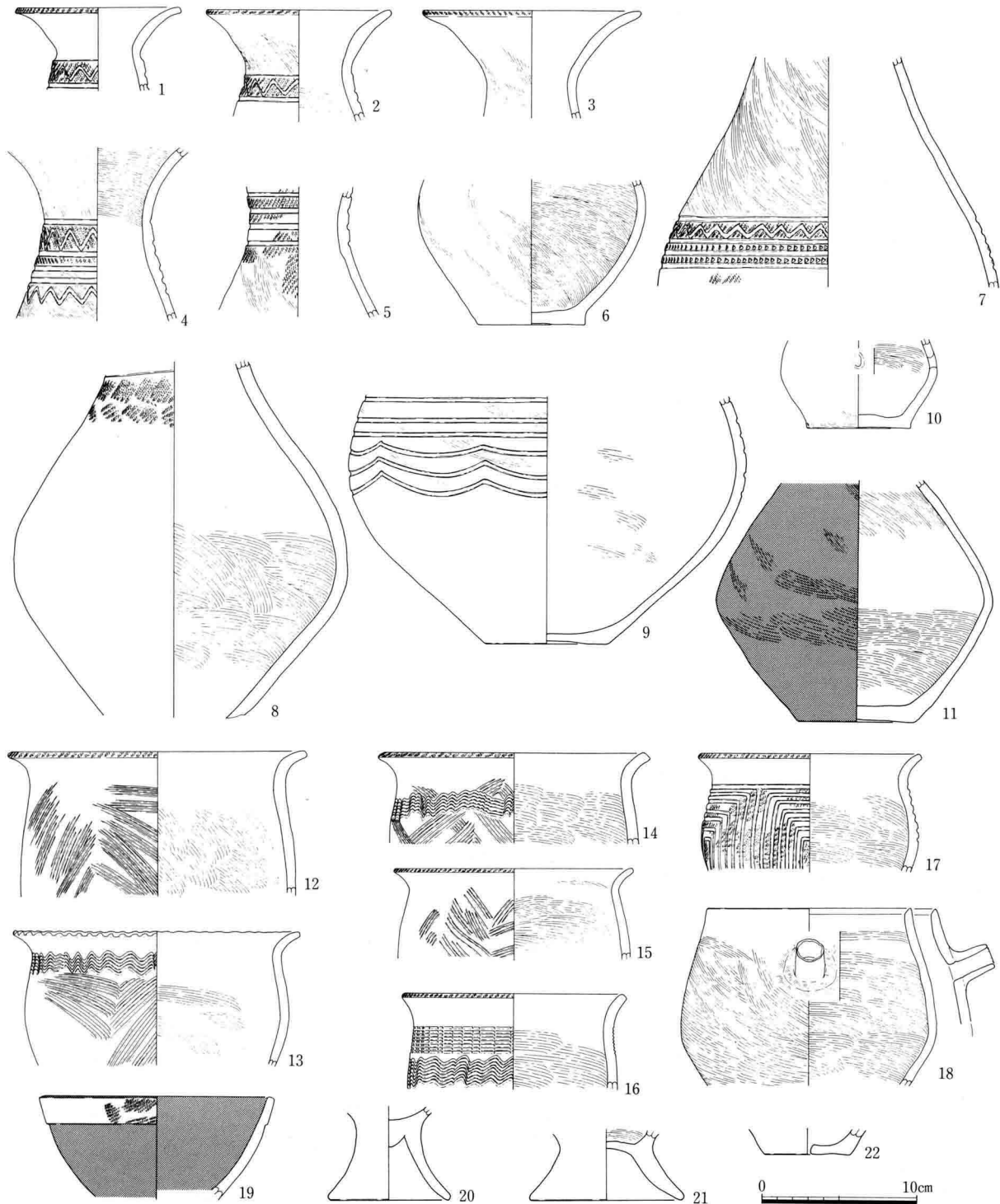


第105図 S A137実測図

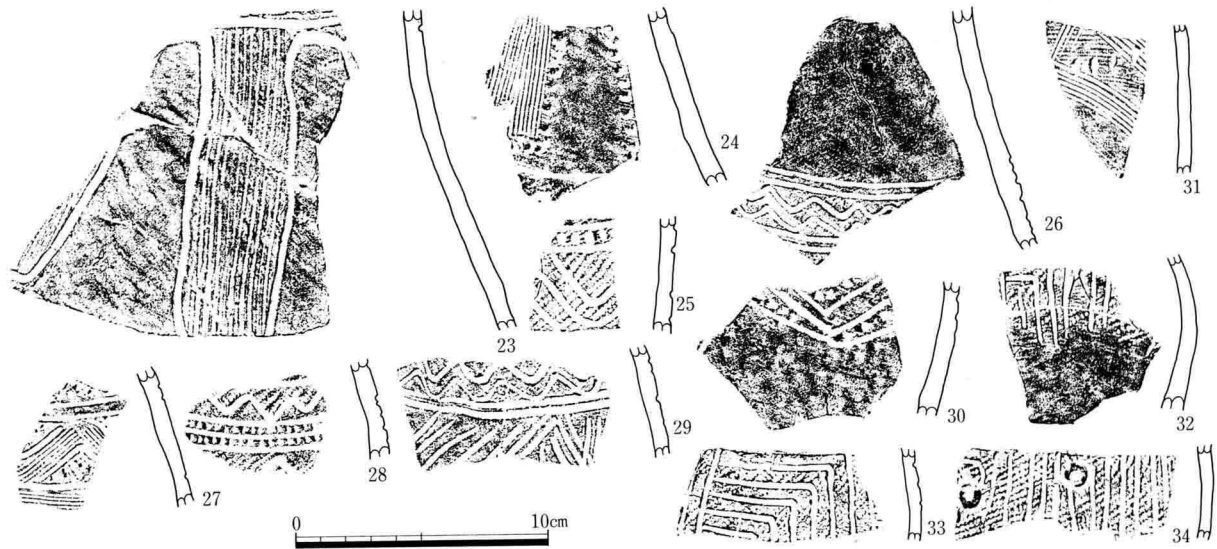


写真113 S A137

出土土器 [第106・107図] には壺 (1~11・23~30)、甕 (12~17・31~34)、台付甕 (20・21)、鉢 (19)、注口土器 (18)、甑 (22) がある。壺は全体に太頸である。頸部には縄文を施したのち主として沈線文を施文する。3は頸部に文様帯を持たない。10は胴部に焼成後穿孔され、11は外面が赤彩される。23・24は胴部に懸垂文を施文する壺で、23は沈線区画された中に櫛描直線文を縦方向に施し、24は直線文を縦に施文したのち周囲に刺突文を施す。16は頸部に簾状文、胴部には波状文を施文する。17・32~34は「コ」の字重ね文を施す台付甕となる可能性がある。18は鉢型の注口付き土器で、口縁端部を面取りする。19は鉢型の注口付き土器で、口縁端部を面取りする。19は口縁部のみ赤彩されず縄文を施す。



第106図 SA137遺物実測図(1)

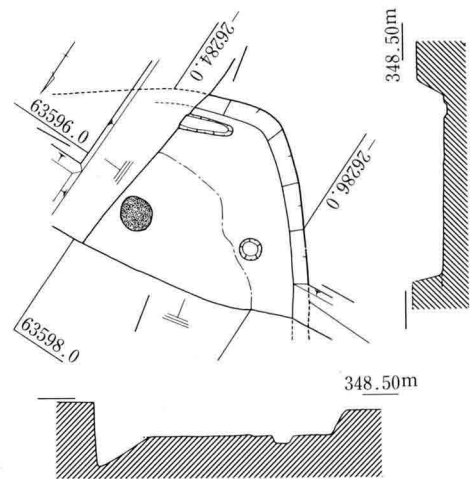


第107図 SA137遺物実測図(2)

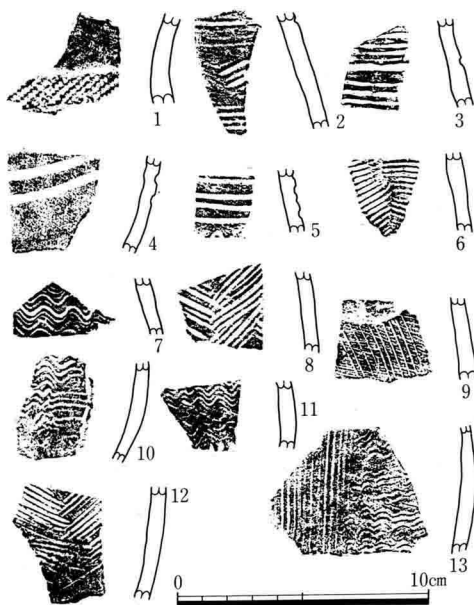
SA138 (C区)

住居跡の大半が調査範囲外にあるため、規模・住居形態など不明瞭であるが、方形を呈する住居跡であると想定される。支柱穴は確認されていないが、西壁中央付近に支柱穴と思われるピットが1本検出された。炉は調査区壁際に辛うじて検出され、住居中央より南よりに位置するものと思われる。床面は炉の付近で非常に堅緻でその他は明瞭ながら軟弱となる。また南壁際には壁溝が検出されている。

出土土器[第109図]には壺(1~5)と甕(6~13)がある。壺は全体に多段横帯文の文様構成となる。甕は櫛描きによる羽状文や波状文施文が主で13は直線文を縦方向に区画する。



第108図 SA138実測図



第109図 SA138遺物実測図

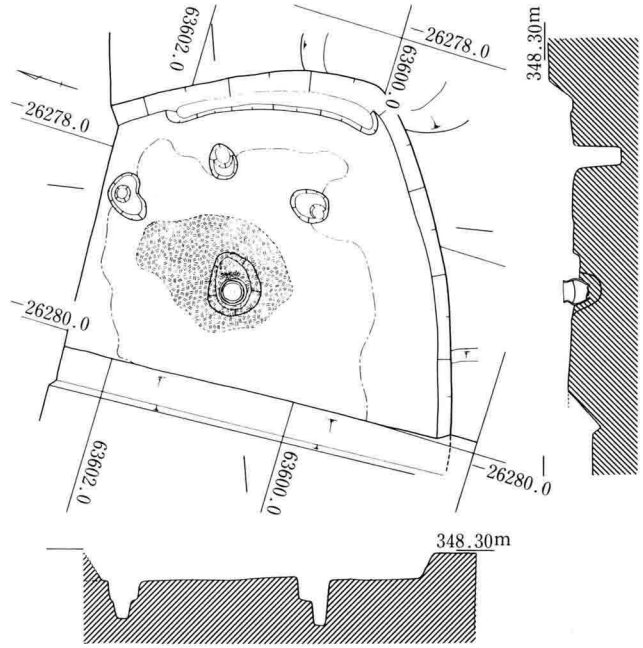


写真114 SA138

S A 139 (C区)

C調査区の北隅に検出された住居跡でS K131・133と重複関係にある。北側は調査範囲外、西側は1/3程が攪乱で破壊されているため検出されず、規模などは不明であるが方形を呈する住居跡であると思定される。支柱穴は東側に2本のみ検出され方形あるいは長方形を呈すると思われる。その中間には支柱穴が1本検出されている。炉は住居のほぼ中央に位置するものと思われる。床面を深く掘り込んだ炉で、底部を欠く甕〔第112図・3〕が出土した。甕を埋め込んだ炉は今回の調査では唯一例である。甕の中には炭化物が半分ほど堆積し、底面には別個体の甕の破片が敷かれていた。また炉を立割った際、掘り方も明瞭に観察された〔第111図〕。炉の周辺には炭化物が広範囲に広がり、床面は炉を中心とした支柱穴及び支柱穴間において非常に堅緻でその他は明瞭ながら軟弱となる。

土器は北隅に集中して出土している。出土土器〔第112図〕には壺(1・2・5~8)と甕(3・4・9~12)がある。1は小型の壺で頸部に縄文を施したのち沈線文で区画し、胴部は丁寧にヘラミガキする。2は口縁端部に3ヶ所指抓みによる突起を持つ。3は炉から出土した甕で、頸部に簾状文を施したのち胴部に羽状文を施文する。内面は丁寧にヘラミガキで仕上げる。4も頸部に簾状文、胴部には羽状文を施文する。



第110図 S A 139実測図

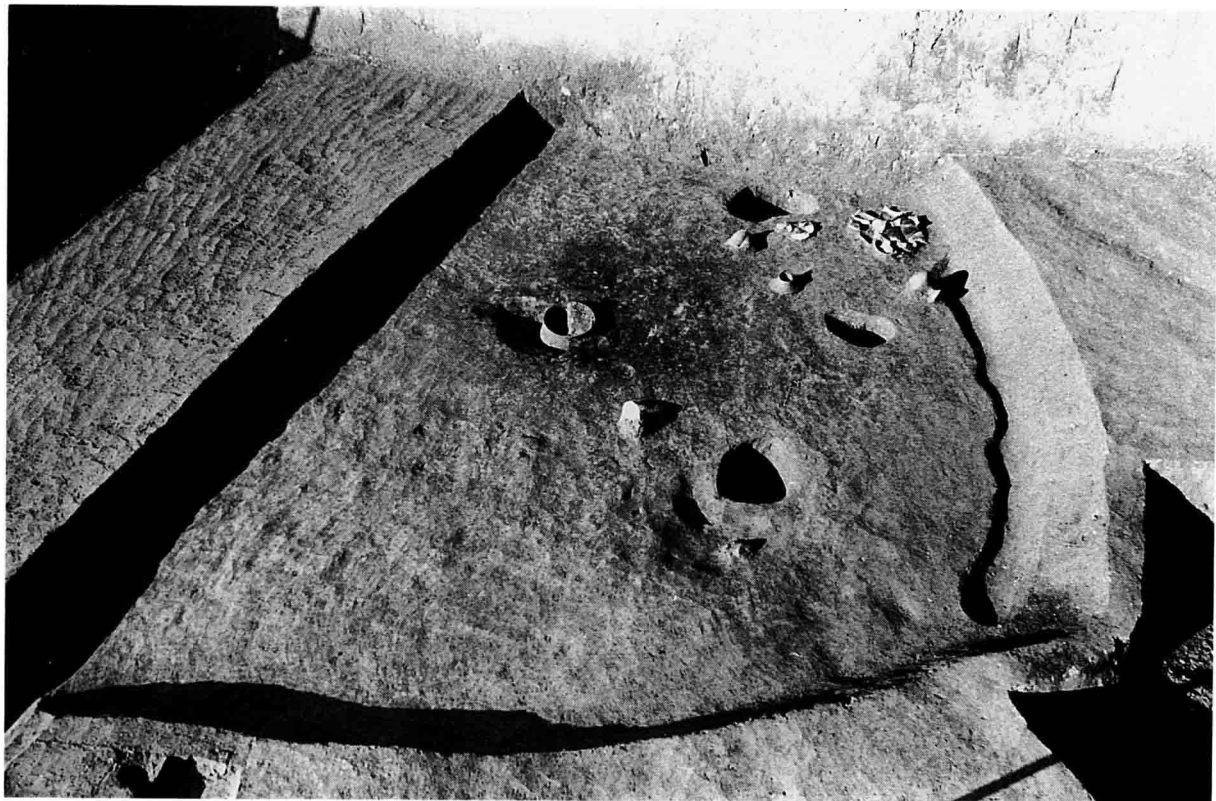
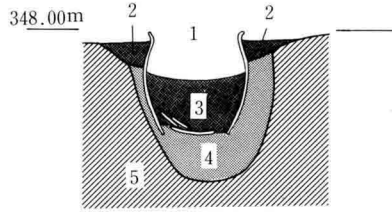
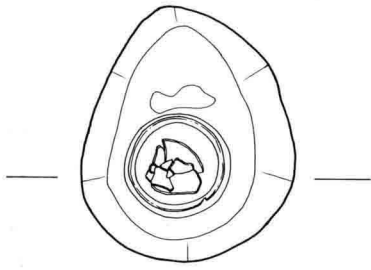


写真115 S A 139



第111図 SA139炉検出状況 (S = 1 : 20)

- 1 : 褐色 (住居覆土)
焼土・炭化物多少含む
砂質しまりあり
- 2 : 炭化物層
焼土多く含む
- 3 : 炭化物層
しまりなくやや粘りあり
- 4 : 灰黄褐色 (埋甕掘り方)
焼土・炭化物多く含む
砂質しまりややあり
- 5 : 黄褐色 (弥生中期基本層)
砂質しまりあり



写真117 検出状況



写真118 立割り状況



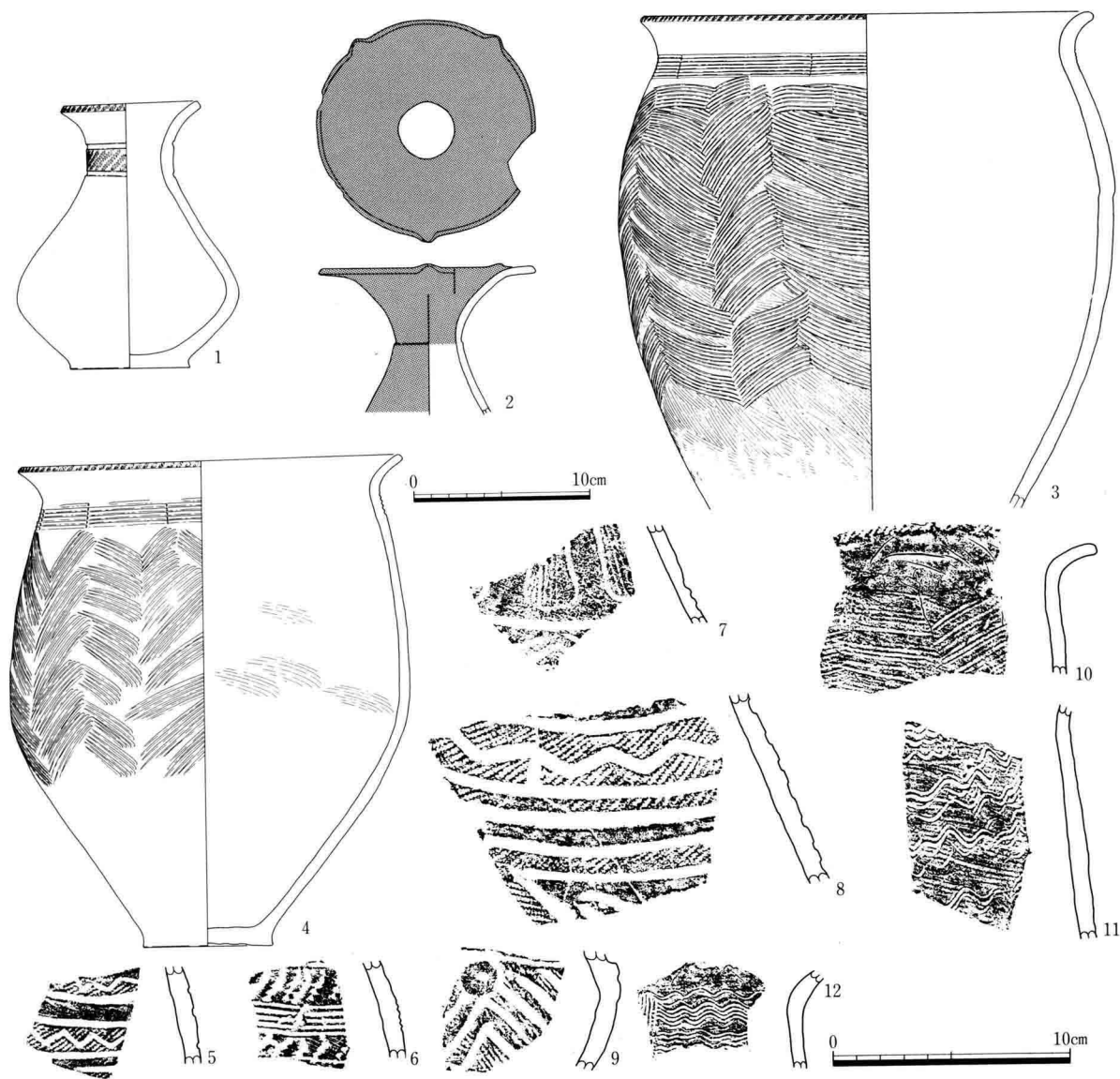
写真119 完掘状況



写真116



写真120 掘り方完掘状況



第112图 S A139遺物実測図



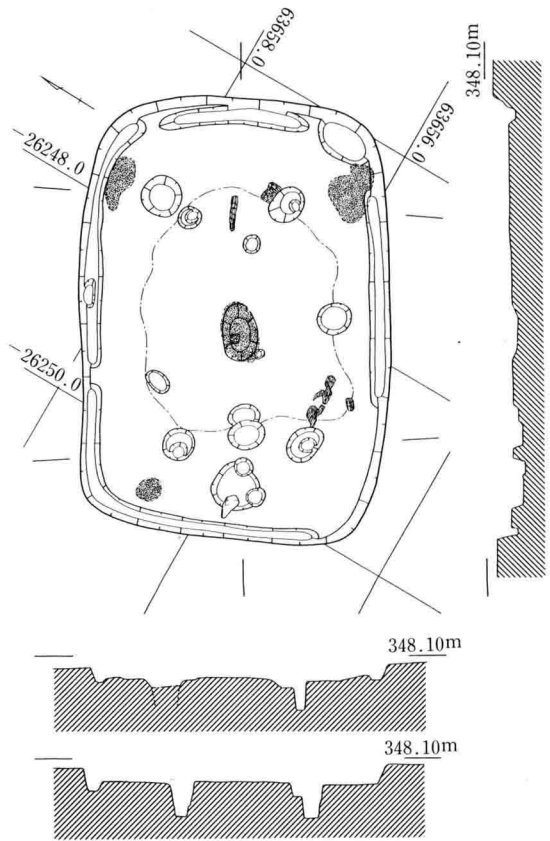
写真121

SA140 (D区)

D調査区で検出された住居跡2軒のうちの1軒で他遺構との重複関係はない。規模4.69m×3.33mを測る長方形住居である。支柱穴は4本方形配列となり、その他数本の柱穴が検出されたが用途は不明である。炉は住居のほぼ中央に位置し、床面を若干掘り込む地床炉となる。床面は炉を中心とした支柱穴間において非常に堅緻でその他は明瞭ながら軟弱となる。また床面の所々に被熱を受けたと思われる堅く変質した床が確認されているが当住居跡において焼失した痕跡は観察されない。壁際には部分的にとぎれはするものの壁溝が検出されている。また住居西壁脇中央には小ピットを伴う浅い掘り込



写真122 遺物出土状況



第113図 SA140実測図

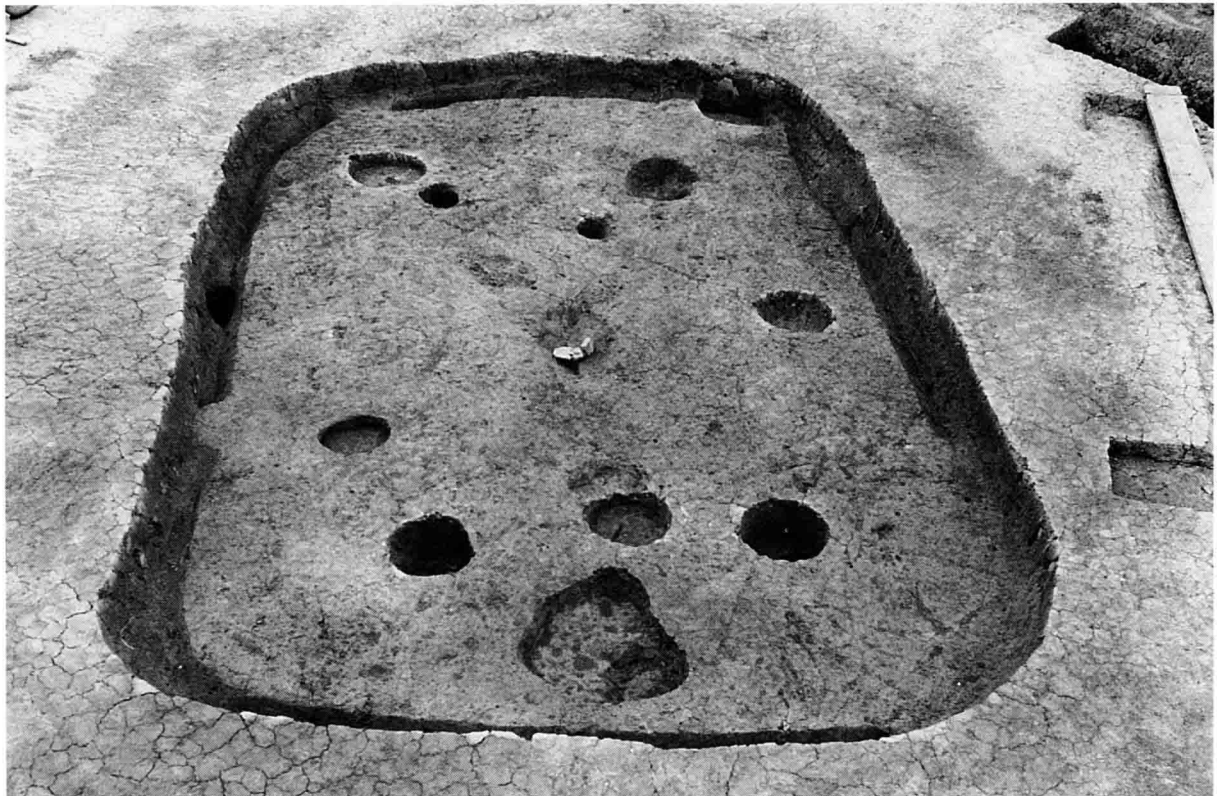
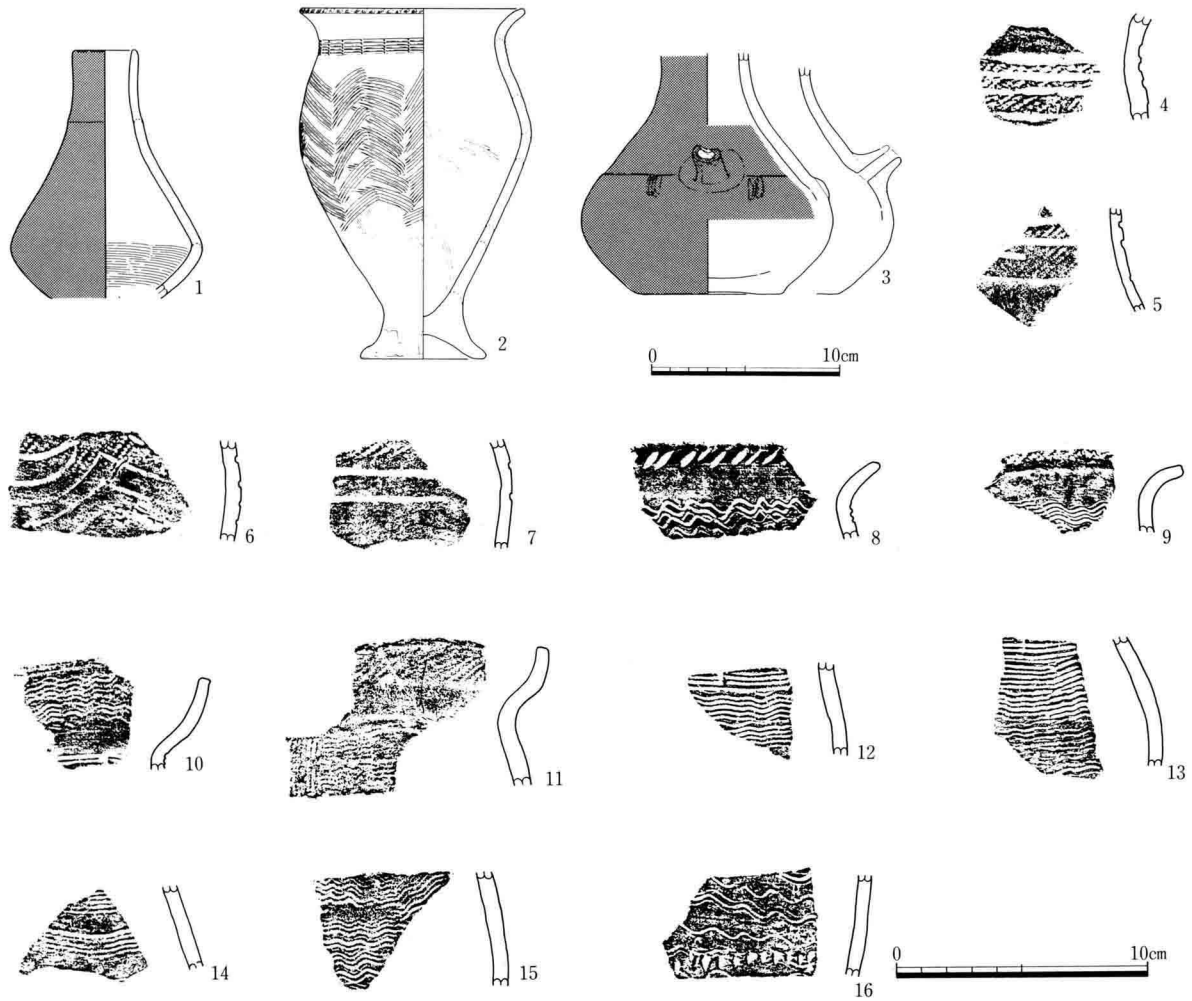


写真123 SA140

みが検出されているが、検出状況などから出入り口相当施設であると考えられる。

出土土器 [第114図] には壺 (1・3~7)、甕 (8~16)、台付甕 (2) がある。1は口縁部が外反しない壺で、頸部に接合痕による段を持ち外面が赤彩される。3は胴部に注口を持つ壺型土器で頸部より上を欠く。胴部には注口のほか2つ単位の貼付け突起を5ヶ所に配置する。4・5は頸部破片で縄文を施したのち沈線文を施文する。6・7は胴部破片である。8・9は単純口縁の甕で8は端部に篋刻みを施す。10・11は受け口状を呈する口縁部である。2は頸部に簾状文、胴部には羽状文を施文する台付甕である。



第114図 S A140遺物実測図

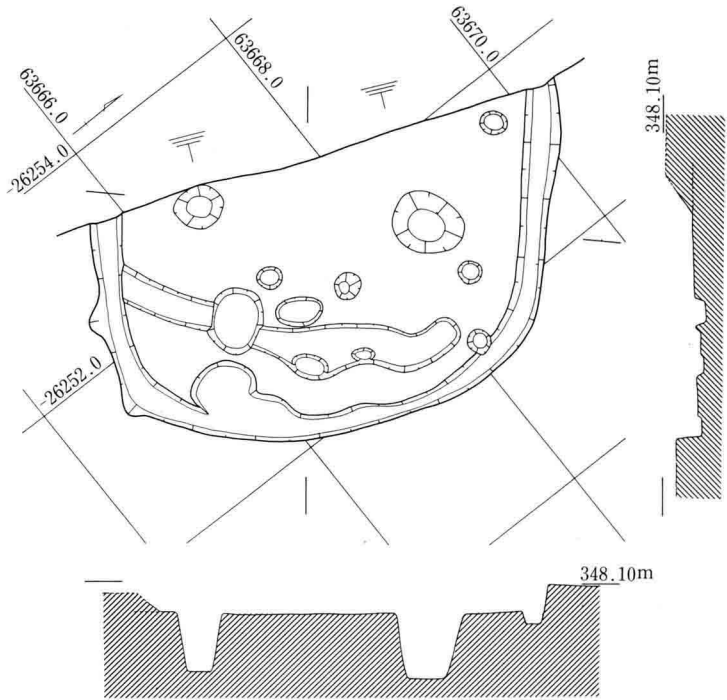


写真124

S A141 (E区)

調査区の南隅で検出された住居跡で他遺構との重複はない。北側半分程が調査区域外のため判然としないが、東西方向4.92mを測る隅丸方形を呈する住居であると想定される。調査範囲内において炉は確認されず、支柱穴も2本のみ検出された。壁際には壁溝が巡り出入口と思われる小ピット群が、またその付近には深さ5cm程の溝状の掘り込みが確認されている。

出土土器 [第116図] には壺(1~4)と甕(5~10)がある。1は頸部付近、2~4は胴部付近の破片で沈線文を主体とした文様構成となる。5は口縁部、6~10は胴部付近で、波状文や羽状文などの櫛描文が主体となる。10は「コ」の字重ね文となる。



第115図 S A141実測図

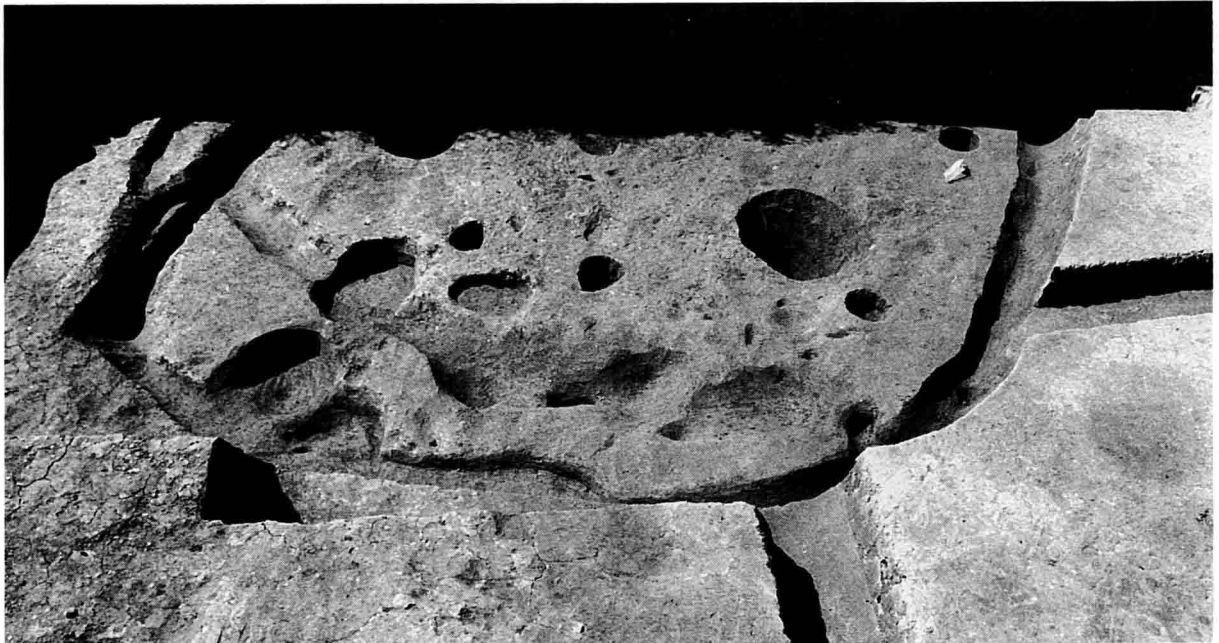
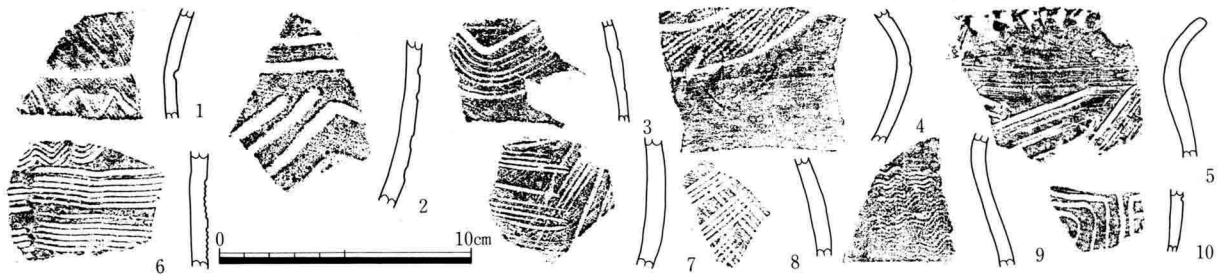


写真125 S A141

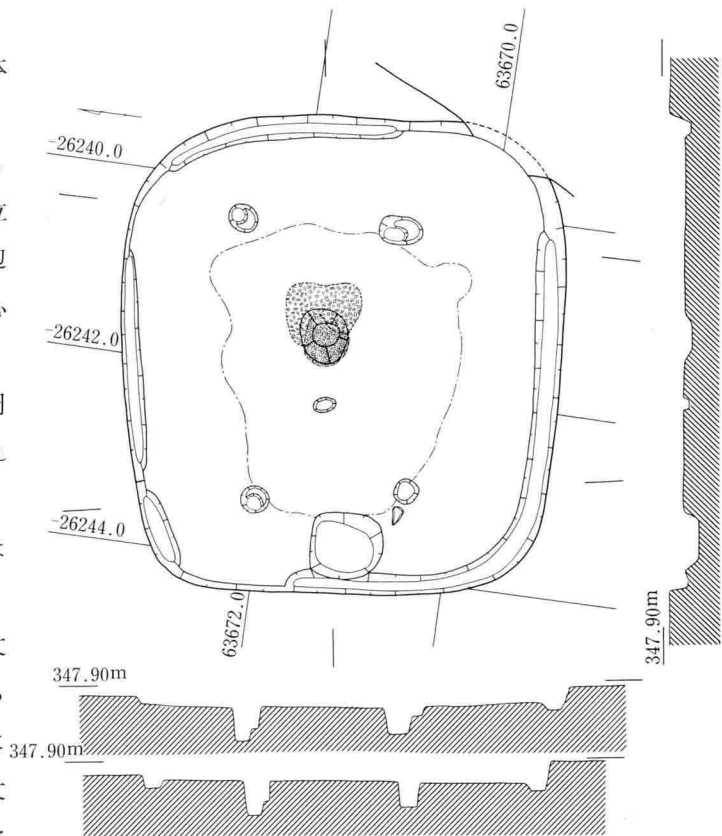


第116図 S A141遺物実測図

S A 142 (E区)

住居東隅一部が調査範囲外となるがほぼ全体を検出できた住居で、他遺構との重複もない。5.08m×4.68mを測る方形住居で、支柱穴は4本長方形配列となる。炉は住居のほぼ中央に位置する浅掘炉で、底面は火床が見られる。周辺には炭化物が小範囲の規模で広がり、炉を中心とした支柱穴間内の床面は非常に堅緻である。また壁溝は4箇所に断絶部があるが、ほぼ全周する。住居西側の支柱穴間には出入口と思われる窪みが検出されている。

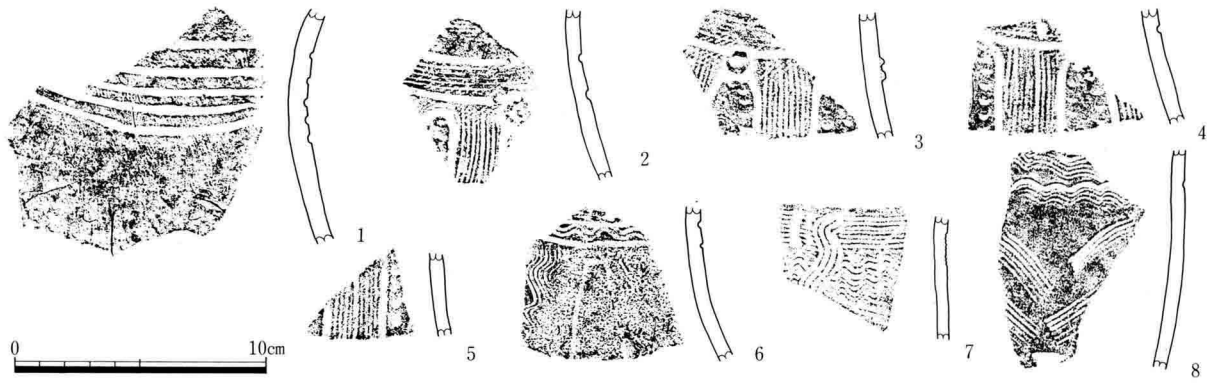
住居の検出規模の割合に比べ土器の出土量は少ない。出土土器 [第118図] には壺(1~6)と甕(7・8)がある。1は頸部で5本の沈線文を施す。2~5は同一個体で懸垂文を施文する頸部付近の破片である。6も頸部で、沈線内に波状文を施す懸垂文となる。7は頸部に簾状文を施したのち胴部に波状文を施し縦方向に波状文で区画する。8は頸部に2段の波状文と胴部は羽状文を施文する。



第117図 SA 142 (1 : 80)



写真126 S A 142

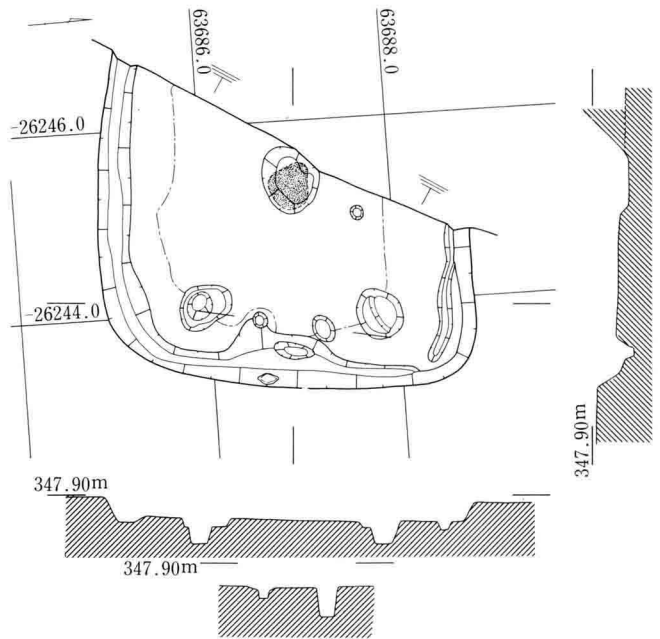


第118図 S A142遺物実測図

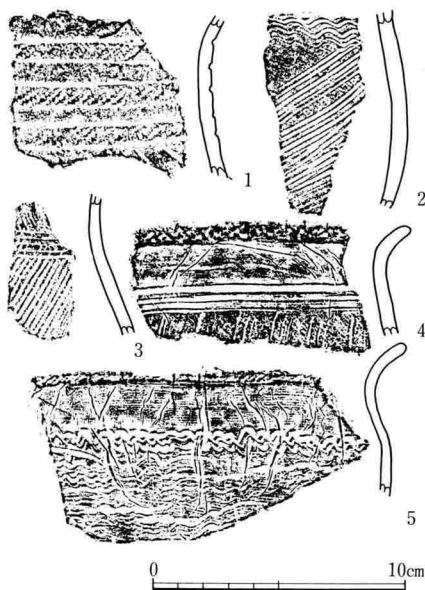
S A143 (E区)

住居西側の半分程が範囲外であるため未調査であるが、南北方向4.00mを測る方形住居であると想定される。支柱穴は壁際近くに2本検出され、長方形配列になるとと思われる。調査区壁際に検出された炉は住居のほぼ中央に位置するものと思われ、底面に火床を検出する浅掘炉となる。また壁際には壁溝が巡り、支柱穴間には出入口に伴う小ピット3本が検出されているが、弥生後期段階で頻繁に観察されるそれと近似する点注目される。

出土土器〔第120図〕には壺(1)と甕(2~5)がある。壺は頸部付近の破片であるが沈線文を主体とした横帯文構成となる。4・5は口縁部破片で頸部には波状文・直線文を施す。2・3は胴部付近で羽状文を施文する。



第119図 S A143実測図



第120図 S A143遺物実測図



写真127 S A143

SA144 (E区)

住居東半分が調査範囲外であるため未検出であるが、南北方向4.44mを測る方形住居と想定される。支柱穴は2本検出され方形配列となるものと思われ、北側には支柱穴が検出されている。範囲内において炉は確認されず壁際には壁溝が巡る。中央付近には浅い落ち込みが検出されたが性格は不明である。

出土土器 [第121図] には壺(1)と甕(2)がある。壺は縄文を施したのち沈線文を施文する。頸部だけに文様帯を持つ。

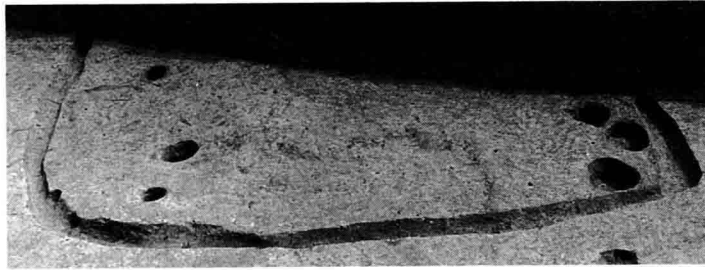
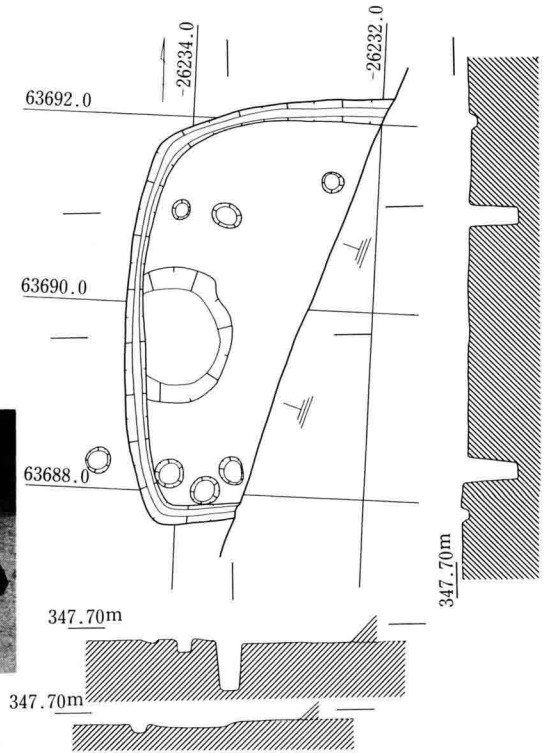
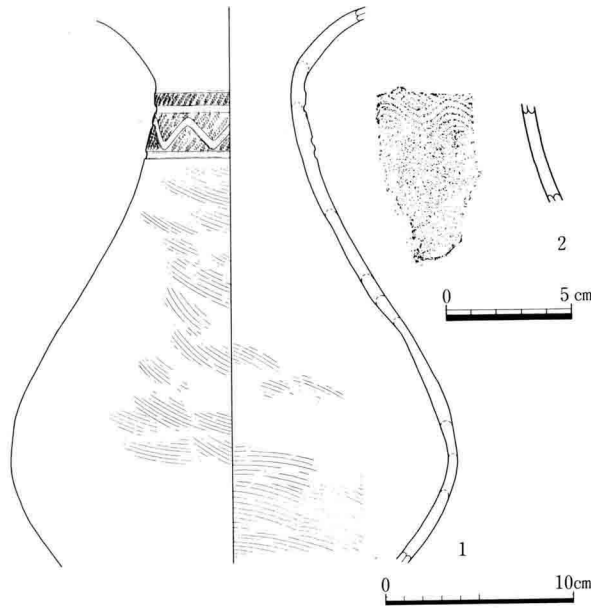


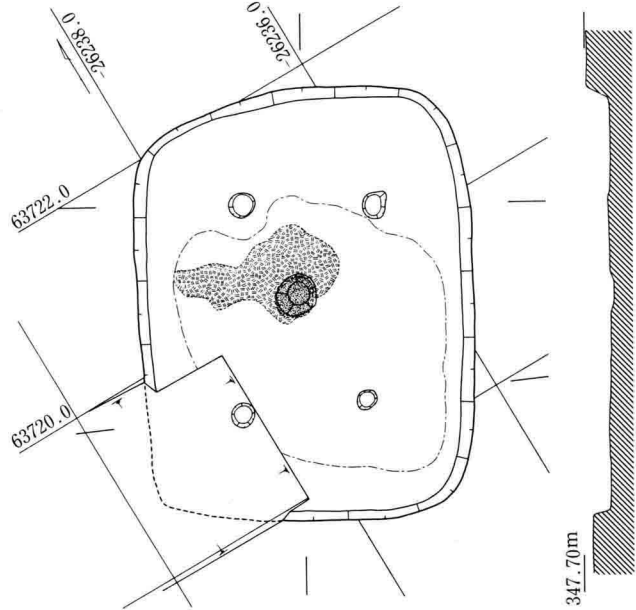
写真128 SA144



第121図 SA144実測図



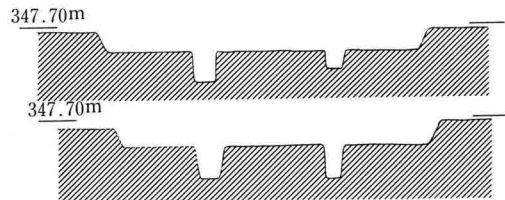
第122図 SA144遺物実測図



SA145 (E区)

住居西隅に攪乱をうけるが4.60m×3.60mを測る長方形住居である。炉は住居中央に位置し地床炉となる。支柱穴は4本長方形配列となる。床面は炉を中心とした支柱穴間内において非常に堅緻である。

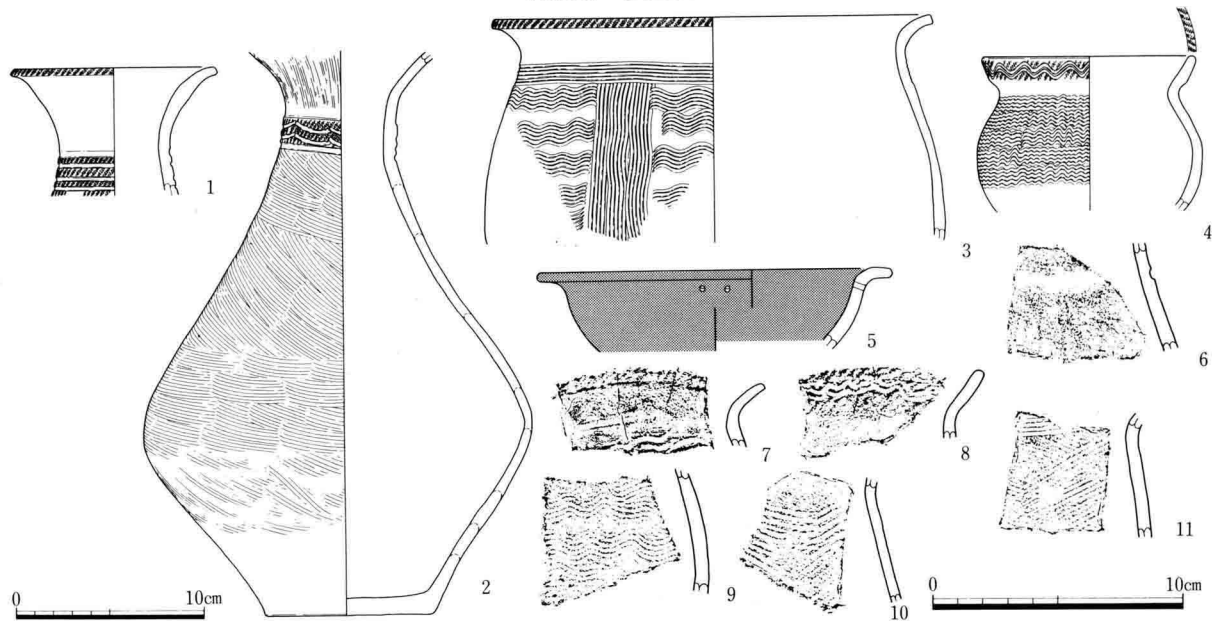
出土土器 [第124図] には壺(1・2・6)、甕(3・7~11)、台付甕(4)、鉢?(5)がある。2は頸部に文様帯を持ち胴部は刷毛調整される。3は縦方向に3条の直線文で区画したのち頸部に直線文を施し胴部には波状文を施文する。4は受け口状の口縁となり、胴部は多段の波状文を施す。5は全面赤彩された鉢と思われるが、下部を欠損するため断言はできない。



第123図 SA145実測図



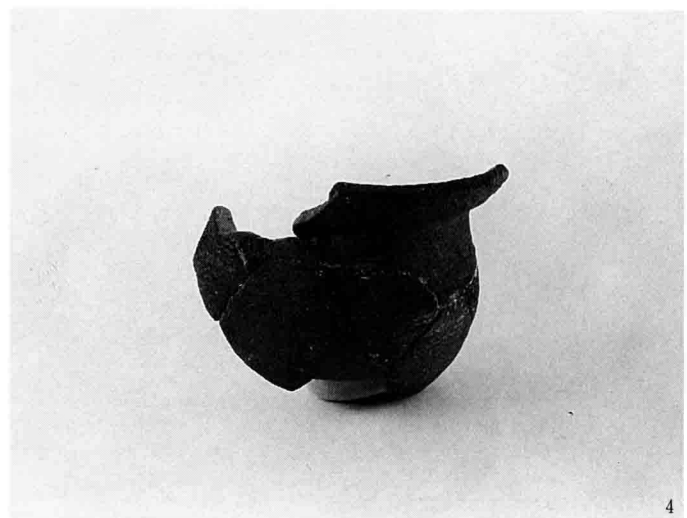
写真129 SA145



第124図 SA145遺物実測図



2



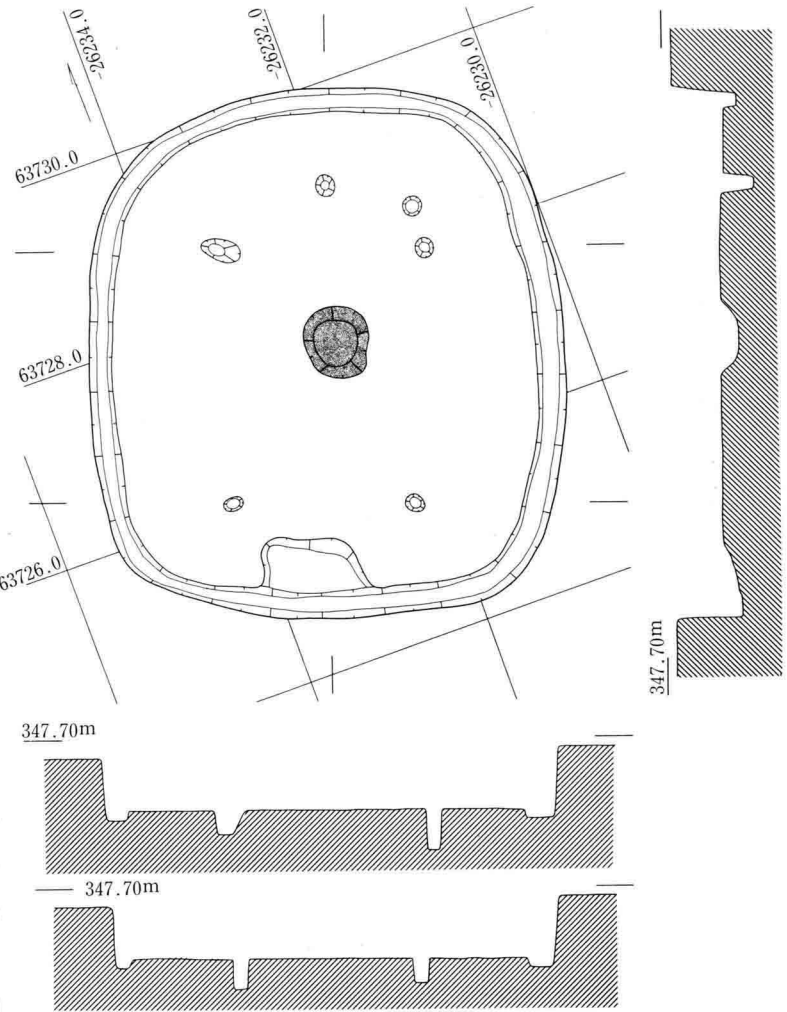
4

写真130 SA145遺物写真

SA146 (E区)

調査区の北端で検出された住居で、5.64m×5.04mを測る隅丸方形住居で他遺構との重複はない。壁及び床面の一部に熱による硬化した部分が観察され、炭化物の出土も多いことから焼失住居であると判断される。主柱穴は4本長方形配列となり、北側には支柱穴が1本検出されている。炉は住居の中央に位置し、床面を20cm程掘り込む深掘炉となり炭化物が堆積している。また南壁際中央付近には深さ15cm程の斜めに掘り込まれた出入口と想定される施設が確認されており、床は全体に軟弱で表面の凹凸が著しい。

土器は住居東隅付近に一括出土している。出土土器 [第126図] には壺 (1・2・10~16)、甕 (3~6・17~21)、鉢 (7)、高杯 (8・9) がある。16は胴上半部の破片であるが、「丩」を呈する矢印文が現状で5箇所に見られる。3は弱い内湾状口縁、4~6は単純口縁を呈し、胴部には羽状文が施文される。7は外面に赤彩、内面は刷毛調整された内湾する鉢で、口縁部に2ヶ一對の小孔が穿たれる。8は脚部内面を除き全面が赤彩され、脚部に二重突帯を巡らし杯部底面を円板充填する。杯部は内湾しながら口縁部に達し、端部が舌状に外反する水平口縁となる。



第125図 SA146実測図

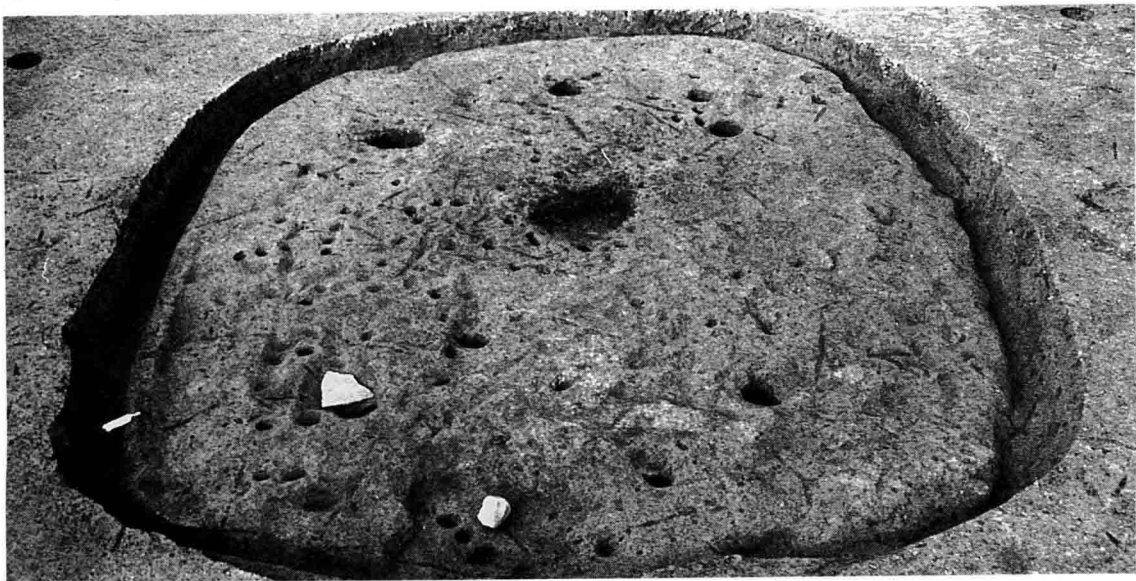
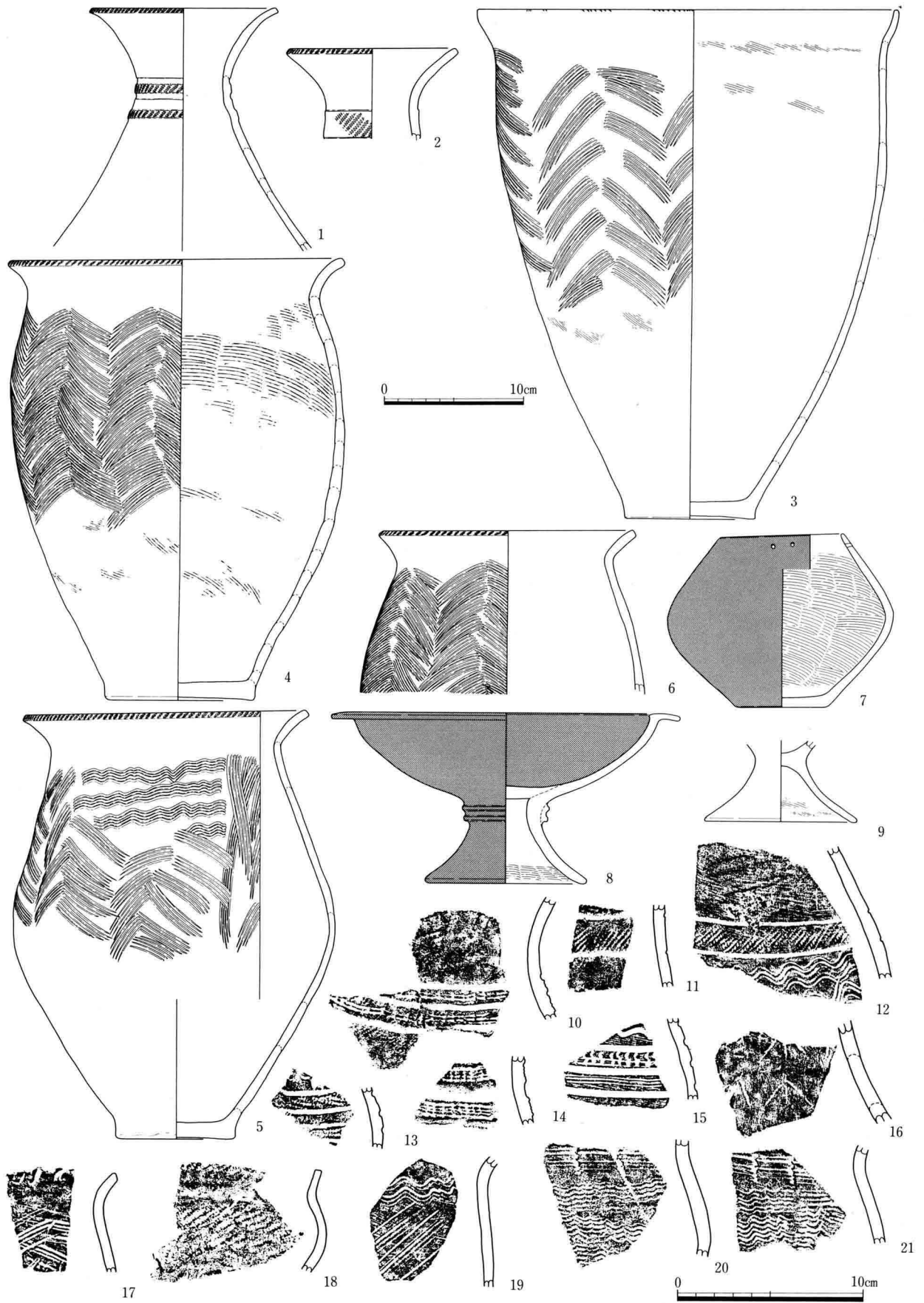


写真131 SA146



第126図 SA146遺物実測図



第127図 SA146遺物出土状況 (S = 1 : 40)

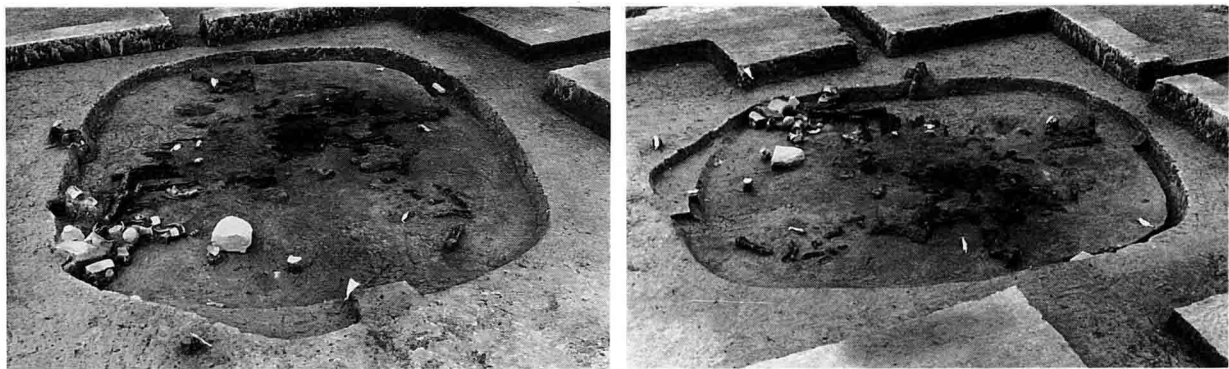


写真132・133 SA146遺物出土状況

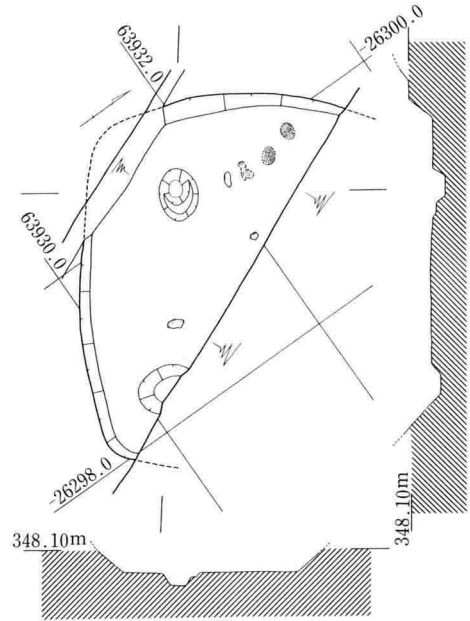


写真134 S A146遺物写真

S A 147 (G区)

G調査区において唯一検出された住居跡である。他遺構との重複はないものの、調査区の検出面幅が2 m弱と非常に狭いため、全体を検出するには至らなかったが、主軸方向3.90mを測る方形住居と想定される。範囲内においては支柱穴が2本検出されたのみで、炉など当住居跡にともなうと見られる他の施設は確認でき得なかった。床面は住居中央付近で非常に堅緻となるが、そのほかは比較的明瞭ながら軟弱となる。

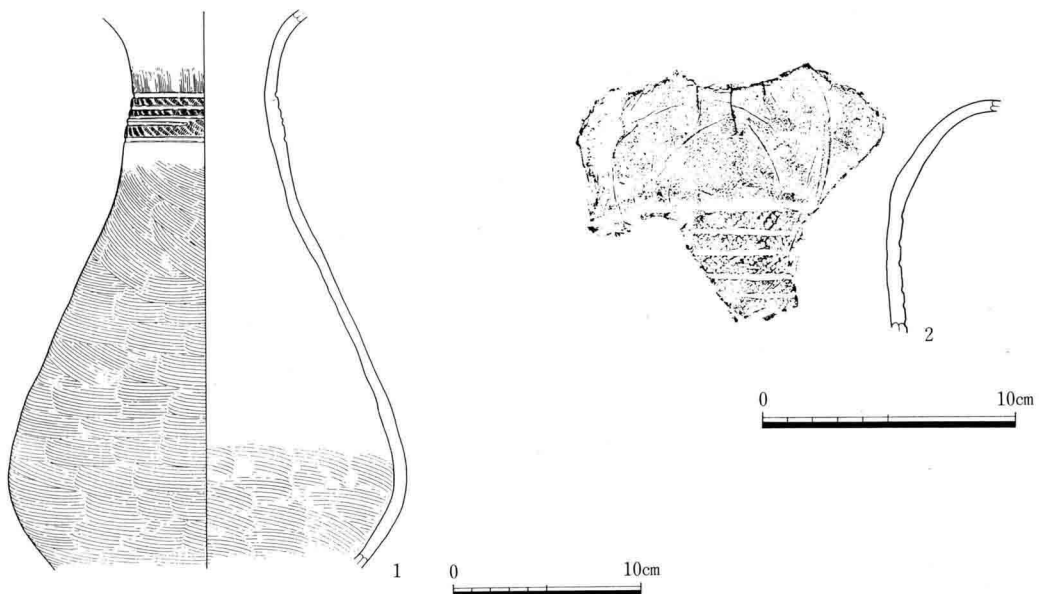
出土土器 [第129図] には壺 (1・2) がある。1は頸部に沈線文を施文したのち、縄文を充填する。文様帯はこの頸部にしか観察されず、胴部付近はハケ調整したのち、軽いヘラミガキを施している。2は頸部に縄文を施したのち、沈線文を施文する。またその下にはわずかながらに山形文が観察される。頸部から口縁部にかけてはハケ調整が施されている。



第128図 S A 147実測図



写真135 S A 147



第129図 S A 147遺物実測図